

三日野の歩みと

その界限

『三日野の歩みとその界隈』の発行にあたって

第三日野小学校同窓会会長 佐藤謙次

開校七〇周年同窓会記念誌によせて

第三日野小学校 校長 大内敏光

## 一章

### 三日野の歩み

(一) 三日野・開校の頃……………(大正一一年～大正一五年)……………8

○開校前の風景 ○大正の子供たち ○校名の由来と大崎村の小学校

○開校にいたるまで ○第三日野尋常小学校の開校

○歩みだした三日野 ○ドッジボール競技日本一

(二) 大正から昭和へ……………(昭和元年～昭和一〇年)……………18

○昭和の時代が始まる ○昭和初期の三日野 ○三日野と共に二八年

○公害病の先駆者 ○テレビジョンの実験

○公式プールと石段観覧席の完成

〔三〕戦争の時代……………(昭和一年〜昭和二〇年)……………24

○戦争のあしどと ○三日野のあしどり ○太平洋戦争の勃発

○戦時の学校 ○学童疎開の日々 ○空襲による校舎炎上

○終戦と作家・吉川英治

〔四〕復興の時代……………(昭和二〇年〜昭和三〇年)……………35

○間借り教室へ通う道 ○校舎の再建と二部授業

○恩師・旧友との再会 ○戦後の学校給食始まる ○PTAの発足

○再建のすすむ三日野 ○再開されたプール

○開校三〇周年と講和条約 ○校歌のできるまで

〔五〕豊かな日本……………(昭和三一年〜昭和五〇年)……………43

○もはや戦後ではない ○小学校はすし詰め教室

○三日野合唱団の活躍 ○池田山の皇太子妃殿下

○緑のおばさんの登場 ○屋内体育館の完成

○合唱の歌声は全国に ○東京オリンピックの聖火

○月面着陸とッいもりッ ○少年消防クラブの活躍

〔六〕 国際交流の時代……………(昭和五一年〜昭和六〇年)……………53

○国際交流は北の国から ○日本と中国の国交回復

○三日野と中国の小学校が兄弟校に ○中国からのお客さま

○三日野同窓会の再開 ○丘の上の校庭

〔七〕 現代の三日野……………(昭和六一年〜平成四年)……………58

○継続する中国との交流 ○新体育館と新プールの完成

○石のすべり台の記念碑 ○七〇年の歩みと明日への旅立ち

## 二 章

### 三日野の界限

〔一〕 三日野の周辺……………66

〔池田山あたり〕

○池田山の今昔 ○全国に知られる池田山



〔寺町のあたり〕

- 寺町の成立
- 江戸時代のたたずまい
- 寺々のこと
- 今はなくなった寺社

〔二〕目黒駅の周辺……………78

- 目黒駅あれこれ
- 誕生八幡神社と高福院
- 権之助坂と行人坂

〔三〕五反田駅の周辺……………85

- 五反田駅あれこれ
- 雛子神社と宝塔寺・本立寺・寿昌寺
- 袖ヶ崎神社と了真寺
- 桜田街道と相生坂

〔四〕長者丸と中丸の周辺……………92

- 消えた町名
- 長者丸風景
- 中丸の町並み
- 江戸の名残・三田用水の流れ
- 国立自然教育園
- 東京都庭園美術館

# 『三日野の歩みとその界限』の発行にあたって

第三日野小学校同窓会 会長 佐藤謙次

第三日野小学校の創立七十周年、おめでとうございます。同窓会を代表して心からお祝いの言葉を申し上げます。さてこの七十年間には、祖父母・父母・その子弟というように三代にわたる方々を初め、既に一人に近い同窓生が本校を卒業し、今や中・高・大学で勉強する者、社会人として各界で活躍される方々、あるいはその業を終えて自適の生活を送る人々と、それぞれに、お元気でこの秋を迎えられたことを大慶に存じます。

一と昔前、創立六十周年を迎えて後、新しい体育館が建ち、次いでプール改修の機会に大野前校長の肝入りで、同窓生にとつての思い出の一つ―滑り台の頭部を、学校とPTAと同窓会との協同によって、校庭の北西隅に残すことができました。

今回、七十周年を迎えて私たちは、母校の沿革や学校周辺の歴史などを収録して、この冊子を刊行しました。執筆編集には、加藤金一副会長・朝倉通彦副幹事長が主として担当されました。また、発刊に当たり、地域の町会長はじめ住民の各位、塚田PTA会長はじめ会員の皆様、そして同窓会会員、役員・幹事の方々等、多方面の御支援と御協力を賜りました。記して深甚の謝意を申し上げます。―文化の継承こそが教育のいとなみであることを思う時、子どもと父母と教師との心の触れ合いの軌跡を書き留めながら、それを次代に語り継ぐ一つのてたとして、この冊子が役立つことを願ってやみません。

## 開校七十周年同窓会記念誌によせて

品川区立第三日野小学校 校長 大内 敏 光

わが第三日野小学校が開校七十周年を迎えるに当たって、記念誌を発行しようという声が同窓会からも挙がったとき、正直に言つて私はいささか驚いた。というのも、学校が発行した記念誌は両手に抱えても余るほどもっているけれど、同窓会が発行した記念誌というのは、小学校関係のものでは所有していなかったからである。そのようなわけで、その意気込みやよしとするものの、果たして日の目を見ることができるのであるうかという危惧が、無意識のうちに働いていたのかもしれない。ところが、それがいかに失礼な憶測であつたかを、こうしてこの記念誌を手にするに至つて思い知らされた次第である。

学校の作つた記念誌は「過去をふり返り、現在を見つめ直し、将来を展望する」という三つの視点から編集したが、それを補つて余りある充実した内容でこの記念誌ができたことに、尊敬と感謝の念を禁じえないものである。「故きを温ねて新しきを知らば、以て師となるべし」とはあまりにも有名な『論語』の一節である。この記念誌が教えてくれる三日野の生い立ちや三日野周辺の様子は、「温故知新」よろしく新たなる出発への指針と勇氣を私たちに与えてくれるのである。

三日野を愛し、三日野を誇りにする同窓生に支えられて、三日野は永久に不滅である。学校から池田山へ、池田山から大空へと流れて行く風に乗って、未来へと旅立ちたい。

## 三日野の歩み

## 〔一〕三日野・開校の頃

(大正一一年〜大正一五年)

## ○開校前の風景

第三日野小学校は今から七〇年前の大正一一年（一九二二）四月に開校された。その頃、この辺りはどんな風景であつたのであろうか。

ここは周囲を小高い丘に囲まれた細長い谷間で、<sup>たに</sup>「篠の谷」と呼ばれ、今の三日野のところは田圃になつていた。田圃や畑は五反田、白金にいたる高台のすそまでつづき、田には畦道がはしり小川には小魚が泳いでいた。白金によつた「三田用水」の流れには水車が回つていた。この水車は今もあるお米屋さんで精米をしていたものである。郊外の一寒村という風景で、当時、この辺りを東京府下荏原郡と言つていた。近くは森には狐や狸が生息し、夜更けになると狐の鳴き声が聞こえていた。

学校の上にある丘の地名は平岡といい、現在の池田

山（東五反田五丁目）で、備前山とも呼ばれていた。ここには旧、備前岡山藩主、池田侯爵のお屋敷があつたからである。今のインドネシア大使館のあたりにお屋敷があり、美しい桜の樹がたくさん植えられ、桜御殿などと呼ばれ春には見事な桜が咲いていた。明治三八年（一九〇五）には明治天皇がこの屋敷に行幸されたと聞く。池田山の南端にある見晴らし台には大きな老松がそびえ、五反田の町が一望に見渡される。晴れた日には遠く品川の海が望まれ、海がキラキラと光つて見えていたという。

『東京芝白金の近郊に谷峽が三つ寄つた所がある。そこは、あちらもこちらも滴るばかりの緑翠で飾られているのでただ谷間の湿っぽい去年の稲の株がまだ覆されてない田圃だけに緑がない。大崎の方に寄つた谷の奥には大きな雲の上に出るような大杉が幾十本となしに生えている。そこは池田侯爵の屋敷である。白金の岡にはお寺が一軒二軒、中の岡には屋敷もなければ寺もない。細い栗、檜、樺が三十本六十本と生えている。五月の初めであつた。ある日本晴れの日にこのまん中の岡の森陰に、草を敷いて横になって、本を読んでいた者があつた。』

この文章は、大正・昭和初期にミリオンセラーとなつた賀川豊彦著『死線を越えて』の冒頭書き出しの部分である。この著作はキリスト教を根底にした社会主義の思想を実践した自伝的小説であり、当時、非常にたくさんの人々に読まれ感銘を与えた。

作者が明治学院に通っていた頃、この辺りを散策にしばしば訪れたのであろう。この本の発刊は大正九年であり、三日野が開校する少し前のこの辺りのようすが詳しく描写されている。

### ○大正の子供たち

三日野が開校された大正一一年頃の日本はどんな時代だったのであろうか。明治の「富国強兵の時代」と昭和の初期から二〇年にいたる「戦争の時代」にはさまれた谷合いに、つかの間の自由の風が吹いた「大正デモクラシーの時代」であつた。

この自由な風は子供の世界にもおよび、小学校の教育は明治時代の国家主義的で画一的なものから、子供の個性を伸ばす自由な教育がとりいれられるようになり、例えば、図画など、これまでは手本を忠実になぞることが大切とされていたが、この頃は自由な題材を

描き個性を伸ばすことが提唱されるようになった。

子供の雑誌にもその流れを見ることが出来る。大正九年に鈴木三重吉によって発刊された月刊の『赤い鳥』は、子供たちに美しい優れた物語や詩を与え、島崎藤村・芥川龍之介・北原白秋など当代一流の作家によって子供たちの夢を育んだ。

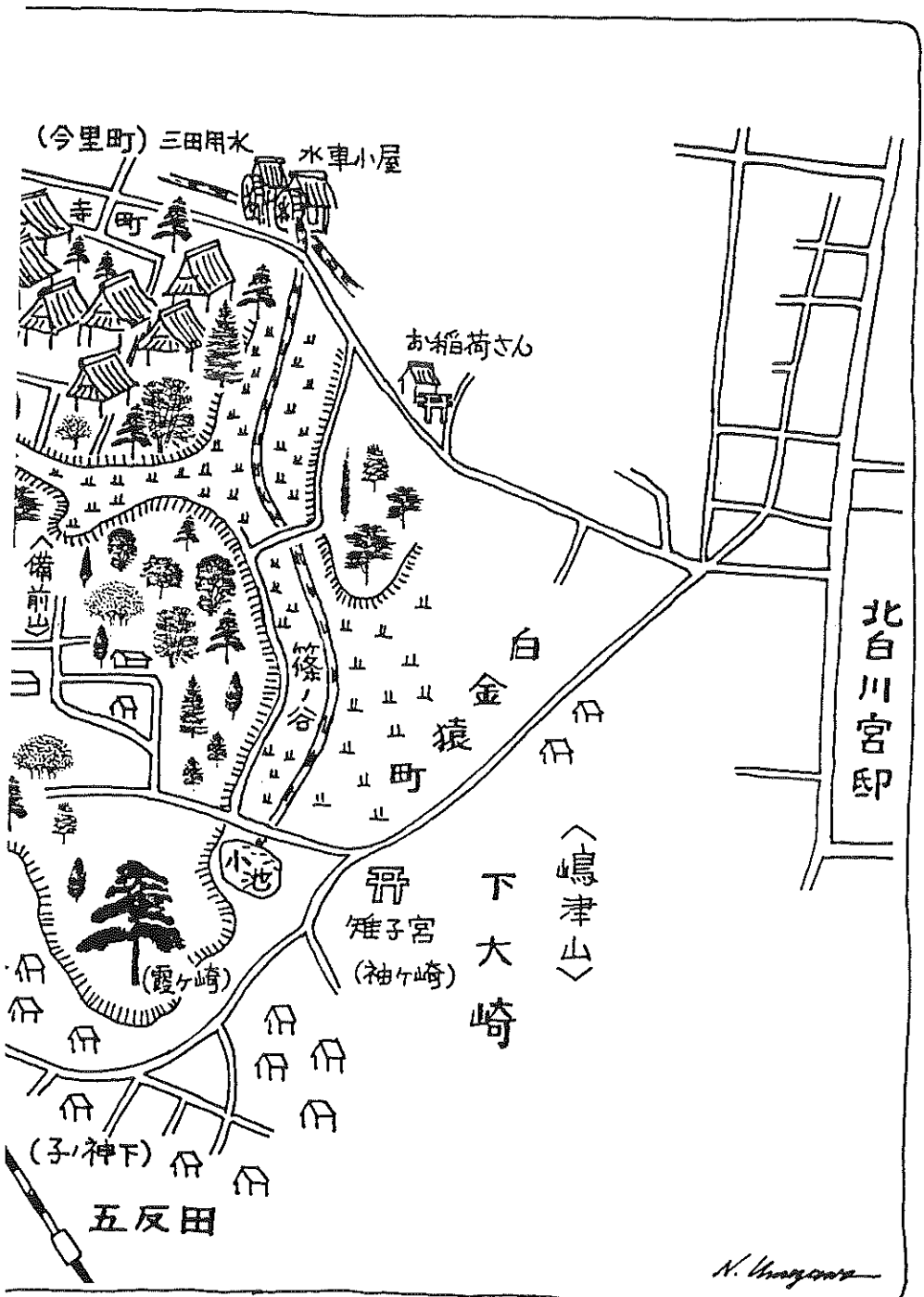
社会全体が子供の世界に目を向けられた時代である。当時の文壇人がこぞって執筆し、子供の美しい情緒や空想の歌がつけられ、「童謡」という言葉もこの頃に定着した。

後年、我われの母校、三日野の校歌を作詞した西条八十も『赤い鳥』で活躍した詩人のひとりである。

三日野が開校された大正一一年には小学館から『小学五年生』『小学六年生』が発刊され、つぎつぎに学年別の子供雑誌が発行されるなど、多くの子供向け雑誌が発刊された時代でもある。

### ○校名の由来と大崎村の小学校

江戸時代も幕末の頃、慶応元年（一八六五）に下大崎村（現在の東五反田三丁目）の本立寺の住職によって開かれた「太雅堂」、永峯（ながみね）（現在の上大崎二丁目）



(今里町) 三田用水 水車小屋

寺町

お稲荷さん

北白川宮邸

白  
金  
猿  
町

〈嶋津山〉

下大崎

丹  
雉子宮  
(袖ヶ崎)

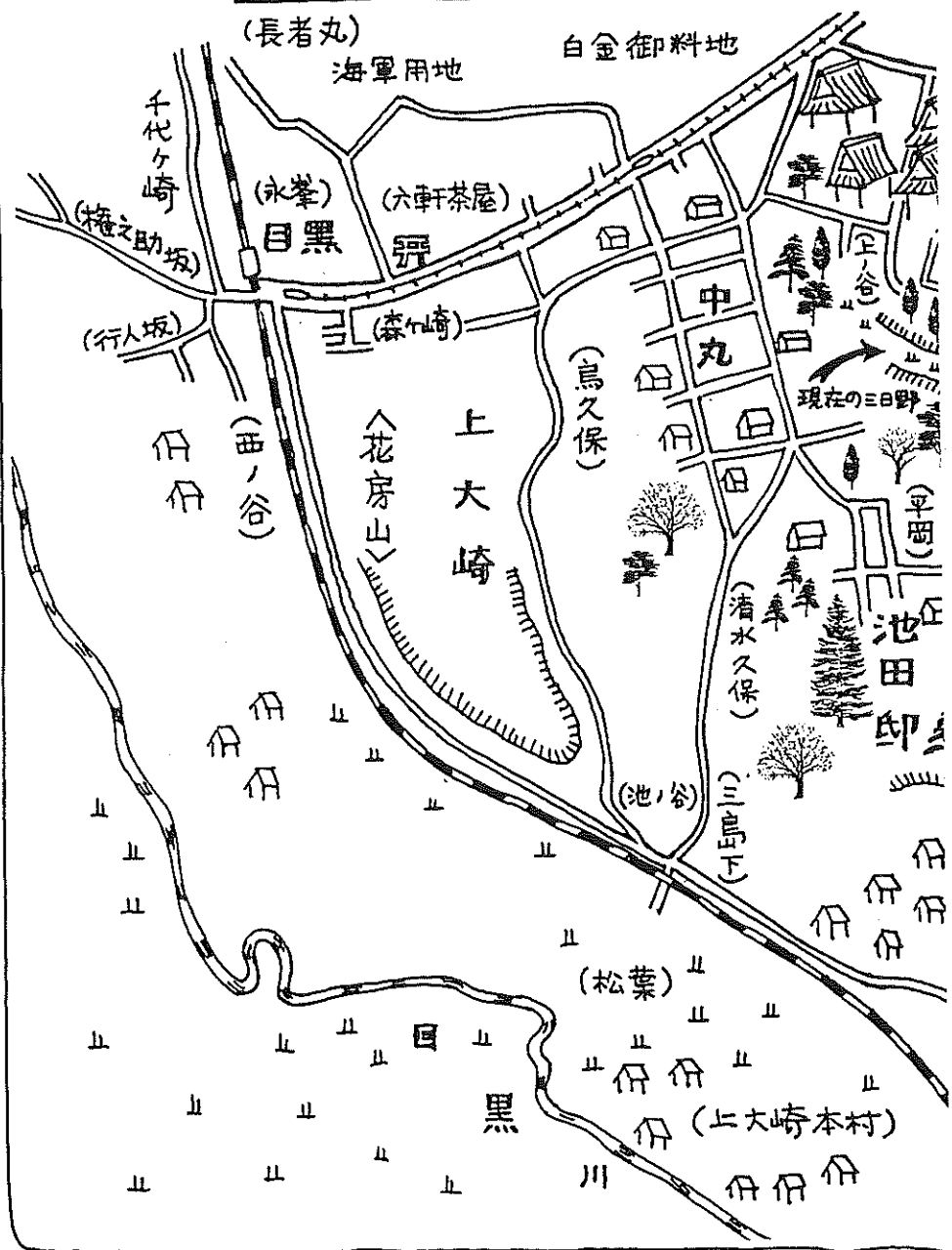
霞ヶ崎

(子神下)

五反田

N. Unagisawa

# 開校前の三日野周辺



には「乾々堂」という寺子屋があり、この辺りの子供に「読み書きそろばん」を教えていた。

明治時代になり、政府は明治四年（一八七二）に文部省を設置し、翌年には学制發布を行い初等教育を重視し小学校設立を奨励した。明治六年には師範学校編の「小学読本」が発行され、明治八年までに全国に二万四二〇〇余の小学校ができていた。

しかし、この大崎村にはすぐに公立の小学校はできず、明治七年（一八七四）に上大崎村と谷山村（現在の西五反田三丁目）が共同で永峯に「公立第八番小学富士見学校」がつけられ堀小太郎、前田半という二人の教師を迎え授業を始めたが、明治九年になって廃止されている。

これに代わって、明治一〇年（一八七七）に上大崎村の徳蔵寺（西五反田三丁目）に私立学校がつけられたが、特に校名はつけられていなかった。徳蔵寺の住職、野田元海と前田半の二氏が教師となり、この学校が公立小学校へと発展していくことになる。

明治一一年（一八七八）八月に上大崎村、下大崎村、谷山村、居木橋村の四つの村が連合して東京府庁の認可を得て、徳蔵寺のお堂を借り公共小学校「第二中学

区第十番公立小学日野学校」が設立され、これが第一日野小学校の前身となった。

ここに日野学校と名付けられたいきさつだが、日野という地名はこの辺りには見当らず不思議に思われるが、校名を付ける段になり、共立した四カ村が互いに自分の村の名を小学校の名前につけようとして紛糾した。そこで、中世の荘園制の時代までさかのぼるのだが、現在の東京都多摩の日野市一帯に根拠地を持っていた日野宗頼が、その頃、この地域まで勢力を広げ、この地方一帯まで支配し、この辺りは「日野の庄」あるいは「日野の郷」と言われていた。この故事によって日野と命名された。その後、この地区に小学校が増設されていくごとに、第一、第二、第三日野と校名が順次つけられていった。

学校命名の公平のために何世紀も前の故事を引き合いに出した智恵と苦労がしのばれるが、江戸時代の旧家に残る帳面の所書きに「日野の庄、下大崎村」と書かれていたというから、かなり後まで日野と呼ばれていたようである。徳蔵寺の境内には大崎地区の日野小学校発祥の地の記念碑がある。余談になるが多摩の日野市には日野第三小学校がある。



母校、第三日野小学校は、世代によって「第三」あるいは「三日野」と呼ばれ、卒業生にとって、呼び方に対する馴染み方に微妙な差を感じるようだが、本誌では「三日野」として書きすすめていくことにする。

### ○ 開校にいたるまで

第一次世界大戦（一九一四―一九一八）は連合国側の勝利となり、一九一九年一月のパリ講和会議をもってこの大戦は終結した。

日本は戦勝国となり、樺太（オホーツク）から南洋諸島にわたる広大な委任統治領を認められ、中国におけるドイツ権益など大きなドイツの遺産を受け継ぎ、資本主義社会の中で大国の一員となり好景気となった日本は、経済の状況も好転し世界の強国となった。

この情勢を反映して、この頃から目黒川に沿った大崎地区に多くの工場が建ち始め、明治四四年（一九一〇）ころに八工場だったのが、大正一〇年（一九二一）には一三一工場になり、一六倍にも工場が急増していった。これにともなう工場に働く人たちの家族が、この地域に移り住むようになり、商店も増え大崎町の人々の増加が著しくなった。この地域に移り住んだ人々

の子弟を、既存の第一、第二日野、各小学校で収容しきれなくなり、新たな小学校の設立が望まれていた。

大正九年（一九二〇）二月、大崎町町長、立石知満氏は小学校の設立を発意し、大崎町議会で尋常小学校が設立されることが決定された。新たな小学校の設置場所は選定の結果、現在の場所に決められたのである。

ここは当時、東京府荏原郡大崎町上大崎一丁目五二番地といい、鳥山家所有の田圃があった。このとき、この近くに住んでいた、荏原郡会議員の土屋興（おき）氏がこの土地を買い取り、田圃を埋め立て整地し学校用地とした。その費用は半分は大崎町が負担し、後の半分は土屋氏が寄付してくれたものであるという。大正一〇年七月三〇日に一、七七三坪の敷地に八万九、九四五円の費用をもって工事が着工され、新しい小学校、第三日野尋常小学校の施設は、翌、大正一一年三月二一日に完成した。

### ○ 第三日野尋常小学校の開校

大正一一年（一九二二）四月、「東京府荏原郡第三日野尋常小学校」が開校した。初代校長には第二日野小学校から吉澤光義先生が就任した。当時、池田山の

下にあった二日野に通学していた児童およそ八〇〇人が発足した三日野に移り、新たに一年生に入学した児童を加え授業が開始された。

このとき二日野から移った六年生が、三日野の第一回の卒業生であり、通算六年間在学した卒業生は、開校のとき入学した一年生である。五月二日には開校式が挙行され、この日をもって第三日野小学校の創立記念日としている。現在、品川区の小学校四〇校中で一〇番目に開校したことになる。

四月には授業が開始され、新築の校舎は木造であったが、当時としては立派なものであった。しかし、学校の中には、まだ工事中のところもあり、神戸坂（学校の石垣の上の坂）の校庭に面した崖は毎日、石工さんが大谷石を削り石垣を組み上げる仕事をしていて、鑿の音が教室まで響き、窓から石工さんの仕事がよく見えた。校庭にはまだ空き地があり、そこは畑になっていて野菜などが植えられていた。

三日野の第一回の卒業生である、新免（旧姓・今井）千代子さんの話によると、五年生までは池田山の下にあった二日野に通っていたが、六年生になる時に三日野ができて、新しい小学校に移ったのだが、同じクラ



開校の頃の校舎と吉澤光義初代校長

スの中で二日野へ残る子供と三日野のへ移る子供とが別れることになり、とても淋しい思いをしたという。

担任の葛生庄一郎先生も一緒に三日野に移り、新しい六年生は男組、女組、男女組の三クラスであったという。葛生先生はクラスの中で友達同士が助け合い、お互いに分からないところは教え合つて勉強をするよう指導される優しい先生だつたと語っている。

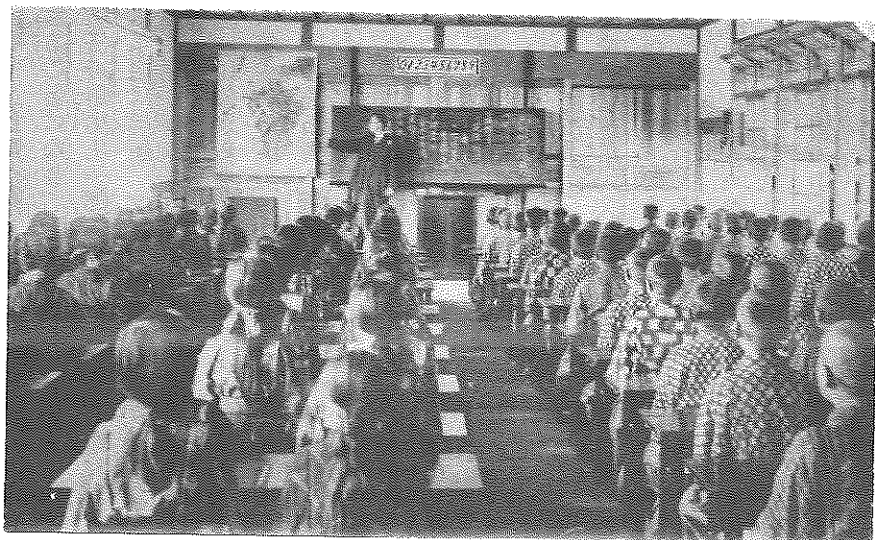
当時の三日野へ通つていた多くの子供たちの服装は、男子は木綿のかすりの着物と袴、女子は着物に羽織、ひだのついたセルの袴姿で、ほとんどが下駄や草履ばかりで、洋服の子は珍しかった。教室の暖房には火鉢がおいてあつたということである。

### ○歩みだした三日野

開校した翌年、大正一二年九月一日に起つた関東大震災は東京の下町を中心に大きな被害を引き起したが、幸い学校の校舎などには被害がなく、一部、塀が崩れた程度にとどまつたという。東京でもこの地域は比較的被害が少なく、この付近では上大崎の北の端（現在の自然教育園の中）にあつた陸軍衛生材料廠の火葉倉庫が焼けたが、破壊消防活動のおかげで約三〇棟の被

害にとどまつた。目黒・五反田近辺の住宅もほとんど被害はなかつたが、罹災した下町から避難してくる人たちのために、この地域の人たちは「炊き出し」にあつたが、つづく余震のために夜は、この辺りの家の人たちも二、三日は外の縁台で寝たという。夜になると下町や横浜方面の大火災のため空が真っ赤に見えたということである。その後、市中の罹災者の多くが当時郊外であつたこの地区に移り住むようになり、ますます大崎町の人口が増え三日野へ通う子供たちの数も増えていった。

開校された三日野は、当時でもめずらしいほど設備が完備されていた。木造二階建の校舎には一八教室があつた。大正一四年（一九二五）六月には保護者会によつて、現在の正門付近に小さいながらプール（縦・五間×横・三間）が造られ、また、翌、一五年七月には同じく保護者会によつて、現在のプールのある場所に本格的なプール（縦・二二m×横・五・二m）が完成した。このプールは荏原郡（現在の品川区）で唯一最初のものであつた。勿論、二つもプールを持つてい学校などなく、小さい方は低学年、大きい方は高学年用として使われた。



開校当時（大正時代）の授業風景

この大プールの建設費は一、三七八円であったという。「値段の風俗史」（朝日新聞社刊）によると、この頃の公務員の初任給が七五円、アップライトのピアノが五五〇円、一、三〇〇円とある。ピアノ一台分でプールができたことになるが、当時ピアノがよほど高級品であったのであろう。

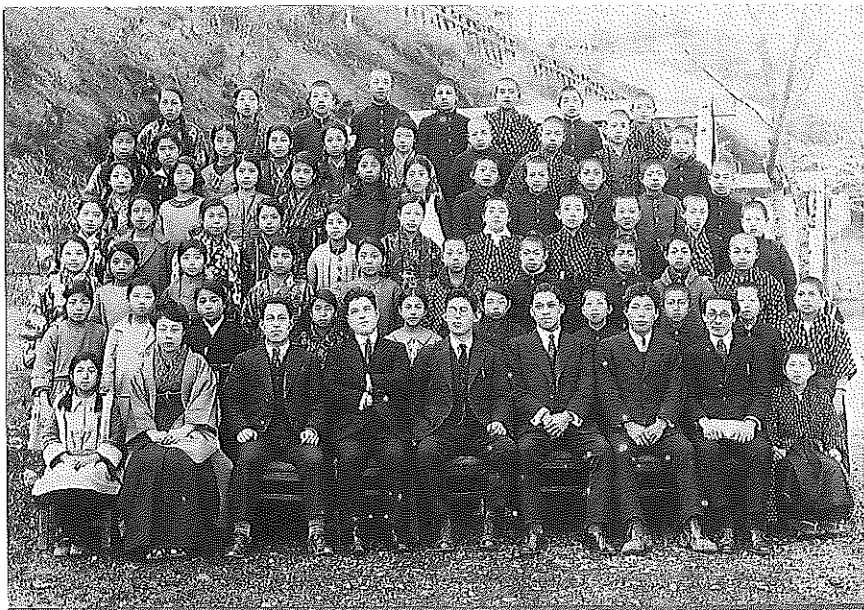
また、このプールには現在、三日野で使われている埋込式プールのように蓋が<sup>かた</sup>あったのだが、今と違い木製だったために、残念なことにより、二年で腐ってしまい使いものにならなくなり、後に造りかえられたという後日談がある。

現在の石段のところにある「石のすべり台記念碑」の下あたりに、「禽舎」として、広さおよそ三〇<sup>m</sup>ほどの六角形をしたコンクリート製の通称「六角池」があり、金網で覆いがつけられた動物園にでもあるような立派な動物舎で、その中には鳥や亀・魚などいろいろな動物が飼育されていた。また、石段のところには記念碑として残っている「石のすべり台」もこの頃に作られたものである。

### ○ドッジボール競技日本一

校舎など学校の施設は整ったのだが、この頃ひとつ困ったことがあった。ここがもと田圃であったためか、校庭は雨が降ると水溜りができ、大雨でも降ろうものなら泥田のようにぬかるみ、小さい子供では歩くのもままならぬ程だった。晴天がつづき風が吹けば土ボコリがひどく、とても閉口したものだという。当時、三日野のこの校庭でドッジボールが盛んに行われたという。この土ボコリの校庭と関係があったのかは別として、土の校庭でできるスポーツに一番合っていたのかもしれない。

大正一五年、(一九二六)明治神宮の競技場で行われた、ドッジボールの全国大会で三日野が優勝し日本一となった。翌年、昭和二年の荏原郡大会にも優勝した。名を馳せた三日野には、その後、隣の白金小学校や荏原郡の方々の学校から他流試合に来るなど、ますますドッジボール熱が盛んになった。



大正14年の卒業写真。着物姿の子供も多い

## 〔二〕 大正から昭和へ

(昭和元年～昭和一〇年)

### ○ 昭和の時代が始まる

大正天皇の崩御で「大正」時代は終わり、大正一五年（一九二六）二月二十五日、年号は大正から「昭和」へと改まった。

昭和元年はわずか七日間で終わり、新しい時代は動きだしたが、昭和と代わって三か月経った、二年の三月には金融恐慌が起り株は大暴落し、大きな会社や銀行などの倒産が相次ぎ、銀行には「取りつけ」が起るなど大きな不況の波に襲われた。五月になると中国では、蒋介石主席の中国国民政府軍が華北地方に北伐の軍を進めると、これに対して日本人居留民保護の名目をもって日本軍が出兵し、軍事介入するという「第一次山東出兵」が起った。

昭和三年（一九二八）六月には中国軍閥・張作霖の乗った列車が奉天郊外で爆破され爆死するという事件が起り、事件直後は中国人による暗殺と発表されたが、事実は日本の関東軍高級参謀の謀略であった事が判明するが、政府は「満州某重大事件」として国民の前には事実を隠し報道することによって軍部の独走を

許す結果となった。

また、この年に「治安維持法」が重罰に改定され、この法律によって反政府活動に対して取締りが強化され、自由主義者や社会主義者に弾圧が加えられるなど、大正デモクラシーは否定され軍国時代となってゆく。「昭和」は前途多難な幕開けとなった。

### ○ 昭和初期の三日野

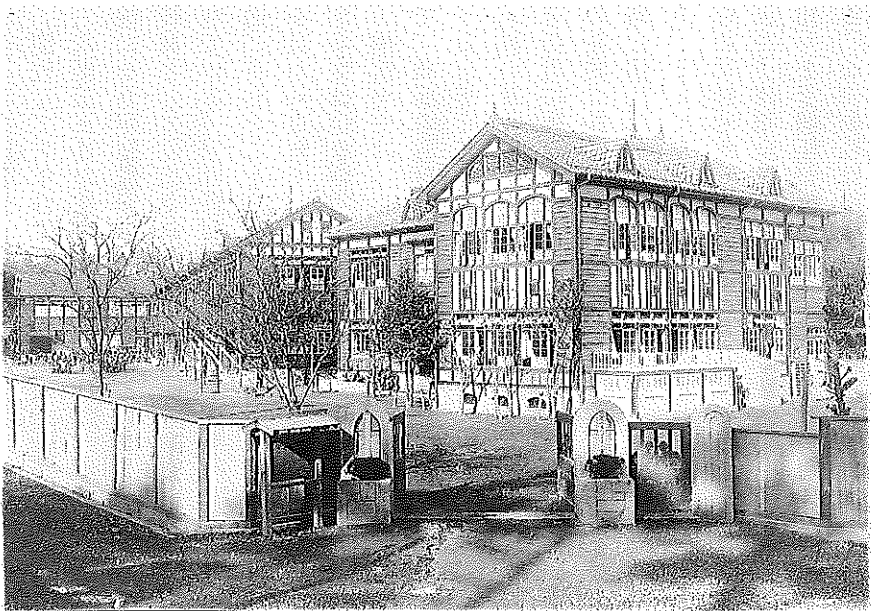
昭和二年（一九二七）三月、初代、吉澤光義校長に代わって、第二代校長として市原文治先生が就任した。昭和四年（一九二九）五月には学校の敷地が拡張され一九五坪が増えた。この買収価格は一三、六四五円であったという。これに伴う道路付け替え工事も行われ、三日野の総敷地面積は一、九二五坪となった。この年の一月一三日、小橋一太文部大臣が来校し、三日野を視察された。三日野の児童は校庭に並び、文部大臣の訓辞を聞いたという。当時、小橋文部大臣は中丸の近く（現在の上大崎三丁目）に住んでいたのだが、その頃、まだ数も少なく珍しかった自動車は何台も学校の前に並び、文部大臣閣下を迎えた子供たちの緊張した顔が思いうかぶ。

昭和四、五年の頃、三日野の校庭には桜の花が満開の春のことであった。校庭の一番奥のカギ形になったところの二階が唱歌室（音楽室）になっていた。今日は唱歌の先生がお休みで担任の平林寿夫先生がピアノをひいて音楽の時間が始まった。先生のひくピアノの曲は唱歌の教科書にはない。

七十五里の波の上／かもめも飛ばず島もなく／ふする姿や富士の山……

「遠州灘」という歌である。子供たちには意味がよく分からないところもあったが、先生と一緒に何回も歌った曲で、聞き覚えていて、何回も繰返し少しヤケ気味で歌っていた。ピアノが一息つくと、神戸坂の上からクラリネットと小太鼓の音が聞こえ、歌に合わせた曲が聞こえてきた。坂の上でひと休みしていたチンドン屋さんが「七十五里」の伴奏を始めたのである。よし、それならと皆んな立ち上がり、見事な伴奏に応えて子供たちは、大きな声を張り上げて歌いだした。崖の上から桜の花びらとジンタの音が散りかかる、のどかな時代のことだった。

その後、特別教室の建設が計画され、このため正門のところにあった小さいプールが壊され、その場所に



昭和初期の正門・校舎

建築工事が始まった。昭和七年（一九三二）八月には理科室・音楽室・工作室・裁縫室・作法室などの特別教室が完成し、学校の施設は一層充実したものになる。この年、七年の一〇月、東京市は五郡八二町村を合併し二〇区を新設し三五区となり、東京市の人口はおよそ四九七万人となった。この地区の荏原郡は東京市に編入され、荏原区と品川区が新設され、校名も「東京市第三日野小学校」と変更された。

昭和八（一九三三）年四月から、一年生用は『サイタサイタ サクラガサイタ』で始まる、初めて色刷りとなった国定小学校国語教科書が使用されるようになった。この教科書は昭和一五年（一九四〇）まで使用された。

### ○三日野と共に二八年

「昭和」と年号が代わって一週間後、昭和二年（一九二七）一月一日に三日野へ国広伴六先生が赴任された。当時、元旦と紀元節、天長節は三大節といって、その祝日には子供たちは登校し学校で式典が行われた。式典が終わると、お菓子やミカンなどをもらうという学校の年中行事があった。その一つの正月元旦の式典当日に、初めて三日野に赴任した国広先生は、そのと

きのことを印象強く覚えていた。

開校して五年目に赴任して以来、戦前、戦後を通じ、二八年三カ月の長きにわたり三日野へ奉職された。戦後になり昭和二年からは教頭として、昭和三年に校長として転出されるまで二八回の卒業生を送り出されている。三日野前半の歴史の中で半生をこの学校で過ごされたことになる。いつも静かに優しく子供たちを見つめられていた、温厚篤実な国広先生を知らない卒業生はいない。

国広先生は「心に残る戦前の正面玄関付近」と題して、戦前の三日野のようすと印象を記した次のような一文を寄せて下さった。

『長い校舎の中央に正面玄関があり、廊下をはさんでその奥に両陛下のご真影を祀る奉安殿があつて、玄関の左側は教員室、右側は普通教室、校庭に出てすぐ右側に朝礼台があつて、これに沿うて国旗の掲揚塔があり、そして左側にだいじに仕切られた中で高さ一米半位の月桂樹が一本濃緑色の葉っぱで目を楽しませてくれた。毎朝全員ここに集まって厳肅な中に親しみある和やかな朝礼が行われ、一日の学習が始まったのである。この朝礼はほんの僅かな時間ではあるが、たくさ



んのやさしい目、たくさんのにこやかな顔が一つにま  
とまり心深く焼きついて、施設は何一つ残っていない  
のに、半世紀たった今も、昨日、今日のようにはつき  
りとその情景がなつかしく胸に浮かんでくる。』

今年の八月、真夏の暑い日に記念誌取材のために国  
広先生のもとを訪れたが、先生は八九才のご高齢にな  
られ、今なおかくしゃくとしてお元気に過ごしておら  
れた。多くの資料を準備され、端座して丁寧に取材に  
応じて下さる姿にお人柄がしのばれる。三日野の歩み  
と共に二八年と三ヵ月間の、さまざまな貴重な学校の  
歴史を語って下さった。

今年(平成四年)の三月には三日野時代の教え子た  
ちによって、米寿のお祝いが催され、その時のよう  
すを楽しそうに語られ、すでに孫もいようという教え  
子たちが、お祝いに贈った、木彫りの「翁の面」と先  
生のお顔が重なるようであった。

### ○公害病の先駆者

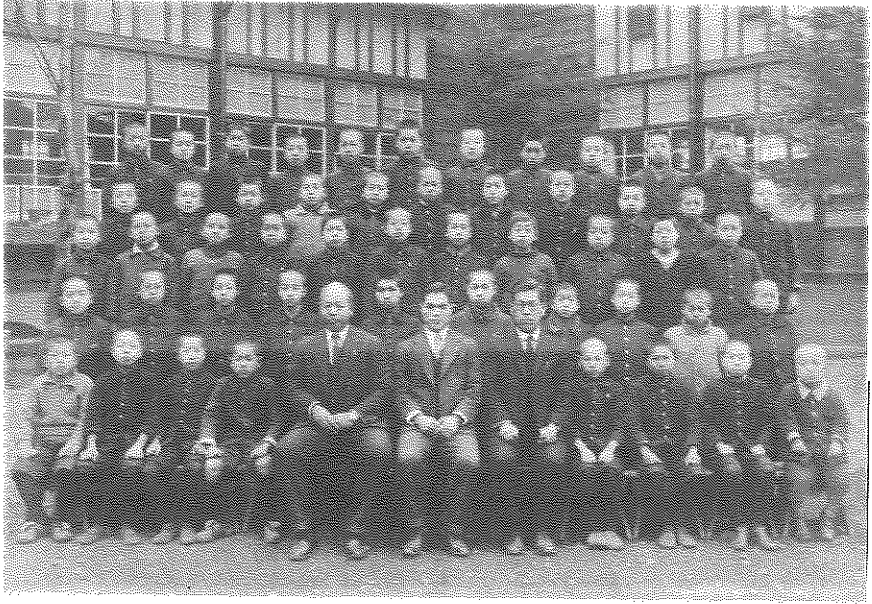
昭和八年(一九三三)卒業の三日野の先輩として、  
水俣病・スモン病の権威として知られた椿忠雄博士が

いる。昭和三〇年代後半、腹部症状をともなう脳脊髄  
炎症を起こす原因不明の奇病が発生し社会的問題になっ  
たが、東大助教時代の椿博士らの研究によって「ス  
モン病」と名付けられ、その後、キノホルムがスモン  
病の原因であることを究明し、スモン病の特効療法を  
見つけることに成功した。

一方、昭和四〇年(一九六五)、新潟大学医学部教  
授のとき、新潟県阿賀野川流域に発生した奇病は、有  
機水銀中毒が原因であること報告し、「新潟水俣病」の  
研究にも貢献し公害訴訟などに大きな影響を与えた。

昭和四〇年六月一二日の毎日新聞によると、新潟大  
学医学部の椿忠雄教授らによって、新潟市下山などの  
阿賀野川流域に水俣病に似た有機水銀による中毒患者  
が発生していると報告され、患者の毛髪から普通の人の  
約五〇倍の有機水銀が検出されたことから有機水銀  
中毒と断定した。七月になって厚生省から阿賀野川流  
域の患者多発地区の健康な人の頭髮からも多量の水銀  
が検出されると発表され大きな社会問題となった。

長年にわたる公害病の研究成果が評価され、昭和五  
八年(一九八三)に紫綬褒章を受賞されたが、残念な  
ことに昭和六二年(一九八七)に亡くなられた。「ス



昭和8年3月の卒業写真 中央、左から市原校長・鈴木先生・田中先生  
前から2列目、左から4人目 椿博士。前から4列目、左端 佐藤会長

モン病」や「新潟水俣病」などの原因究明など、わが国の公害病に多大な貢献をされたことが特記される。

三日野の現在の佐藤謙次同窓会長と椿忠雄博士とは同級生である。佐藤少年は、土曜の午後や日曜日になると、友達たちと探検隊と称して、旧火薬庫（現在の自然教育園）や馬検場（現在の目黒区元競馬場）あたりまで遊びに行く。この辺りにも森や丘や畑があり、当時、どこにも子供の遊ぶ所はあった。卒業式の日、佐藤少年と椿少年は、小石に互いの名前を書いて特別教室の床下にそつと置いて別れた思い出があるという。

### ○ テレビジョンの実験

昭和八、九年頃に三日野に通っていた卒業生、黒田彦治氏（昭和一〇年卒業）の話によると、近くにあった通信電気試験場（現在の関東通信病院のところ）で、当時の日本では一般にあまり知られていなかった、初期のテレビジョンの実験を見学したということである。テレビの実験は卓球をしているところを撮影し、かなり鮮明にブラウン管に映っていたという。通信省式のテレビ実験が昭和七年（一九三二）に成功したという記録があるので、この開発されたテレビを見たのであ

ろう。

日本ではNHKによるテレビの本放送が開始されたのは昭和二八年（一九五三）であるから、当時の三日野の子供たちは二十年前に既にテレビというものを見たことになる。現在はカラーテレビで衛星放送の時代になり、一家にテレビが何台もあるという時代の今からおよそ六〇年前のことである。

### ○ 公式プールと石段観覧席の完成

昭和一〇年（一九三五）四月に皇太子殿下（現在の、天皇家下）の御誕生を記念して、プールの拡張および観覧スタンド設置・校庭の舗装の事業が計画された。従来のプールを拡張して、縦二五m・横七mと公式水泳大会のできる立派なものが完成した。

同時に校庭の舗装も整備され、石垣のところには立派な観覧席も設けられ、地区随一の施設を誇り、以後、戦前は毎年、品川区の公式水泳大会の会場となった。

三日野では水泳競技の練習が活発に行われ、神宮競技場のプールで行われる東京大会では、しばしば入賞するという優秀な成績を残した。

プールの拡張と観覧席の設置工事の計画のときに、

三日野には既に二二mのプールがあるからという理由や観覧席はぜいたくであるということ、なかなか工事の予算が下りなかったというが、しかし、皇太子殿下御誕生記念（実際は昭和八年のお誕生）と時宜を得たことや、「観覧席」を「階段式運動場」と名称を言い変えることによって許可がおりたという。まことに当時の先生方や保護者会の方々の智恵とたくましさを見るおもしろい。

三日野の校庭はウナギの寝床のようだとよく言われるが、このときプールと同時に完成した校庭舗装によって、一〇〇mの競技コースがとれるようになり、他校からも陸上競技の練習に来たというから、取り柄はあるものである。

昭和六三年（一九八八）に、現在ある新しいプールの建設中に基礎工事のため、校庭の掘削したところ、当時のプールの底のコンクリートが現われ、コースを示す昔のままの白いタイルを再びかいま見たとき感慨深いものがあつた。

この石垣にある観覧スタンドは、都内でも唯一だと思いが、今でも夏のプールの季節になると、崖の樹々が涼しげな木陰をつくり、蝉しぐれの中で三日野の子

供たちの水泳を見学する人たちに役立ち、運動会とのきはスタンド一杯につめかける父母や家族の声援で校庭は湧きかえる。

### 〔三〕戦争の時代

(昭和一〇年―昭和二〇年)

#### ○戦争のあしおと

昭和六年(一九三一)に「満州事変」が起こり、翌昭和七年には、清朝最後の皇帝となった宣統帝・溥儀を再び皇帝として、実質上、日本の支配する『満州国』を中国東北部に建国した。その後、昭和十一年(一九三六)二月に起こった「二・二六事件」を境に軍部はますます力を強め、軍国主義の時代になっていく。昭和十二年(一九三七)七月には北京郊外の蘆溝橋において、日本軍と中国軍との間で起きた発砲事件に端を発し、これを契機に日本軍が中国華北地方に軍事行動を起こし、中国と全面戦争となった。「日中戦争」の開始である。日本の政府や国民の中にも戦争に反対する声はあったが、その潮流を押し止めることはできず、日本は戦争への道を大きく歩み始めていた。

#### ○三日野のあしどり

昭和十二年(一九三七)三月に第三代、橋本信栄校長が赴任した。以後、戦中、戦後と三日野が最も苦難の時代であった一五年間を三日野に奉職され、学校の運営指導に心血をそそがれた。当時、校長先生は、三日野の敷地内の一角にあった官舎に住まわれ、学校に起居されていた。

また、昭和一〇年代の三日野に図画の先生として在職していた、渡辺菊治先生は、全国で使われていた歴史教科書の白虎隊の挿絵を描いた人として知られていた。小学校の教科書にも戦時色の強い勇壮なものが取り上げられるようになってきた。

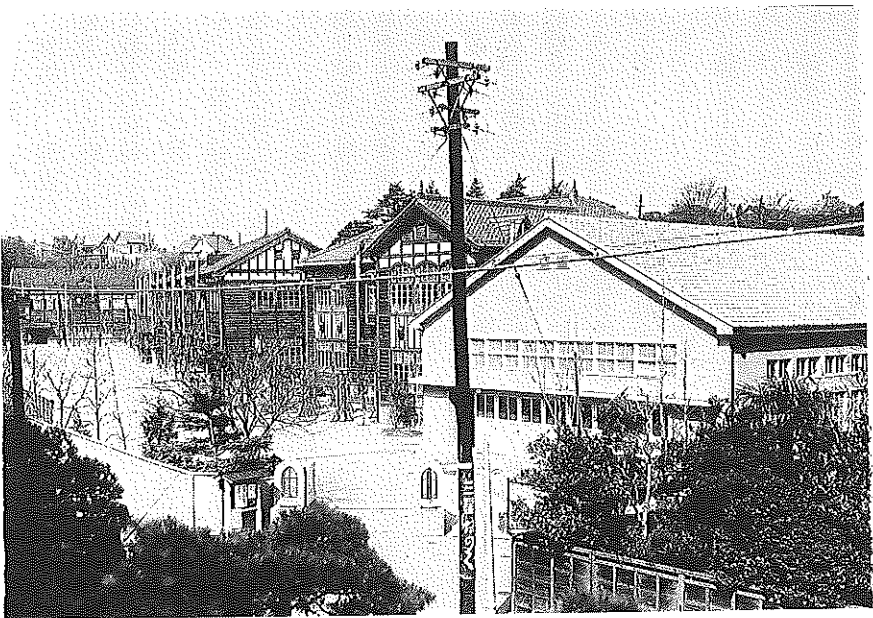
昭和十二年六月一五日附の朝日新聞に「小学校の防空演習の前奏曲」と題して、

『児童の防護防毒訓練が十五日午前十時全市のトップを切つて品川区芳水小学校でおこなわれた。空襲の警報とともに千四百名の全生徒がたつた二分足らずで一糸乱れず裏手の居木神社の境内へ避難、まず最初の演習で鮮やかなところを見せ、(中略)次々の演習に皆真剣になって活躍、統制鮮やかに約一時間で演習を終わった。結果は勿論好成績であったがこの日の午

後二時からは第一日野小学校でも同様の演習を行った。』  
という新聞の記事がある。三日野でも同様のことが  
これと前後して行われたことが推測される。戦時体制  
の緊張は小学校にも及んできていた。

昭和十三年（一九三八）頃になると物資は一段と不  
足して、全国の小学校から大学にいたる学生、生徒に  
学用品、服、靴などの代用品を使用させ、文部当局は  
小学生、中学生、女学生に下駄履き通学を奨励してい  
る。当時の子供たちは普段から下駄履きであったが特  
に、三日野でも児童の下駄履き通学の励行が行われた。  
昭和一六年（一九四一）三月一日、国民学校令が交付  
され、初等科六年、高等科二年が義務制となり、これ  
によって三日野も「東京市第三日野国民学校」と校名  
が変更された。

このような戦時体制の時代の中ではあったが、三日  
野にとって一つの大きな出来事があった。学校の名称  
が変わって間もなく、昭和一六年（一九四一）三月、  
紀元二千六百年記念事業として、開校以来、待望だっ  
た講堂兼雨天体操場が落成したのである。開校二〇年  
目にして総計三三、〇〇〇円の費用をもって正門を入っ  
た右側のところに建設され、当時を知る卒業生の話に



正門脇に完成した雨天体操場（昭和16年3月）

よると大變立派な建物であったという。しかし、この講堂兼雨天体操場がそれから四年の命脈しか保ち得ず、東京大空襲の戦火のために炎上しようとは誰が想像できたであろうか。

### ○太平洋戦争の勃発

日本が日中戦争の渦中にあつた、昭和一六年（一九四一）、ヨーロッパでは六月にドイツとソ連の間で戦争が開始された。一方、太平洋をはさんで日本とアメリカとの国交もしだいに険悪となり、日本は孤立化を深めていった。

国内は物資の不足から国民生活の制限を余儀なくされ、米は配給制になり、砂糖、マツチなどを買うのにも切符による統制が行われ、一般の自動車のガソリンも自由に使用できなくなつた。小学校は国民学校と名称を変え、英語の排斥運動によつて片カナ名称が漢字に置きかえられるなど日本の社会は非常事態体制になつていた。

昭和一六年一二月八日、未明、日本の連合艦隊はハワイ真珠湾を奇襲攻撃し、アメリカと戦争状態となり「太平洋戦争」が勃発した。世界の各国々が相争う戦争の時代に突入する「第二次世界大戦」が始まつた。

### ○戦時の学校

戦時中、開戦の日である八日を大詔奉戴日といい、毎月、三日野の児童全員が近くの雉子神社や建武神社に戦争の勝利と武運長久を祈りに行つたという。

当時、学校では男子は剣道、女子は薙刀が行われていた。特に剣道は盛んで、三日野の柳井重男先生は剣道五段の錬士で、橋本校長先生が二段、他に有段者の先生が数人もいた。今までは、特別教室の側の狭い場所ので剣道の練習をしていたが、昭和一六年に新しい講堂兼雨天体操場ができると、そこを広い道場として思う存分稽古ができるようになった。

新しく講堂ができたのを機会に、品川区の小学生剣道大会が開かれた。柳井先生の剣道の師範にあたる、武徳会の山中博道先生が来校され、決勝には審判としてあたり、また、居合抜きを披露されたが、その技に見ていた子供たちも息を飲んだという。

真刀をもって、裂帛の気合とともに藁束を一刀のもとに斬り下げるのだが、藁束は微動だもしない。後で片づけるときに、真つ二つに斬れているのが分かるという練達の妙技であつた。山中先生は、当時、剣道斯界では最高峰の方で、天覧の居合抜きを許された第一

人者であったという。

一方、立派なプールを持っていた三日野では、その頃、水泳も非常に盛んで、品川区の水泳大会もよく開かれていた。昭和一六年頃のことである、当時、オリンピックの金メダリストとして名を馳せた葉室鉄夫選手が三日野に来校され、このプールで水泳の模範演技と水泳の指導をしてもらったことがあった。

葉室選手は昭和一一年（一九三六）八月に開催された第一回ベルリン・オリンピック大会で男子二〇〇m平泳ぎ決勝で優勝した名選手である。このオリンピック大会では女子二〇〇m平泳ぎでも前畑秀子選手が優勝し、他に、男子一五〇〇m自由形、男子八〇〇mリレーを制覇するなど世界に水泳日本の名を高めたオリンピックであった。

三日野では以前、ボーイスカウトの活動が行われていたが、昭和一〇年代には、佐藤弥市先生の指導で海洋少年団の活動が活発に行われるようになった。水泳や手旗信号、モールス信号、索繩の訓練、棒術の稽古などが行なわれ、子供たちの身体の鍛錬をはかった。



戦時中（昭和17年3月）の卒業写真。中央向かって左が橋本校長先生、右が国広先生

学校にはテントが五張ほどあり野営の訓練などもたびたび行われた。

索繩の訓練では校舎の二階の柱にロープを結びつけ、下に降りる練習をしたり、合宿の前には、一晚、学校の校庭にテントを張り野営の予行演習をすることもあつた。夏休みには合宿に行く。茅ヶ崎海岸に行き松林の中にテントを張り、飯盒炊さんで食事をつくり、団体生活を過ごす。海で遠泳、手旗信号など日頃の訓練の成果を発揮する。

また、三日野から越中島にあつた水産学校に行き、そのこのカッターを借りて東京湾で漕艇の訓練をすることもあつた。越中島から品川沖の御台場、大森海岸方面までカッターで漕ぎ出し訓練をする。一艘に二〇人くらいが乗り組み一本のオールを小学生二人で漕ぐのだが、この艇は海軍の水兵さんが使用するものと同じで、子供の手には余るものだった。

昭和一八年（一九四三）四月、太平洋連合艦隊指令長官の山本五十六大將が南方の前線で戦死するとうい、当時の日本にとって衝撃的な出来事が起り、山本長官は元帥府に列せられ、国葬をもって礼せられることになった。国葬は五月六日に日比谷公園葬場で行われ、

三日野の海洋少年団員も国葬の沿道に葬送のために参列した。三日野の五年生だった半田眞一氏（昭和二〇年卒業）は、団旗の旗手として参列したことを今でも記憶している。

昭和一七年頃から、音楽準備室に三日野の卒業生で戦死された方々の遺影が飾られ、子供たちは朝、登校して最初にお参りをするのだが、段々、その写真の数が増えていくのがとても悲しかったという。

空襲が連日苛烈さを加えていくなかで、校舎の下の土を掘り避難用の防空壕が造られた。このために校舎が傾かないように、太い材木で支えのつかえ棒がしてあつた。窓には爆風でガラスが飛散しないように、縦横斜めにテープ状の紙が張られていた。戦争の影響は三日野にも色濃く現れ、子供たちも学校で竹槍の訓練が行われるようになった。

ある日、三日野の校庭にアメリカの艦載機が飛来し、機銃掃射されたが幸い怪我人はなかった。アスファルトの校庭に機銃弾がめり込み、後で先生が掘り起したところ直径一・五cm、長さ一三cmほどの弾丸が出てきて、それを見た子供たちはとても驚いたという。

当時、奉安殿といって御真影（天皇陛下の写真）を



安置するところが、どこの学校にもあり、万一、火事など非常事態が起こった場合には、御真影を真っ先に持ち出さなければならぬことになっていた。三日野の奉安殿は正面玄関奥にコンクリート製で別棟に建てられていたが、その前を通るときは先生も生徒も目礼をしていた。

奉安殿の御真影の責任者であった国広先生は、空襲警報が発令されると、家に居てもすぐに駆けつけ、夜中の空襲のときも大崎の家から三日野まで何回も走って来たという。空襲警報が解除されるまで、プールの側にあつた小さな小屋の中で夜が明けるとまで待機していたこともたびたびであつた。空襲がますますひどくなり、奉安殿も焼失する危険が大きくなったため、品川区にある各小学校の御真影を多摩の方の一ヶ所にまとめて避難したという話である。

昭和一八、一九年とその後の戦局は、資源のない日本にとって苦しいものとなり、各方面の戦線で苦境に陥つた。当時、大本営はこのような状況の真相を国民には知らせぬよう新聞・ラジオの報道管制をしていたが、その影響は国民の生活の上には否応なしに現われ、子供たちの食べるものさえ欠乏するようになってきた。

昭和一九年頃には食糧事情が極端に悪くなり、学童の栄養確保のため、四月から三日野でも学校給食を実施するようになった。六大都市の国民学校の児童二〇〇万人に、一食につき米七勺が支給されることになったが、結局、その後の食糧事情の悪化などによつて、九月からパン食のみとなつたと記録にある。当時の三日野在学生の話によると、鮭缶がおかずに出ることなどもあり、意外においしい給食であつたともいう。

#### ○学童疎開の日々

昭和一九年（一九四四）になり戦争はますます激しさを加え、東京は連日アメリカ軍の空襲の脅威にさらされるようになり、この状況を憂慮して七月八日、情報局は小学三年生以上、六年生までの学童集団疎開の実施を発表した。この時、疎開した全国都市部の国民学校の児童はおよそ四万人に及んだという。

三日野の上級学年の学童たちも空襲の危険を避けるために郊外に疎開することになり、昭和一九年八月から約二二〇余名の集団学童疎開が始まつた。疎開先は東京都下の西多摩郡（現在の青梅市）で男子一〇〇余名は三田村、女子一二〇余名は吉野村である。戦時疎

開学寮として、村の小学校や公民館あるいはお寺などを借用して、三日野の子供たちは親と離れ集団生活をしながら勉強することになった。

青梅線で青梅から四つ目に二俣尾ふたまたおという駅がある。小さな駅を降りると、蛇行した多摩川の上流の川をはさんで、北側が三田村で南側が吉野村である。村は違っても川の向う側のすぐ近くであった。三田村の男子児童は、お寺、使用されていない病院、二俣尾分教場と三カ所に分かれ、女子児童の吉野村は地藏院じざういんというお寺と二カ所の公民館の三カ所に分かれ、計六カ所に学寮は分散していた。二俣尾分教場が本部のようになって、昭和二〇年の二月から国広伴六先生が責任者として赴任していた。当初、男子は御嶽山みたけさんの中腹にある分教場にいたが、冬になり余りにも寒さが厳しいため、山を下って麓ふもとの二俣尾学寮の三カ所に子供たちは移動することになった。

三田村と吉野村は、山と川の間のごく幅の狭いところにある村で、米麦はほとんど作らず主に林業の村である。野菜はジャガイモのほかには、村内で自給自足じかゆうじそくもやつとのようなところだった。授業は公民館を借りたり、お寺では本堂に経机きょうつくえを並べて行うのだが、食料



西多摩郡吉野村の戦時集団疎開・2列目左端が大沢先生（昭和19年冬）

事情が大変悪く、食料の調達や子供たちの世話で満足な授業はできなかった。

先生は毎日、毎日、食料の買い出しに出かけなければならず、頭の散髪さんぱつもしてやらなければならぬ。薪運びもしなければならぬ。薪がなければ炊事くわいじもできなければ風呂も炊けない。冬には暖房もできないありさまだった。薪は近くの農家でもなかなか売つてもらえず、裏の山へタキ木を拾いに行つても、満足に集めることもできず、薪にはとても困つたという。

食料の味噌などの配給の知らせがあると四、五人でリヤカーを引いて半日がかりで受取に行く。野菜は青梅あずみまで買い出しに行くのだが、そこに無いと、その先の霞村かすみまでも行かなければならなかった。牛乳は逆の山奥の方へ買い出しに行くという毎日で、薪集めと食糧の買い出しには大変苦労したという。

二俣尾分教場に井戸はあったが、充分でなく裏の山から樋いで湧き水を引き、生活用水として使用していた。お風呂は一度に三人ぐらいしか入れないので、五〇人以上の子供を入れるのは大仕事であつたという。

御嶽山おろしの風は冷たく、気温は東京に比べるとぐっと低く冬の夜などは、しもやけの疼うずきに泣く子が

幾夜にもわたつたという。ある子供がジフテリアになつたとき、大沢澄江先生が、青梅の山の坂道を夜中に子供をおぶつて一里あまりの山越しをして病院へ連れて行き、男でもできないことを女の身でと、村の人たちがの評判になり、それからは、いろいろと村の人たちがよく協力してくれるようになったという逸話いづつもある。

このほかに、三日野の子供たちの中には地方の親戚しんせきなどの家に預けられたり、家族ごと地方へ疎開する個人的な縁故疎開えんこなどもあり、また、事情により疎開できなかった東京の残留組の子供たちもいた。三日野の子供たちが離ればなれになつた悲しい時代である。

戦争の最も激しくなつてきた昭和二〇年三月の卒業式は、戦火で焼け落ちる直前の講堂で最後の卒業式となつたが、卒業証書はガリ版刷りの粗末こまつなものであつた。

### ○空襲による校舎炎上

アメリカ軍のB-二九爆撃機による連日の空襲はますます激しくなり、東京の街は焼土しよどと化していった。

昭和二〇年（一九四五）五月二三日のことだった。その夜、激しい空襲がこの地区を襲つた。暗夜、轟音ごうおんと

閃光せんだくわうが走り、校舎、校庭に次々と焼夷弾しょういだんが落下し屋根から火を噴ふいて燃え上がった。

当時、校庭の一角にある住宅に住んでおられた橋本校長先生はじめ、戦時非常体制の残留職員として当直に当たっていた、早乙女吉治郎先生と佐伯さおじ（現在・上村）豊子先生は、近所の人たちと共に必死の消火活動にあたった。焼夷弾は次々と落下して講堂にも落ち、燃え上がった緞帳どんちやうの火を一旦は消し止め、次々に落下してくる焼夷弾の炎を四回まで消し止めることができただが、しかし、最後にザアという音とともに大量の焼夷弾が学校のいたるところに降りそそぎ、あちらこちらで火の手が一斉いっせいに上がり、校舎の屋根はボンボンと音をたてて炎上しはじめた。

必死の消火活動中に校長先生たちと散りぢりとなつてしまった、早乙女先生と佐伯先生は、プール側の崖から転がり落ちて炸裂さくれつする焼夷弾に足許あしもとも危うくなり遂に消火を断念し、プール脇から正門の方に逃れ、講堂も音楽室も炎上するのを無念の目に焼き付けた。校長先生方はいったん裏門の崖上の民家の庭へ避難して学校を見ると、正門の方も土手の方も炎でいっぱい逃げ道もふさがれてしまったので、校長先生たちは

朝香宮邸あさかのみや（現在・東京都庭園美術館）の方へ避難した。

早乙女先生と佐伯先生は、正門から学校の坂を上がり池田山の方に避難したが、途中、目の前に幾つもの焼夷弾が落ち、池田山のお屋敷があちらこちらで燃え上がっていた。行く先々の道に落下する焼夷弾と燃える家々の火の手に進路を阻まれ、その火を避けながら池田山の崖を滑り降り、ようやくにして山手線の線路上に逃がれた。そこから見たものは、火の海となった五反田の町と炎につつまれた藤倉ゴム（現在のNTTビルあたり）の大きな工場であった。遠くに荏原の星製薬の工場が薬品への引火いんかであろうか、大きな音をたてて爆発を繰り返す壮絶そうぜつな姿が浮かび上がった。夜が白みはじめるころは一面焼け野原となり、気がつくとき先生お二人はバケツ一つを手には持っているだけであったという。早乙女先生は焼けてしまったであろう自宅の方向を指しながら悄然せうぜんと立ち尽くしていたと、佐伯先生は語っている。

校長先生は一夜が明けた翌朝、学校へ戻ると、校舎や講堂はすべて燃え落ち、焼け跡には大きな梁はりだけがくすぶっていた。校庭やプールに突き刺さった焼夷弾は四、五十本にものほり、残ったものは、正門の門

柱と石のすべり台だけであった。

空襲に備えて石のすべり台の下に、特別な重要物保管場所をつくり、学席簿など学校の非常持出しの重要書類を保管してあったが、崖の上から転がり落ちる焼夷弾によって校庭も一面火の海となり、安全と思われた石のすべり台も猛火につつまれ、校舎もろとも戦前の三日野にまつわる資料の全てのもが焼失してしまつたのである。しかし、石のすべり台だけはその劫火に耐え抜いた。

この時、校長先生の自宅はもちろん、用務員さんの家も学校周辺のほとんどの民家も焼失してしまつた。

校長先生のご子息であり、同窓生でもある橋本勝氏（昭和一五年卒業）の話によると、この夜、空襲による猛火と混乱の中で、家族は、ばらばらになり各々がそれぞれに夢中で避難し、朝香宮邸で全員無事おち合ふことができた。次の日の朝、学校にある自宅へ戻つたときには、まだ周囲の石垣が熱かつた。油脂焼夷弾は長さ七、八〇cmの六角形をした鉄の円筒で、中には発火薬と油脂が詰まっています、地上に落下すると猛烈な勢いで炎と油を吹き出し燃え上がる。校庭のアスファ

ルトに突き刺さつた大量の焼夷弾を見たとき、これに直撃されたら命もひとたまりもなかつただろうと思うと、その空襲の物凄さにあらためて衝撃をうけたという。

翌、翌々日とつづいた空襲により目黒・五反田周辺の民家はほとんど焼けてしまい、この一帯は焼け野原となつてしまつた。記録によると、この日の大規模な空襲は、アメリカ軍大型爆撃機（B二九）五六二機、翌日、五〇二機が城南地区を襲いこの地区の大部分が焼失した。これが「東京山手大空襲」と言われているものである。

この大空襲によつて三日野とその付近の住宅はほとんど焼けてしまつたが、幸い学校の上の方にある寺町の清岸寺が焼けなかつたので、そこが付近の住民の一時避難所となり、焼け出された住民は、寺の本堂に寝泊まりさせてもらつていた。三日野も全てが焼けてしまつていたので、清岸寺が学校の連絡対策本部のようになつた。

二、三週間して避難民が徐々に引き上げられた後、集団疎開や縁故疎開しないで、東京に残り三日野で授業を受けていた一部、残留組の子供たちは、この清岸寺の一室を借り、小さな机を並べて寺子屋式の

授業がしばらくのあいだ続けられた。戦局の一層の厳しさの中で、残留組の子供たちの消息を集めたり集団疎開の児童を守るなど、先生方は、その対策の明け暮れが終戦の日まで続いた。

### ○終戦と作家・吉川英治

昭和二〇年八月十五日、青梅に疎開していた子供たちは二俣尾の分教場で終戦の玉音放送を聞いた。戦争に敗れたことを知った子供たちの中には泣きだす子もいて、その衝撃は生徒にも先生にとって非常に大きいものだった。

落胆している子供たちをなんとか力づけようと考えた先生方は、たまたま同じ吉野村に疎開していた、当時、大衆文壇ですでに有名な作家であった吉川英治先生に子供たちを励ましてもらうために、何か、お話をしてくれないだろうか、疎開先の責任者だった国広先生がお願いに伺ったところ快く引き受けてくださり、八月一五日の終戦の翌日だったか翌々日のことであったが、六カ所の学寮に分散していた子供たちを疎開先の本部のようになっていた二俣尾の分教場に集め吉川先生の話を書くことになった。約束の時間通りぴった

りに紋付羽織袴姿の正装でおみえになりお話を始められた。吉川先生の話は、この戦争は科学の力に負けたのだから、これからは、科学を勉強することが必要と話された。さまざまな話の中で、戦争に敗れた悲しみと、親から離れて暮らす淋しさに耐える、三日野の子供たちを心から励ましてくれる、とても感銘深い話だったという。

後日、国広先生は分教場の近くにあった吉川英治先生のお住まいを訪れ、何も無い時のことでもあり、山で採れた山芋をお礼に持参したところ、ささやかなお礼の芋をこころよく受け取ってくれたと、国広先生は感慨深げに語っておられた。

作家、吉川英治は大正一五年の「鳴門秘帖」で大衆文壇に確固たる地位を築き、その後、「宮本武蔵」「新・平家物語」「私本太平記」など数多くの著作で国民的作家といわれ、昭和三五年（二九六〇）には文化勲章を受賞した。三日野の子供たちが集団疎開して生活し勉強した村には、その後、吉川英治記念館ができています。長く辛い戦争は終わったが、すでに学校はすべて空襲によって焼失し、三日野の子供たちの帰るべき校舎はなかった。

#### 〔四〕復興の時代

(昭和二〇年―昭和三〇年)

##### ○間借り教室へ通う道

昭和二〇年(一九四五)五月二三日の空襲で三日野の校舎は全部焼失してしまっていたので、その年の九月から芳水国民学校(芳水小学校)の一部を借用し授業が再開された。まだ集団疎開や縁故疎開から戻っていない児童も多く、最初は芳水国民学校の子供たちと一緒のクラスで共に勉強することになった。一二月頃になると疎開していた子供たちも徐々に東京に戻り、人数も増えてきたので、三日野の児童だけでクラスを編成し授業が行われるようになった。先生方も最初は芳水国民学校の先生と一緒に職員室であったが、年が明けて昭和二十一年からは三日野の先生だけの職員室が設けられるようになった。しかし、一月から始まった三学期の始業式は全部で六学級一二五名の淋しいものであった。終戦後、日本は民主主義の世の中となり、小学校の教育も一八〇度の転換を迫られ、進駐軍の指示によって戦前の教科書の中で、占領軍に不適当と指摘された箇所は、墨で黒く塗りつぶすように命じられた。芳水小学校での授業のとき、子供

たちに墨で塗らせた黒い棒線だらけの教科書を使用した  
が、文章の意味が通じなくて困ったという。

芳水国民学校は大崎警察の上の方にあるが、この頃の子供たちの食料事情は極端に悪く、栄養失調のためか、ほとんどみんなが青い顔をしていた。ことに雨など降ったときなど、傘や雨具を持っていない者など数えるほどしかなく、防空頭巾で濡れねずみになりながら、芳水国民学校へ通うため立正大学の前の坂道(峰原坂)を、あえぎあえぎ登っていく姿は実に痛ましいほどだったという。

八月一五日の終戦の後、七カ月も西多摩郡の集団疎开学寮は続けられ、集団疎開が完全に終わったのは、終戦の翌年、昭和二十一年(一九四六)三月一日のことであつた。

昭和二十一年三月の卒業式は芳水国民学校の講堂で行われたが、この年は、縁故疎開からまだ帰らず地方にいる子供も多く卒業生の人数は少なかった。卒業証書はワラ半紙にガリ版刷りでありとても悲しかったという。この時の卒業生の中には、正式な卒業証書を再発行してくれないだろうかという声もあると聞く。四月八日、芳水国民学校でむかえた昭和二十一年度の新学期は、集団疎開から帰った子供たちが加わり、八学級三



戦後間もなくの頃の三日野の先生方。空襲で焼け残った石のすべり台が見える。

三一名(男子・一六二名、女子・一六九名)であった。

#### ○校舎の再建と二部授業

三日野の子供たちが芳水小学校へ通うなか、昭和二年一〇月から焼け跡に校舎の再建が開始され、二月四日には上棟式が行われた。翌、昭和二年四月、戦火による焼失から二年目にして木造平屋建の六教室職員室、給食室ができた。

急造のバラック校舎であり、窓にはガラスがなく、ロウ紙で代用していた。物資のない時代だったので、建築の材木が生木であったため、木材が乾燥してくると梁は曲がり、授業中などに教室でバシッと木の裂ける大きな音がして子供たちが怖がったという。

粗末なバラック校舎ではあったが、自分たちの学校の校舎が完成し、間借り授業から母校の教室へ帰り授業を受けられるようになった。しかし、たった六教室では全校生徒を収容することは困難で、教具なども満足になく午前組と午後組に分ける二部授業が始まり、校庭や校舎の土間にムシロを敷いて授業をすることもたびたびであった。

昭和二年(一九四七)三月二五日、東京都は三五



区から二三区に整理統合され、旧品川区と旧荏原区が合併し新品川区となった。この東京都の区制変更や学制改革により四月一日より学校名が変更され、現在の「東京都品川区立第二日野小学校」となる。

この頃は、まだ、プールに焼夷弾の筒が突き刺さり、校舎の燃えた廃材もそのままになっていてヒキ蛙の棲む池となり、春になるとオタマジャクシがプールいっぱいに泳ぎまわっていた。現在の関東通信病院のところは、戦前、通信電気試験場があったところで、この試験場も空襲で焼失してしまい、三日野の正門を出て少し行き左に曲がると、今ある関東通信病院の正面入口の先の方まで見わたす限りの草っ原で子供たちのよい遊び場となっていた。学校も学校周辺もまだ戦災の跡がいたるところに残っていた。

### ○ 恩師・旧友との再会

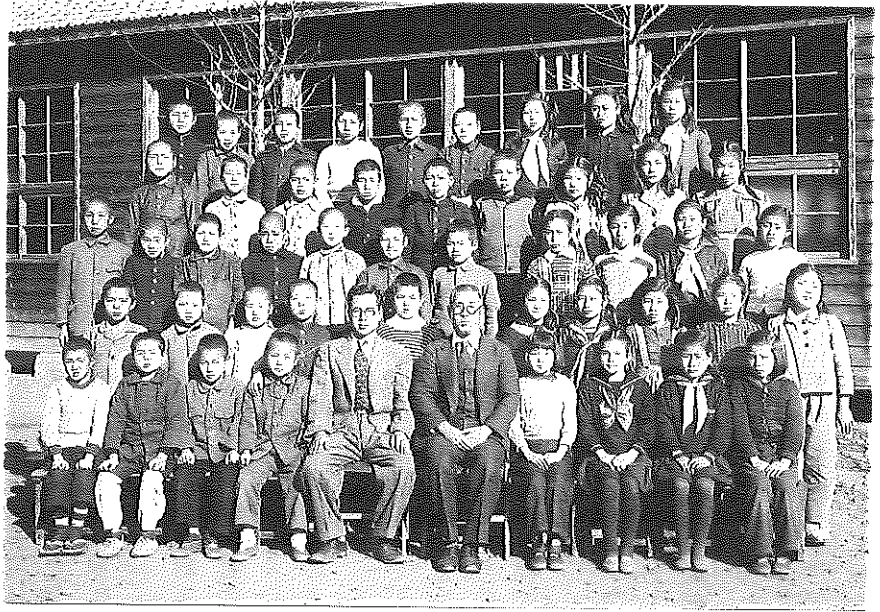
辛い戦争の時代が終わり、日本にも平和の青空がもどってきた。戦後一、二年も経った頃であろうか、昭和十七年三月に卒業した三クラスの級友が久しぶりに再会し、恩師、佐藤弥市先生を囲み三日野で同期会を開いた。佐藤先生は海軍の艦艇に乗り組みソロモン沖

海戦に遭遇したが、無事帰還することができ復員された。

教室で互いに机を並べた仲間も、それぞれに戦争を体験したが、久しぶりに元気な顔をそろえ数十人の同期生が三日野に集まって来た。校庭には空襲で破壊された傷跡がいたるところに残っていたが、バラック建ての校舎の教室で、懐かしい恩師と旧友との交歓に話はずんだという。

その後、佐藤先生は両親の待つ宮城県仙台市郊外の故郷へ戻られることになり、当時、校庭の片隅に建っていた先生方が宿直に使う小さな小屋に、戦後、再会した若者たちは大挙して集まり送別の宴を開き、酒をくみ交わして夜の更けるまで話はつきなかつた。中でも元気者は、焼夷弾や焼残りの廃材がそのままになっていたプールの中に飛び込んで泳ぐ者もあり、去りがたき教え子の青年たちは、小さな小屋の部屋にあふれ押し入れや棚に寝て先生と別れの一夜を過ごした。

当時、ここに集まった同期生の一人だった沖田利明氏（昭和十七年卒業）は、四十数年前のことであるが、その時のようすを、まるで昨日のことに語っていた。今でも教え子たちは何年かに一度は、弥市会と名付け、先生を囲み同期会を開いているという。



昭和20年代初めの頃、戦後の卒業写真（後ろはバラック校舎）

### ○戦後の学校給食始まる

昭和二十二年（一九四七）からララ（アジア救済連盟）物資による学校給食が始まったが、当時、全国の学童はおよそ三〇〇万人といわれ、児童の栄養状態は非常に悪く食糧も充分ではなかった。そこで、一〇月より連合軍から学校給食用に脱脂粉乳一万二〇〇〇トンが放出され、文部省は一回の給食に一合二勺ずつの支給を達し、九〇カロリーを確保できるようになったと記録にある。

三日野でも給食はアルマイト製の皿にコッペパン、お椀には脱脂粉乳のミルクがほとんどの毎日であった。この脱脂粉乳は、牛乳から爆弾製造の原料となるカゼインを取り去ったもので連合軍の本国では家畜の飼料として用いられていたものであるという。このような脱脂粉乳は決しておいしいと言える代物ではなかったが、食べるものがない時代であり、子供たちもぜいたくは言えなかった。しかし、給食担当の先生方はなんとか子供に脱脂粉乳をおいしく飲ませようと、占領軍から放出されるココアやバナナップル液などを加え甘みをつけるなど苦労されたということである。この脱脂粉乳以外に、年に何度かジュースやお汁粉がでるこ

とがあり、これを子供たちは、心待ちにしたものであった。

### ○「PTA」の発足

戦前は保護者の会としては「後援会」と「母の会」のふたつがあり、「後援会」は主に学校の施設・設備などの資金的援助を、「母の会」は学校行事などに協力するというものであったが、戦後になって連合軍総指令部（GHQ）の指示でPTAが全国の各学校にうつられるようになった。

昭和二三（一九四八）年一二月、三日野にもPTAが発足し、初代PTA会長には戦前より三日野後援会の会長を務めていた西本啓氏が就任した。当時のPTAは設備の整わない学校に対して、建築費の援助や図書購入などの資金援助をする、学校後援会的色彩が強いものであり、昭和二四年（一九四九）に体育器具倉庫、三一年には給食室の増築と給食施設、放送室の新築などPTAの予算によって多くの施設が作られていった。

西本会長は昭和二七年（一九五二）に全国PTA連合会の会長に就任し、翌、二八年四月に、フィリピンのマニラ市で開催された世界PTA大会に日本PTA

の代表として出席した。当時、外国で開催される国際会議へ出席するなどとても珍しい時代である。

### ○再建のすすむ三日野

当時、三日野が戦災からかなり復旧してきたとはいえ木造平屋の六教室しかなかった。昭和二四年（一九四九）六月になって校庭も整地され、翌、昭和二五年五月、モルタル二階建の四教室の増築が完成し徐々に復興は進んでいった。昭和二七年（一九五二）にはさらに四教室が増築され、衛生室、用務員室もできて二部授業も完全に解消した。毎年、少しずつ校舎や施設が増築され、昭和二七年にはほぼ校舎の全容が復旧した。この新校舎ができたとき同時に正門の近くにできた衛生室では、子供たちの怪我の応急手当や身体検査などが行われるようになった。

しかし、講堂や体育館はまだなく、教室の仕切壁を外し、机や椅子を廊下に積み上げると細長い即席の講堂が出来上がる。その細長い教室講堂で入学式や卒業式、学芸会などが行われるのであるが、机や椅子を運び講堂を作るのは高学年の児童の仕事であった。

## ○再開されたプール

プールの中には空襲のときの焼夷弾がまだそのままになっていて、プールは使用不能になっていたが、昭和二四年（一九四九）の夏、排水孔を修理し水を抜き、先生方が総出の手作業で焼夷弾を撤去し、スコップで四年間に溜ったへ泥をかい出し、デッキブラシで洗ひ、きれいに清掃されて子供たち待望のプールが再開された。

三日野の子供たちにとって体力の鍛錬となる水泳が復活し、当時、今のようにはレジャーなどない小学生にとって、夏のなによりの楽しみの一つになった。再開されたプールでは毎日、水泳の時間をもたれ子供たちも生き生きと水に親しむことができた。そのなかで、プールにまつわる幾つかのエピソードがある。

プールの水が一ヶ所異常に冷たいところがあるのに気付き調べてみると、空襲のときの焼夷弾の衝撃によって、崖側のプールの壁面に細いヒビが入り、崖の山から湧きだす清水がプールに入っていることが判った。天然のきれいな水だがあまりに冷たいので、水温の急激な変化を心配し、間もなくプールの亀裂はタールを塗って応急修理された。

後年、水不足の折りに、このきれいな湧き水をプー

ルの水として使用出来るのではないかという意見が出たこともあったが、地盤沈下の原因になるということで取り止めになったという話もある。

或る日、先生がプールに水を注入していると、大崎警察のお巡りさんが、自転車で飛んできてプールに水を入れるのを中止せよと言う。聞いてみると、三日野の上にある進駐軍の将校の家から、水道の水が出なくなったという苦情の電話が警察にかかり大変だと言う。三日野は地形の一番低いところであり、当時、まだ水道の本管が細くて高台は水の出が悪く、プールに注水すると、水道水が全部三日野のプールに集まってしまふので、それ以後、プールの水は夜間に入れることになった。当時の世相が分かる話である。

三日野には当時、児童が一〇〇〇人近くいた時代で、運動会には、家族の見物で石垣の観覧席は超満員になった。その頃のプールは、今のようには使用しない季節に覆う蓋がなかったので、ときどき運動会を観戦中の父兄がプールに落ちるといふ騒ぎがあった。

当時、三日野の丘の上に住んでいた橋本校長が、麦わら帽子をかぶり自宅の庭でときどき畑仕事をしているのを見かけることがあった。ときには放課後、校長

先生が水着に甚兵衛姿で、学校のプールへ泳ぎに来られることがある。巨漢であった校長先生が水に飛び込むと、ものすごい水しぶきが上がり、ゆっくりとした平泳ぎで、息継ぎのときウアーと水面から顔を上げる独特の泳法は、まるで鯨のようだねと子供たちは囁き合った。

### ○開校三〇周年と講和条約

昭和二七年（一九五二）五月二一日、創立三〇周年記念式典が挙行され、翌日、教室をぶち抜いてつくった即席講堂で記念祝賀会が盛大に開かれた。前年の昭和二六年九月にサンフランシスコにおいて調印され講和条約が、この年の四月をもって発効し、日本の占領が終わったことと三日野の復興との二重の喜びであった。

この頃、現在の体育館のところは、空き地になっていて花や野菜が植えられた畑になっていたが、その一角に百葉箱という蜜蜂が入るような白塗の箱が設けられた。これは気象観測用のもので、中には温度計、湿度計、雨量計などが設置されており理科の実験などに使用されるものだった。この百葉箱はルーバーの角度が大変に微妙で難しく、一般の大工さんでは作れない

ので、飛騨高山の匠の流れをくむ大阪の大工さんに特別に注文して作ってもらったものだという。

戦前も三日野には校庭舗装があったが、戦災によって破壊されてしまった。徐々に整備されてきたものの、まだ、校庭は穴だらけで、体育の時などは、石のローラーで地ならしをしなければならぬこともあった。しかし、このローラーでは余り効果がなく、結局、落ちている石ころは子供たちや先生の手で拾い集めていた。それも、昭和二七年にはアスファルトの完全舗装が完成し、風の日もホコリの立たない立派な校庭になった。この年の一〇月、橋本校長に代わって、第四代、中野藤太校長が就任した。

### ○校歌のできるまで

昭和二七年の開校三〇周年記念事業として「第三日野小学校校歌」が制定されることになり、作詞を西条八十、作曲を下総皖一という当代一流の作詞家、作曲家によって作られることになった。

この校歌のできるまでのいきさつは、当時、三日野の父兄であった、仏文学者の成田重郎氏が詩人・西条八十先生と早稲田大学当時の学友であり、フランス留

学中にも知己であったことから、西条先生を紹介してもらい、校歌の作詞を引き受けてもらった。

作詞家・西条八十には世に広く知られた歌がたくさんあり、童謡としては「鞠と殿様」「歌を忘れたカナリヤ」「肩たたき」があり、歌謡曲では戦前一世を風靡した映画「愛染かつら」の主題歌の「旅の夜風」をはじめ「蘇州夜曲」「誰か故郷を思わざる」「青い山脈」「哀愁日記」などがある。

また、作曲は、当時の三日野PTA副会長であり、品川区会議員で清岸寺の住職、吉田眞浄氏のはからいにより、吉田氏と同じ町内（上大崎一丁目）に住んでおられた関係で東京芸術大学教授の下総皖一先生が作曲してくれることになった。

下総先生は、童謡「笹の葉サラサラ」などの作曲で知られ、当時、音楽教育家として学校唱歌の分野でも重鎮であった。

当時、一流の大家のところへ作詞を依頼に行くことになった三日野の三人の先生は、紹介状を携えているとはいえ、とても緊張したという。西条先生に面会したとき三日野のようすを話し、後で作詞料を値切ってしまったが、今考えてもよく言ったもので、冷汗もの

であったと作詞の依頼に行った三人の一人、秋岡博先生は笑って語っていた。

校歌の詩が出来上がり、下総先生のところへ作曲のお願いに行くと、しばらく歌詞を眺めていた下総先生は、これは作曲するのに難しい詩だと腕組みをして唸られという。

西条八十（一八九二—一九七〇）（さいじょう やそ）

大正・昭和期の詩人。東京生まれ、早大卒、大正八年（一九一九）処女詩集「砂金」を出版、詩人として知られた。一九二一年から母校講師、一九二四年にソルボンヌ大学に留学、帰国後、母校教授となる。この間、訳詩集「白孔雀」童謡集「鸚鵡と時計」など多くの詩集を出版、浪漫的幻想と甘美な感傷・機智などが微妙にとけあつた詩風で多くの人に愛好された。その後、叙情小曲集や民謡・歌謡曲の作詞によつて彼の名はいっそう広く知られ、中山晋平・山田耕筰らの作曲を得てその詩は愛唱された。

下総皖一（一八九八—一九六二）（しもふさ かんいち）

昭和期の作曲家・音楽教育家。埼玉県生まれ。東京

音楽学校（東京芸大）卒、一九三二〜三四年に文部省在外研究員としてベルリンに留学し、ヒンデミットに師事。帰国後、東京音楽学校作曲科の教授となり、一九五四年同校の学部長もつとめた。「作曲法」をはじめ長い生命を保った音楽理論書・教科書の著作を残した。洋楽と邦楽との融合を試みた協奏曲・合唱曲・歌曲の作曲もあり、戦前の文部省音楽教科書には、彼の作品が多く無記名で採用されていた。（コンサイス人名辞典・日本編：三省堂発行の抜粋による）

### 〔五〕豊かな日本

（昭和三一年〜昭和五〇年）

○もはや戦後ではない

終戦から一〇年、昭和三〇年代になり日本の経済も復興し、社会も少しずつ豊かになりつつあった。昭和三一年（一九五六）七月に経済企画庁から発表された経済白書「日本経済の成長と近代化」には、日本の経済の安定は近代化によって支えられ、もはや戦後ではない、と発表され、その「もはや戦後ではない」とい



昭和30年代の授業風景



校門を出ていく三日野の子供たち（昭和31年頃）

う言葉が流行語となった。戦後の好景気が「神武景気」と呼ばれ、その反動で数年後には鍋底不況となるが、庶民の生活が戦後から抜け出したことは確かであった。前年の昭和三〇年（一九六五）にはNHKテレビの他に、民放、初のラジオ東京テレビ（現在のTBSテレビ）が開局し、テレビの受像機も一〇万台に近づいていた。映画の黄金時代であり、ディズニイの記録映画や東映映画の時代劇などが盛んであった。スポーツ界でもプロ野球の巨人・西鉄、相撲の栃錦・若の花、プロレスの力道山などに子供たちは夢中になっていた。

#### ○ 小学校はすし詰め教室

昭和三〇年（一九五五）一〇月、第五代校長、則内一郎校長が就任し、この年、三日野の児童数は一〇〇〇人を越えた。三日野は昭和三十一年の児童数、一〇八四名、二一学級をピークとして、三〇年から三四年までの五年間、毎年一〇〇〇人以上の児童が在籍した。これはベビーブームの全国的な傾向でもあった。

三日野の校舎は復興されたものの、多数の児童を収容するにはまだ充分なものでなく、昭和三十一年（一九五六）にはPTAの予算で放送室の新設と給食室の整



備が行われた。更に昭和三十三年には、戦後のバラック校舎が改築され二教室が増築された。この年、第六代、赤池徳平校長が就任した。三日野で児童数の最も多い頃である。

昭和三十三年（一九五七）八月の文部省の全国の実態調査では、小学校の三四、二パーセントがすし詰め教室であり、前年より児童数が三四万人も増加した。翌、三十三年一月には政府はすし詰め学級解消の対策として、一学級を最高五五名とするなどの法案の提出を検討したことが新聞に報道されている。

### ○三日野合唱団の活躍

昭和三〇年（一九五五）一一月の品川区民文化祭の合唱コンクール小学校の部で一位に入賞したのをきっかけに三日野合唱団の活躍が始まった。

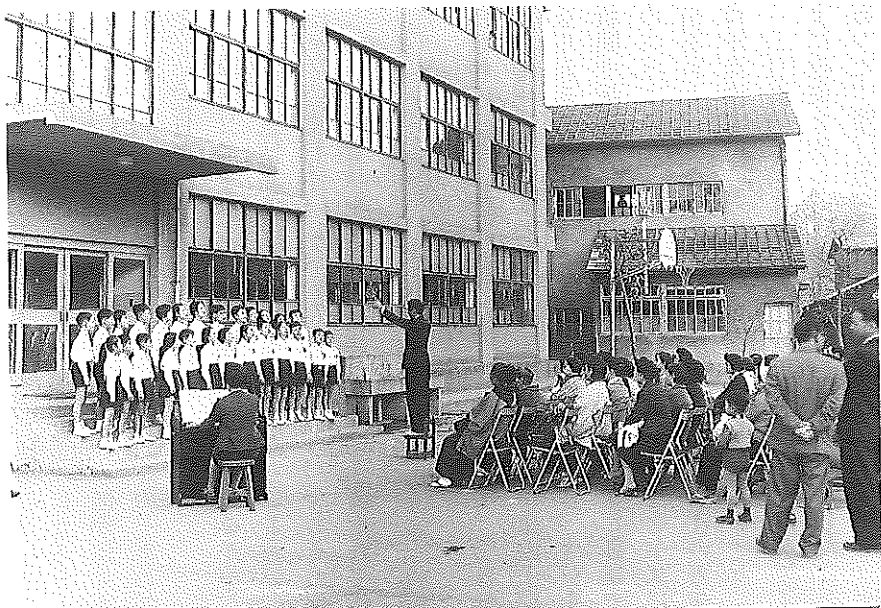
昭和三十一年・毎日音楽コンクール 第一位入賞

昭和三二年・ニッポン放送学校音楽コンクール

第一位入賞（文部大臣賞受賞）

昭和三十三年・NHK全国唱歌ラジオコンクール

全国大会第二位入賞



日本一となった三日野合唱団の校内発表会（昭和33年）

昭和三四年・ニッポン放送学校音楽コンクール

第一位入賞（文部大臣賞受賞）

昭和三五年・NHK全国唱歌ラジオコンクール全国

大会 第一位入賞（総理大臣賞受賞）

昭和三六年・NHK全国唱歌ラジオコンクール全国

大会第一位連続入賞（総理大臣賞受賞）

主なものだけでも、この成績が示すように三日野の合唱団は、全国大会の大きな賞を毎年受賞するという目覚ましい大活躍をした。この合唱団の活躍には、音楽担当の渡辺陸男先生の熱意あふれる指導によるところが大きい。音楽教室でプールサイドの石段で、夕方暗くなるまで合唱の練習をして、ときには夜の九時過ぎることもあった。

渡辺先生は長野県出身で昭和二八年に三日野に赴任し、いつも手拭を腰に下げ、もじやもじや頭を掻きむしっているパンカラ先生で、学校の廊下を大声で発声練習しながら歩いてきた。朝、目黒駅から通って来る先生は、登校の子供たちと一緒に道々歩きながら合唱の練習を始め、歌いながら子供たちと学校にやって来る。

渡辺先生は長野県の中学で教師をしていたが、教師

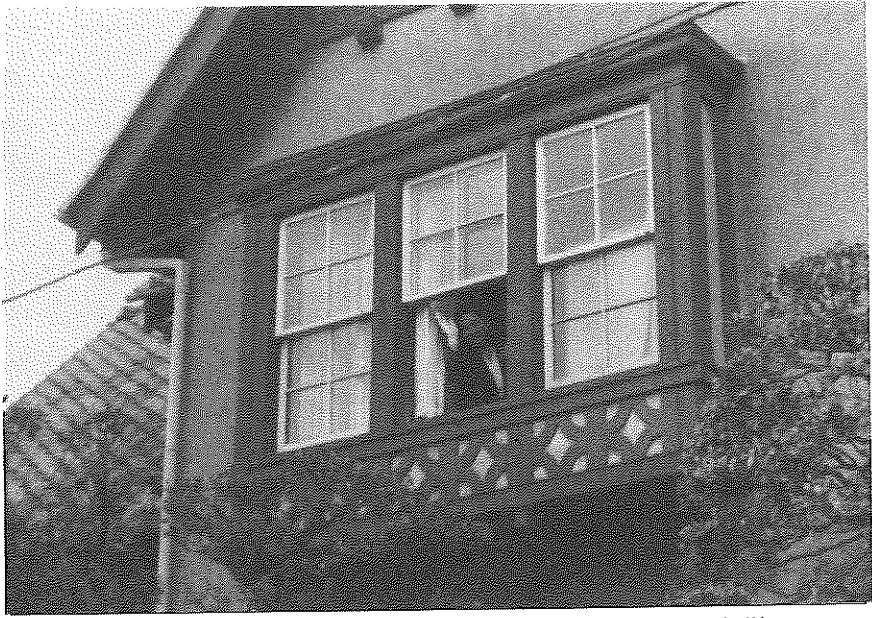
として何が自分に一番適しているのだろうかと真剣に考え、得た結論が「小学校の音楽専科」になろうということだった。その強い意思を持って、何が何でも東京へ行くのだと上京したのが二二、三才のときのこと。そして三日野へ赴任することになった。

三日野にはそれまで音楽専科の先生がいなかった。先生の若き情熱とそれに応えた子供たちによって、三日野を合唱日本一に導いたのであろう。今もその輝かしい記録の賞状や優勝杯は校長室の棚に飾られている。

### ○池田山の皇太子妃殿下

昭和三三年（一九五八）の秋も深まる頃、三日野の上の池田山に住まわれる正田美智子さまが皇太子妃になられることが発表になり、連日、テレビ、ラジオ、新聞で報道され、この地元に住む者は驚きと喜びでこのニュースを聞いた。輝かしい日本のプリンセスに祝福あれと、付近の町会で繰り出す奉祝の人々の万歳の声か池田山にこだました。

三日野の子供たちも正田邸にお祝いに訪れ美智子さまに花束をさし上げたのが新聞に載ったりしたこともあった。翌、昭和三四年（一九五九）の四月一〇日に



自宅の窓から町の人々の祝福に応える正田美智子さま（昭和33年秋）

は、皇太子殿下と正田美智子さまの御成婚ごせいこんの儀が華やかに行われ、早朝から三日野周辺の住民もこぞって祝福に池田山の沿道に並んだ。戦後がおわり日本が豊かになってきた時代の華やかな話題であった。今は皇后となられた美智子さまを日本中が祝福した三四年前の出来事である。

### ○ 緑のおばさんの登場

昭和三四年（一九五九）五月に発表された、東京都が集計した都民の人口は九〇〇万人を突破し、ニューヨークに次ぐ人口世界第二位の都市になった。

自動車の台数も著しく増加し、この頃から「交通戦争」と呼ばれる交通事故の多発の時代になっていく。東京都は通学児童の交通安全を守るため「緑のおばさん」の制度を発足させた。緑の制服に黄色い腕章、黄色い旗を持って登場し、三日野にも一月から二名の要員が配置され通学路の安全を確保するようになった。

### ○ 屋内体育館の完成

一九六一年、世界で話題をさらった出来事といえば、ソ連のガガーリン少佐の乗った人類初の人工衛星ボス



秋晴れの大運動会（昭和36年10月）

トーク号が地球を一周したという大ニュースがあり、人類で初めて地球を外から眺めた男は「地球は青かった」と語った。

この年、二代目の体育館（現在は三代目）が完成している。三日野には大正一一年に開校してから一九年のあいだ講堂がなく、昭和一六年（一九四一）に至りやっと立派な講堂兼雨天体操場ができたのだが、四年後、昭和二〇年（一九四五）五月二三日夜の大空襲のため校舎とともに講堂も全て焼失してしまったことは既に触れたが、戦前も戦後も講堂のない時代は教室の間仕切りを取外し、幾つか教室をつないだ即席講堂に椅子を並べて入学式や卒業式を行っていたことを多くの同窓生が憶えている。

昭和三六年（一九六一）七月から屋内体育館の予定敷地の測量とボーリングが開始され、一〇月には地鎮祭が行われ、本格的な建設工事が開始された。その間、一月にNHK全国小学校合唱コンクールで第一位となり、二年連続日本一の快挙が成し遂げるとい嬉しいニュースに学校中が湧いた。

戦火で講堂が焼失してから一七年目、昭和三七年（一九六二）、あたかも開校四〇周年にあたる年に講堂

を兼ねる屋内体育館が完成した。五月二一日、創立四〇周年記念式典と体育館落成式が同時に行われ、品川区長はじめ多くの来賓を招き盛大に祝宴が催された。

### ○合唱の歌声は全国に

昭和三五、三六年と連続日本一に輝いた三日野合唱団は、コーラス活動の交歓のため、昭和三七年八月の夏休みに、長野県川上村に二泊三日で合宿して、地元の小學校と楽しい合唱の交歓をするなど楽しい出来事もあった。

翌、昭和三八年（一九六三）三月には五、六年生全員と四年生の一部が参加し、日本放送合唱コンクールに優勝し合唱団の活躍はつづく。三日野合唱団はこの年、武蔵野音楽大学で行われた全国小学校音楽研究大会に参加したり、また、NHK全国学校音楽コンクールの優秀校となるなど多くの実績を残し、全国から多くの参観者が毎日のように三日野を訪れたのもこの頃である。このように全国に合唱で知られた三日野に、当時の仁井P.T.A会長のほからいによって当時の文部大臣、愛知揆一氏よって揮毫された校訓「真面目なれ自ら努めよ」の大きな額が飾られた。現在、この校訓は、子供たちがなじみ易いように「まじめなれ みず

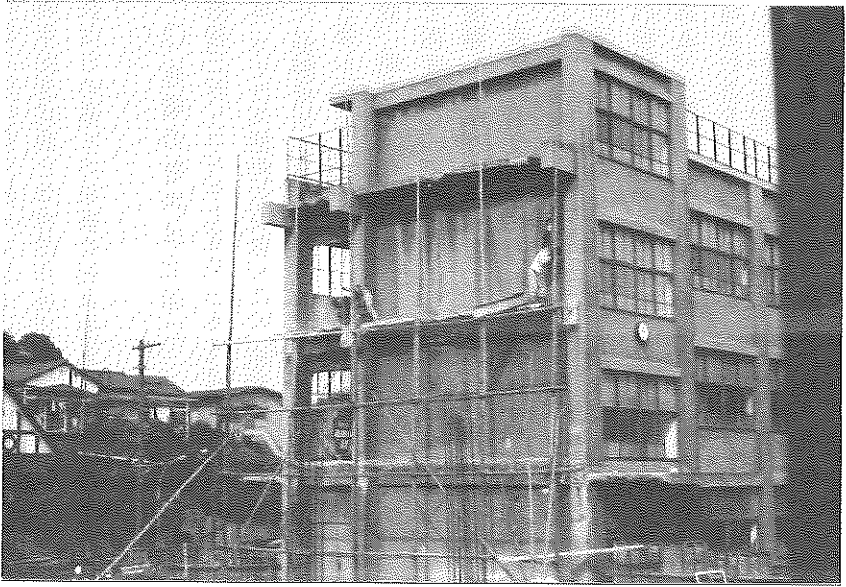
から つとめよ」と平仮名に改められている。

昭和三八年（一九六三）四月に第七代、増田喜恵蔵校長が就任し、この時、赤池校長が転出されたが、後年、奇しくも教頭として再び三日野へ赴任することになった、若き日の近藤雅史先生は、三日野に一〇年間在職し、このときに転出されている。

### ○東京オリピックの聖火

昭和三九年（一九六四）三月には、三日野の第二期改築工事によって、職員室、視聴覚教室、会議室、資料室などが完成した。この頃から通学時の交通安全のために黄色の通学帽が使用されるようになった。八月にはNHK全国合唱コンクールの二位に入賞している。豊かになった日本を象徴するかのようには、この年一〇月には東京オリピック大会が開催され、それに合わせるように東京の首都高速道路が整備開通し、通学路の上を高速道路が走るようになった。東海道新幹線も開通し、今まで東京から大阪へは六時間以上かかったが、新幹線によって三時間余りで行けるようになった。

全国各地をリレーされた東京オリピックの聖火は都内に入り、オリピック開会式を二日後にひかえた、



本格的増築工事のすすむ校舎の接続部（昭和40年代）

一〇月八日には三日野の子供たちが大崎橋陸橋まで聖火の出迎え見学に行った。開会期間中には三日野の子供たちは馬術などのオリンピック競技を国立競技場に見学に行っている。

東京オリンピックで日本は、重量挙げ、体操競技、女子バレーなどで金メダル一六個を獲得する大活躍をした。

#### ○月面着陸と“いもり”

昭和四二年（一九六六）四月、第八代、高田数間校長が就任し、五月には創立四五周年記念式典が挙行された。その後、昭和四三年に電子オルガン一台が購入され、音楽の授業に役立ったことが記録に見られる。

昭和四三年（一九六八）、宇宙船アポロ八号が月の裏側を廻り、テレビの撮影に成功するなど本格的な宇宙時代の幕開となった。昭和四四年（一九六九）二月一日には宇宙船アポロ一号が月面に着陸し、人類が初めて地球以外の天体に立つという偉業が成し遂げられ、日本中が月から送られてくる映像にテレビの前にくぎづけとなった。

その二日後のこと、岩手県松尾村の松野小学校と寄木小学校から“いもり”が贈られることになり、“い

もり」一〇〇匹が空輸され三日野へ到着し、六角池に放されて飼育された。「NHK一〇二」の番組に取り上げられ、高野教頭と六年生の岸俊郎君と野口裕子さんが出演し、岩手県の児童と対談をした。

四月には第九代、宇佐美英雄校長が就任し、一〇月一八日にはNHK番組「四つの目」の録画撮りに六年生が一六名出演するなど、話題の多い年になった。

### ○少年消防クラブの活躍

昭和四五年（一九七〇）頃には高度経済成長のため起こった、さまざまな環境汚染が問題化して、その夏には自動車の排気ガスによる光化学スモッグの警戒警報がたびたび発令され、児童にも注意を呼びかけられた。この年の一月二十八日、三日野の「少年消防クラブ」の研究発表が評価され、東京都特選一位に入賞している。次の年、昭和四六年（一九七一）一二月にも、消防クラブ研究発表「地震および地震対策」が優秀と認められ消防総監特選となり、三日野の少年消防クラブは火災予防思想の普及の研究発表が成績優秀であったとして消防総監から表彰状を授与された。

昭和四七年（一九七二）一月に第三期工事の鉄筋校



昭和45年頃の三日野全景。手前の畑は現在の第二校庭

舎が完成し、理科室、図工室、音楽室が整備された。翌月、二月一日にフジテレビの番組「私たちの東京」に三日野消防クラブの活躍が紹介され、消防クラブのメンバーが番組に出演している。五月二〇日には宇佐美校長のもとに開校五〇周年記念式典が華やかに挙行され、「五〇周年を祝う歌」が高らかに歌われた。二月には消防庁から防火研究発表が優秀につき表彰され、同時に、品川消防署長からも防火教育優秀校として表彰を受けた。

昭和四八年（一九七三）四月、第一〇代、中村喜八郎校長が就任した。この年の十一月にも「消防クラブ」の火災予防の研究発表で消防総監賞を再び受賞するなど、昭和四〇年代後半は、「三日野少年消防クラブ」の研究発表による活躍が大いにめだった。

翌年の昭和四九年（一九四七）一月には体育館の前に鉄筋の西校舎が完成し、戦後、建てられた木造校舎が、およそ、三〇年かかり完全に鉄筋校舎に建て替わったことになる。四月には都立立川養護学校品川分校が併設され「なかよし学級」が発足し、八年後の昭和五七年（一九八二）三月までつづいた。

## 〔六〕国際交流の時代

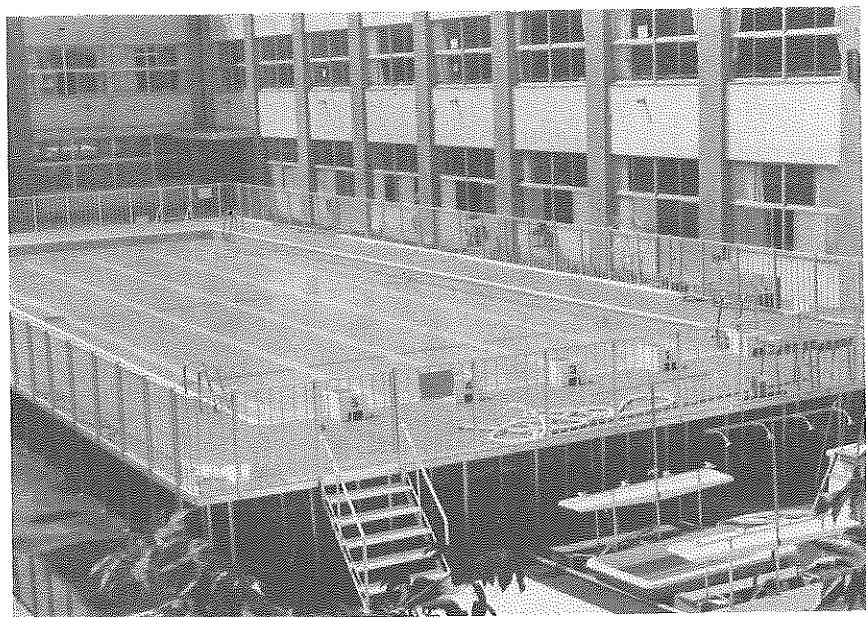
（昭和五一年～昭和六〇年）

### ○国際交流は北の国から

昭和五一年（一九七六）四月、第一一代、並木忠雄校長が就任する。この年の六月には全教室にカラーテレビが備えられた。カラーテレビはすでに家庭の中でも生活の一部になっているテレビ時代である。この年の暮れ、三日野の五、六年生の児童がNHK番組「はてなゲーム」に出演し、一二月二四日に録画撮りされたその番組が、お正月の元旦に全国にテレビ放映されたのもこの頃のことである。

昭和五二年（一九六七）、三日野は鉄筋校舎の増築が進み校庭が手狭になり、これまで使用していたプールは蓋もなく運動場を狭くしているため、それを解決するため従来のプールをとりこわし、組立式プールが仮設されることになった。その組立式プールは六月に完成し、その夏から子供たちが使用することができた。このプールは夏季にだけ使用し、他の季節は片づけ格納して校庭を広く使うことができる利点があり、細長く狭い三日野の校庭の苦肉の策であった。





校庭に仮設された組立式プール（昭和52年）

昭和五四年（一九七九）四月、第一二代、多田羅弘校長が赴任した。翌年、昭和五五年（一九八〇）には国際化時代の影響か、ソ連大使館から数人のロシア人女性教師が、三日野へ授業参観に訪れ、日本の小学校の授業のようすを熱心に見学していった。偶然ではあるがこれから始まる国際交流の時代の前兆というべき出来事であった。

#### ○日本と中国の国交回復

昭和四七年（一九七二）七月に田中内閣が発足すると、日本と中国の国交回復の動きが促進され、九月二五日、当時の田中総理大臣、大平外務大臣ら一行は北京を訪れて周恩来首相と会談し、毛沢東主席を訪問の後、二九日、日中共同声明が調印され両国の国交の正常化がはかられた。このとき中国から贈られたジャイアント・パンダは、上野動物園で子供たちの人気ものとなった。

以後、政府間の交渉が着々と進み、民間では日中の航空路が開かれるなど、政治、経済をはじめ各分野で中国との交流が行われるようになり、昭和五三年（一九七八）八月に「日中平和友好条約」の調印が行われ、一〇月には批准書が交換されて、ここに日本と中国の



三日野へ初めて来校した中国ハルビンの教育視察団（昭和58年10月）

国交が正式に樹立された。

○ 三日野と中国の小学校が兄弟校に

日中国交が回復し、さまざまな交流が行われる中で、昭和五六年（一九八一）四月に品川区の和田教育長が中国を訪問した。ハルビン市を訪れたとき、ハルビン市教育局と品川区教育委員会とで覚書が取り交わされ、日中友好交流が教育の面でも具体的に実現した。

ハルビン市の継紅けいこう小学校と三日野小学校が兄弟校の提携を結び、以後、両小学校の子供たちは手紙や作品の交換を行うようになった。

中国のハルビンから三日野に送られてきた絵や書は資料室や廊下に飾られ、中国の子供の作品を身近に接することができ、中国と日本の子供たちとの国際交流が始まった。ハルビン（哈爾濱）市は、中国東北部の黒竜江省くわんりゅうきやうの省都で、松花江しゅうかきやうの流れに沿った商工業都市として交通の要衝となっている。

○ 中国からのお客さま

それから二年半後、昭和五八年（一九八三）一〇月二日に品川区教育委員会の招きで、初めての中国から

教育視察のため、ハルビン市の教育学院長（日本の短大にあたる）兼、教育局副局長である馮光武先生と第一三中学副校長の王興泰先生が来日された。翌、三日には提携校である三日野を訪問し、多田羅弘校長はじめ教職員、児童が揃って歓迎式を開き中国の先生方を温かく迎えた。

その後、およそ一カ月にわたり両先生は日本に滞在し、品川区立の日光林間学園の施設や他校の教育視察など、多忙な日程にもかかわらず、その間、三日野を数度にわたり訪問されて授業の見学を熱心にされた。

両先生は理科や道徳の授業、学級会などにも興味を持たれて参観されて、そのときの授業にテレビやテープレコーダーなどが使用され、これが授業をたいへん活発にしていることに関心を寄せた。また、授業中の子供たちが自ら学ぼうとする姿勢や先生の授業のやり方に非常に感心していたという。中国の先生方は三日野の子供たちを見て、日本の子供は、体格の発育もよく、よく勉強し、規律を守り、運動もよくし、人々に親切であるという感想を持った。しかし、一方、肥満や近視の児童が多いこと、歯があまり良くないことな



昭和30年代に発行された、同窓会誌「若鮎」

ども指摘した。中国では子供の健康を特に重視し、太らないよう注意して充分な運動をさせているという。日本のような学校給食はなく、子供たちは弁当を持参し、米食、<sup>まんとう</sup>「まんとう」が主食でおかずは野菜が多く質素であるなど、日本と中国の小学生の学校生活を比較した印象を語っている。

翌年、昭和五九年（一九八四）六月に品川区中国教育視察団の一員として、三日野の近藤雅史教頭が初めてハルビン市の継紅小学校を訪れ、中国の小学生の学校生活を視察してきている。また、一〇月には中国共產党訪日団が三日野に來校した。次の年には、ハルビン市から王俊英・継紅小学校副校長、以下四名の中国教育視察団が來日するなど人的交流がますます盛んになっていった。

### ○三日野同窓会の再開

三日野同窓会の歩みを少ない資料からふり返ってみる。昭和二七年頃に同窓会報誌「若鮎」<sup>わかあゆ</sup>復刊第一号が発行されたと記録にあるが、残念ながらその会報は現存しない。同窓生の中でどなたか保存している方がいるだろうか。昭和二七年（一九五二）に三日野同窓会

長として水谷久之助氏（昭和一〇年卒業）が創立三〇周年記念誌に寄稿している。この頃も三日野同窓会活動が活発に行われていた。

その後、昭和三三年（一九五八）四月に「若鮎」の再刊第一号が発行され、翌、三四年の一〇月に第二号が発行された。それからしばらく中断し、六年後の昭和三九年（一九六四）一月になり第三号が再び発行され、翌年、一月に第四号が発行されてから、以来、同窓会は一七年の冬眠にはいった。

昭和五七年（一九八二）、三日野は開校六〇周年を迎えたのを機に、断続的に続いていた三日野同窓会の組織の再編成が計られ、佐藤謙次氏（昭和八年卒業）を会長に迎え再生同窓会がスタートし、現在まで一〇年間、継続的に同窓会の活動が続けられてきた。

公立小学校での同窓会活動は少ないと聞く。実際、その組織の維持は非常に難しいことも事実である。今回、平成四年（一九六二）に開校七〇年を迎え、三日野同窓会も同時にお祝いできることは喜ばしいことである。

### ○丘の上の校庭

昭和五九年（一九八四）四月、第一三代、国井隆夫

校長が就任した。この年、池田山公園がつくられるにあたって、その隣地が三日野の第二校庭となった。道路を隔ててはいるが、立派な歩道橋も造られ、直接道路を横断せずに行くことができる。前年から始まっていた校庭新設工事が完成し、四月二十八日、国井校長のもと、多くの来賓を迎え、第二校庭完成祝賀会が喜びのうちに行了われた。

今までは三日野名物の細長い校庭であったが、丘の上にできた第二校庭は、子供たちが野球やサッカーを思う存分できる、もう一つの広い運動場を持つことになった。第二校庭は砂を敷いた自然のグラウンドで、アスファルト舗装の第一校庭のほかに土に親しみながら運動できるグラウンドの誕生は、東京の町に住む、三日野の子供たちにとって価値あるものに違いない。

その時、同時にできた隣の池田山公園は、自然を生かした回遊式庭園として、子供たちや区民の憩いの場になり、現在、三日野の運動会の昼食のときには、公園の中で子供たちが家族揃って楽しげにお弁当を食べる風景が見られる。



昭和59年4月に完成した第二校庭

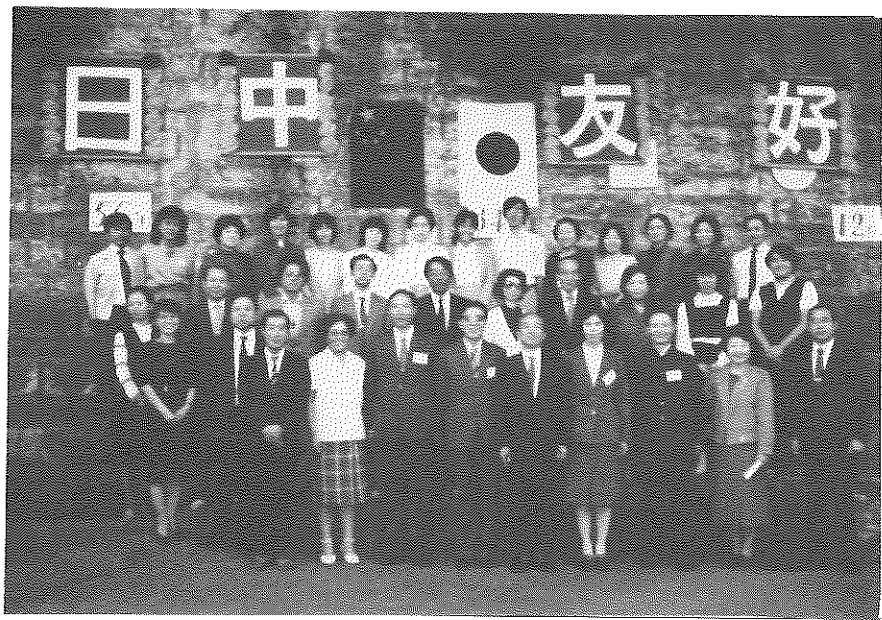
## 〔七〕現代の三日野

(昭和六一年～平成四年)

### ○ 継続する中国との交流

昭和五八年(一九八三)一〇月に品川区教育委員会の招きで、初めて中国から日本へ教育視察のためにハルビン市の馮光武・教育局副局長と王興泰・第一三中学副校長の両氏が来日し、ハルビン市の提携校である三日野を訪れた。一方、昭和五九年(一九八四)六月には三日野から初めて、品川区中国教育視察団の一員として、近藤雅史教頭がハルビン市の継紅小学校を訪れ本格的な交流が開始されたことは前に触れたが、以来、三日野と継紅小学校は現在に至るまで友好交流がつけられている。

それ以後の経過をたどってみると、昭和六一年(一九八六)六月、三日野の平田昭子教諭が中国を訪問し、兄弟校のハルビン市継紅小学校を訪れて中国の小学校事情をつぶさに見聞してきた。昭和六二年(一九八七)七月には、中国ハルビン少年宮(歌舞や曲技を訓練する子供の集まり)の少年少女が来校し、三日野の子供たちに素晴らしい演技を披露してくれた。その時、PTA行事である「夏休み子供お楽しみ会」で「ドジョ



日中友好の教育交流は進む(昭和62年10月)



三日野と兄弟校のハルビン市継紅小学校

ウつかみ”が校庭で行われていたが、中国の少年や少女も、その仲間に加わり、三日野の子供たちと一緒にになって大いに楽しんでた。その年の一〇月にはハルビン市副市長一行が教育視察団として三日野に来校している。

昭和六三年（一九八八）九月、大野幸男校長が訪中し、翌年の平成元年（一九八九）九月、宮本言ハルビン市長が訪日し三日野を視察している。平成二年（一九九〇）の六月には、王朝晋ハルビン市教育委員会副主任ら一行の教育視察団が来校した。この時、一緒に同行してきた、中国ハルビン市の児童生徒五名が初めて三日野に来校し、中国と日本の子供たちの友好の輪をなお一層広めることができた。その年の一〇月には安尾久子教頭が中国教育視察団としてハルビン市を訪問している。

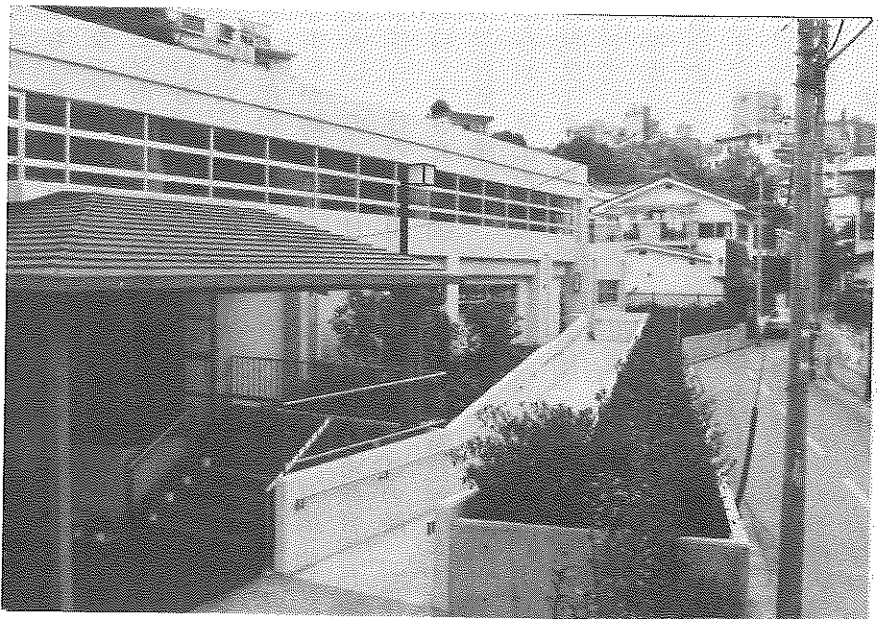
平成三年（一九九二）九月、武敏ハルビン市教育委員会副主任、他五名が来校したとき、女性の尚慶蓮継紅小学校副校長も一緒に三日野を訪れ小学校のようすを見学した。一〇月には三日野児童代表として六年生、佐藤慶君・五年生、石原美和子さんの二人が中国を訪問し、継紅小学校で熱烈歓迎を受けた。

今年、平成四年（一九九二）六月には大内敏光校長がハルビン市を訪れ、継紅小学校をはじめ多くの教育施設を視察してきた。継紅小学校はハルビン駅の近くの市街地の真中にあり、学校は広く、道路をはさんで二カ所に分かれている。児童はおよそ一五〇〇人ほどで、市内でも優秀な学校であるといわれている。日本と違うところは学校内に工場を持ち独自の生産性を上げていることで、中国では、この学校に限らずほとんどの学校がこの方式をとっているという。

このように毎年、品川区とハルビン市、三日野と継紅小学校は友好交流を続け、一年おきに相互に使節団が訪問している。日中の教育交流はその成果を着実に上げている。一九七二年に日本と中国の国交を回復してから二〇年目にあたり、三日野とハルビン市の継紅小学校が提携し兄弟校となってから一〇年が過ぎた。一つの節目であるが、これからも両校の交流はますます密接なものになっていくのであろう。

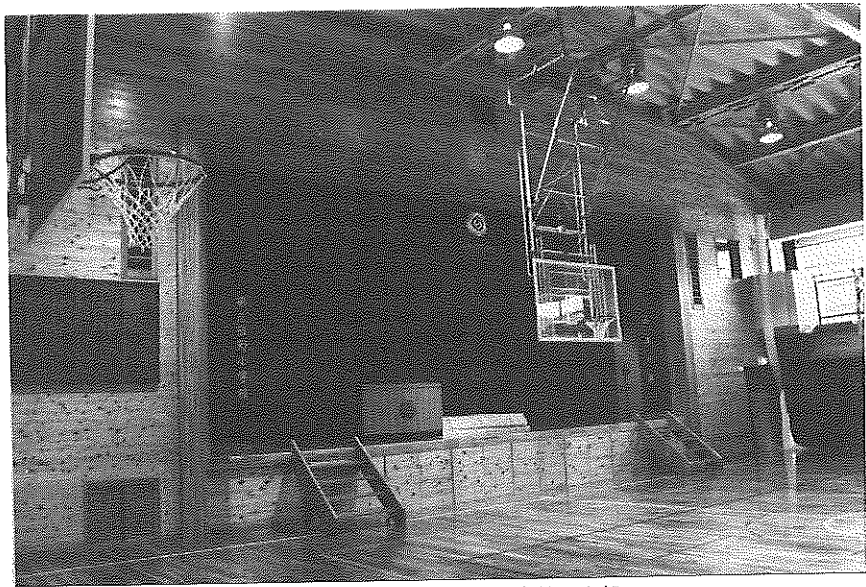
### ○新体育館と新プールの完成

昭和六二年（一九八八）四月、第一四代、大野幸男校長が就任した。この年は、開校六五周年にあたり、



完成した新体育館（昭和63年3月）





明るく広い近代的な新体育館の内部

以前から計画された新体育館の建設工事が着工されていたが、昭和六三年（一九八九）春に新たな体育館が完成し、三月一二日には多くの来賓を迎え、館落成記念祝賀会が盛大に行われ、その完成を喜びあつた。この新しくできた体育館で、開校六五周年記念同窓会も開かれ、恩師を囲み多くの同窓生が集まり旧交を温めたのであつた。

昭和一六年に建てられた最初の雨天体操場は、四年後の昭和二〇年五月、空襲の戦火で焼失してしまい、戦後、一六年目の昭和三六年（一九六一）に体育館が再建されたが、以来、三三年、建物の老朽化が激しく、今回、新築されたものである。

この新体育館は床面積が約、八〇〇㎡と以前の体育館の倍近くの広さになり、床材のクッションも良く屋内運動をするとき、児童の足になるべく負担がかからないようにに考慮されている。周囲の壁も木目のソフトな内装になり、天井には従来より明るい近代的な照明が取り付けられている。立派な舞台が設置され機能的な設備や放送室も完備されている。

新体育館の落成に引き続き、新プールと校庭の舗装工事が着手された。今まで組立式プールが使用されて

いたが、耐用年数もあり漏水事故なども心配されるところから、新たにプールが建設されることになった。

このプールは縦二五m、横九m、深さ八五cm（最深部一二五cm）の埋め込み式構造で、夏季以外のプールが使用されていない時期は、蓋によって覆われ、その上は校庭として使用できるようになっている。

プールの新設工事と同時に行われた校庭の舗装改修工事は、最新の材質によるサーフアス舗装で、校庭の水はげがよく、運動のとき児童の足に負担がかからず、転んでも怪我をしないなどの優れた特徴がある。グリーンの色彩も鮮やかで美しく、機能的な校庭は、運動場として遊び場として、今、三日野の子供たちが元気に活動する場所になっている。

### ○石のすべり台の記念碑

昭和六三年に校庭舗装の新たな改修と今までの組立式プールから本格的なプールの建設が計画されたとき、三日野の子供たちに長年親しまれ、同窓生にとっても想い出深い「石のすべり台」が撤去されることになった。そこで、同窓会はこれを惜しみ、何とか保存することはできないかと考え、学校に申し入れたところ、

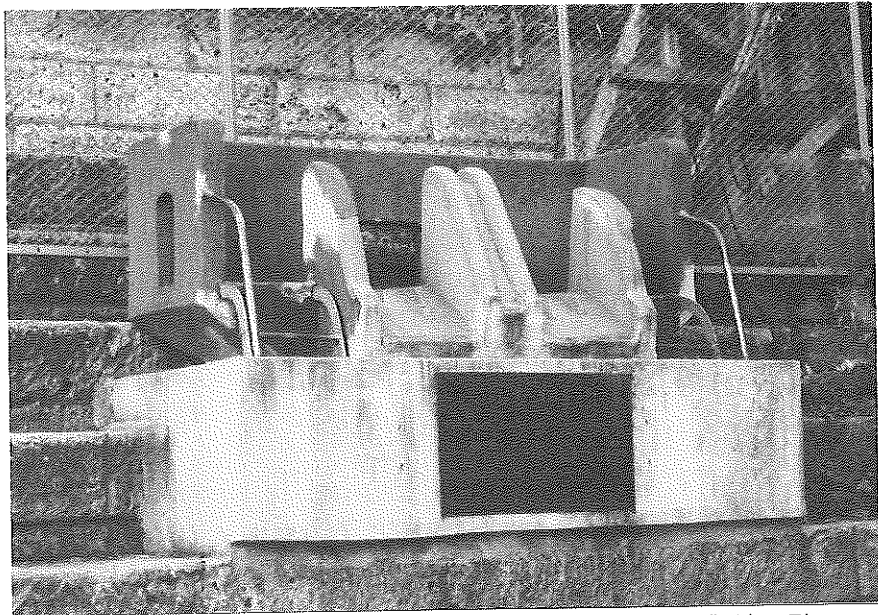
当時の大野幸男校長はこれをよく理解して、各方面に尽力してくださり、石段の片隅に、すべり台の一部を記念碑として、第三日野小学校・同窓会・PTAの三者の名をもって残すことができた。

戦災で全てを失った学校に唯一残ったのが正門の門柱と「石のすべり台」だけで、開校当時から戦前、戦後を通じて、三日野に残ったものはこれだけである。これはコンクリート製であったが子供たちからは「石のおすべり台」と呼ばれ、六〇余年にわたり三日野の子供たちに親しまれてきた。

昭和の初め頃、一人の少年が第三日野尋常小学校を卒業した。少年が青年になるころ、日本の国は戦争に突入し、青年は兵士として戦場へ出征して行った。

そして、昭和二〇年、日本は戦争に敗れ東京の町々は焼土と化し、第三日野小学校も空襲のために、教室も講堂もすべて灰燼に帰っていた。

戦場で終戦をむかえた青年は、凍土シベリアで四年間の長い抑留生活を終え祖国へ帰国し、その帰還兵が最初に母校の校庭に立ったとき、幼い頃に学んだ校舎は戦禍のために、跡形もなく消え失せ、当時のおもか



三日野の子供たちの思い出「石のすべり台」が記念碑となる（平成元年3月）

げを残すものは何一つ見あたらなかった。

しかし、校庭の片隅に立つ「石のすべり台」だけが、唯一つ残っていた。その、すべり台に手を触れると、冷たいはずの「石のすべり台」が、それは温かく感じられたという。加藤金一青年（昭和六年卒業）は、いつまでも、いつまでも、手でさすり涙があふれて止まらなかったという。

また、戦時中に三日野国民学校に通った、玉林由光氏（昭和一九年卒業）は「すべり台の四季」と題して次のような詩を寄せてくれた。

#### 〈春〉

石のすべり台の下の／三角の穴の中にもぐり込んだ／足もとで桜の花びらがクルクルと二、三度まわって／石段の方へ抜けていった／桜の根元に／鬼の足が見えている／じつと息をこらして隠れている

#### 〈夏〉

石のすべり台に／お腹をペタリと付ける／石の温もりが／プールで冷えきった身体を／心地よく温めてくれた／両手をすすりに掛ける／スベスベした手すりは／お母さんの腕のようで温かい

〈秋〉

石のすべり台を逆上がりする／桜の落葉に足すべらせて／前へつんのめった「逆上がりはいけないよ」／すべり台と桜の木が言っているようだ／黙って身体を返し勢いつけてすべる／ザザザと落葉も一緒にすべった

〈冬〉

石のすべり台が／帽子をかぶった／少し大きめの白い帽子／階段の白い帽子をよけながら登った／ふんわり兎の背中のようにだ／次の休み時間すべり台の帽子に／ポコポコ穴があいていた／すべり台がかわいそうで淋しかった

多くの同窓生の想い出を託した、「石のすべり台」記念碑銘板には佐藤同窓会長の筆になる碑文が次のように記されている。

『ここにすべり台ありき』

第三日野尋常小学校が、大正十一年（一九二二）四月、この地に開校されてまもなく、校庭の一角に造られた「石のすべり台」は、昭和六三年（一九九八）八月に至るまで、六〇余年の永きにわたって母校の子供

たちに親しまれてきた。風雪と戦禍とに耐え抜いたこのすべり台は、私たちの遊具であり、また、こよなき友だちであった。今回、新プールの建設と校庭舗装の改修に当たり、「石のすべり台」が撤去されることとなり、その一部をここに記念として残し、思い出のよすがとする。平成元年三月吉日

すべり台は固い石で出来ているが、三日野に学んだ幾千人もの子供たちの小さな手によって、毎日、毎日擦り減らされた跡がはつきりと残り、役目を終えた「石のすべり台」はその長い歳月を物語るように石垣の木陰の下にひっそりと佇たずんでいる。

○七〇年の歩みと明日への旅立ち

大正十一年（一九二二）四月に開校した、三日野が七〇年歩みを続けてきた足跡は、今、ふり返ると、決して平坦な道でなかったことが分かる。

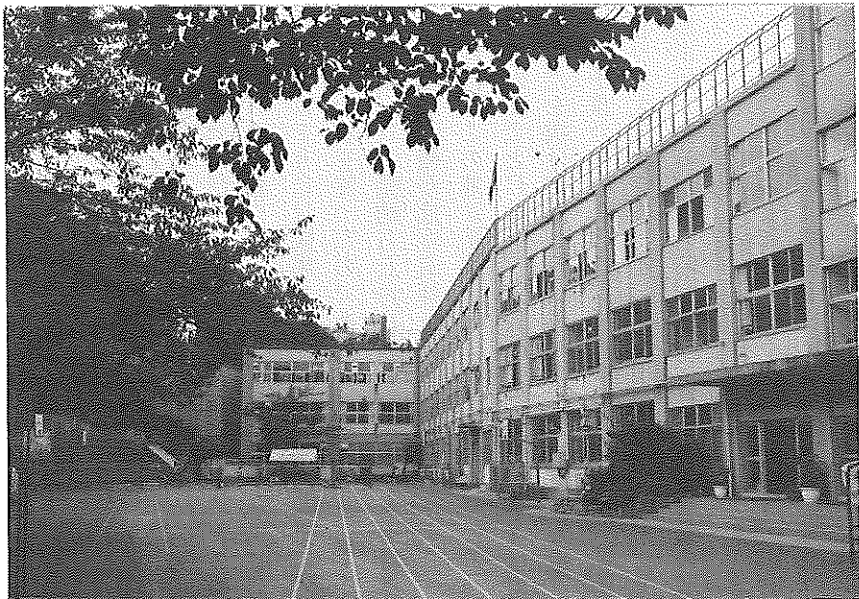
三日野は東京にある小学校としてはめずらしいほどの自然に囲まれた素晴らしい環境だとよく言われるが、学び舎の窓からは、春の桜、夏の緑、秋の紅葉、冬の雪景色と四季折々の季節を身近に感じることができる。

四季は七〇回が廻り、大正時代、田園風景の開校の頃、三日野の全てが戦火によって焼き尽くされ、大きな試練であった戦争の時代、焼け跡から力強く復興した戦後の時代、それ以降、校舎や施設は段々に充実に、現在に至るまでの長い歴史があった。今、新しい体育館、プール、校庭のサーフラス舗装もできて、現在は三日野の完成期と言っても過言でないかもしれない。

平成三年（一九九一）四月に第一五代、大内敏光校長が就任した。平成四年（一九九二）九月現在、三日野の児童数は四八三名で一五学級である。大内校長、安尾教頭を中心に担任教諭一五名、音楽、図工、家庭科、養護の各一名、嘱託一名の合計二二名の先生方と主事（事務二、用務二、給食六）一〇名の方々によって現在の三日野が支えられている。

平成三年（一九九一）三月の第七〇回の卒業生を加え、三日野の卒業生は九三六二名となった。今年、卒業していった子供たちが成人する頃は西暦二〇〇一年となる。

二一世紀の輝かしい明日に向けて三日野は更に歩みつつけていく。



現在の第三日野小学校（1992年）

## 三日野の界限

## (一) 三日野の周辺

## 〔池田山あたり〕

## ○池田山今昔

目黒川の低地に突き出たような丘陵の突端のあたり、現在の東五反田五丁目一帯は「霞が崎」といわれ、江戸時代ここに備前岡山の池田藩の下屋敷が置かれていた。この下屋敷は寛文年間（一六六一―一六七二）の頃にできたという。記録によると、敷地はおよそ一万一、六四二坪の広さがあり、樹木が鬱蒼としていたという。岡山の池田家は源頼光の流れをくみ、四代目のとき美濃の池田郡に住むようになり、池田と名乗るようになった。桶狭間の合戦で織田信長の軍に属し、後、関ヶ原の合戦のときは東軍（徳川方）について戦功があり、以後、徳川家と深いつながりをもつようになり、大大名となった。

明治になって三一万五二〇〇石で廢藩となり池田家

は侯爵となった。大分縮小はされたが池田家本邸が置かれ、いつの頃からか、ここが「池田山」と呼ばれるようになった。

老松の巨木がそびえる南端の崖の上にあった見晴らし台（現在の天理教会のあたり）に立つと、遠くに富士山を眺め、眼下には大崎の村々を一望におさめる風光絶佳の地であったという。邸内では兎狩りができ、目黒川のほとりには鴨場もあって、殿様は遊猟に休養にと浩然の気を養ったのであろう。古老の話によると大正の頃、この見晴らし台にあった松の巨木を目標によく小型飛行機が飛行訓練をしていたという。

その後、この地が箱根土地（現在の西武）によって分譲されることになり、高級住宅街となり、そこは樹々のあいだを抜け、沢を飛び越えて、ドンダリを拾ったりする子供たちのよき遊び場となった。戦前、池田山にあった大きな建築物として、現在のインドネシア大使館旧館があるが、当時、松坂屋社長の伊藤家の邸宅だった。

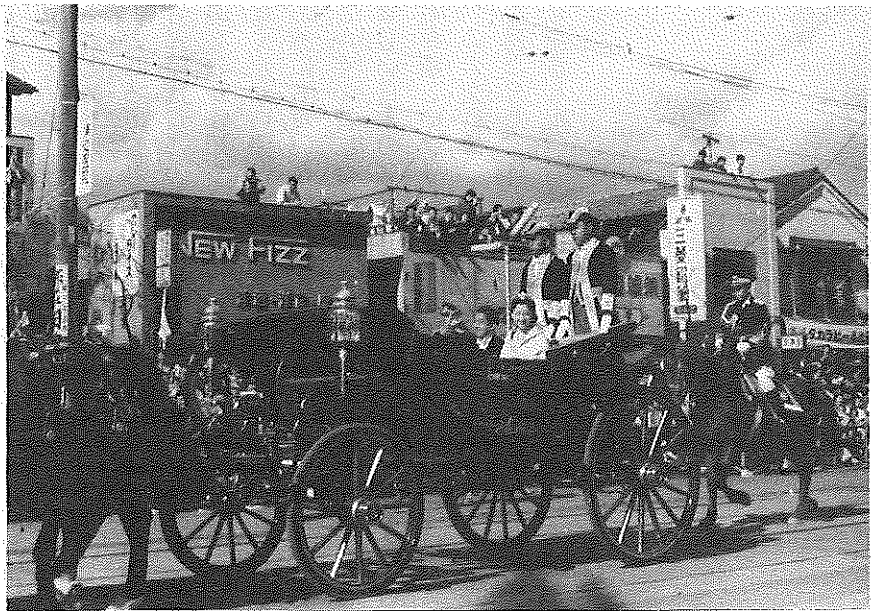
三日野の正門のところにある池田山公園は、回遊式庭園として四季の自然を楽しむことのできる区民の憩いの場になっているが、前は荏原青果社長の所有であつ

た。そのずっと以前、大正時代には大正天皇の侍医であった神戸久誠博士の邸宅であったところから、校庭の上の坂を「かんべ坂」と言うようになった。屋敷に沿ったこの坂は、その頃、椎の大木が繁り、道も細く昼でも薄暗いほどだった。

### ○ 全国に知られた池田山

昭和三三年（一九五八）一月二七日、宮内庁は、池田山に住まわれている正田家の美智子さまが皇太子妃になられることを発表した。このニュースが全国に伝わると、美智子さまの愛称からミッチイブームに日本中が湧き、一躍、池田山が全国に知られたり、毎日、正田邸に見物人が押しかけ、東京の新名所となる騒ぎであった。

翌、昭和三四年（一九五九）四月一〇日、御成婚の日の朝早く、美智子さまは、宮内庁からのお迎えの車に乗られ池田山の自宅を出発され、テレビや新聞の報道陣とお見送りの人垣で池田山の町は人であふれた。皇居内の神殿での御婚儀の後の御結婚パレードは、華麗な馬車行列がくり広げられた。沿道には、数十万人の祝賀の群衆がつめかけた。およそ八〇〇台のテレビ



皇太子ご成婚パレードの馬車行列に湧く沿道（昭和34年4月10日）

カメラも配置され、この日に合わせて閉局したテレビ局もいくつかあった。この日、全国のテレビがこの盛典のテレビ中継に終始した。この一年間でテレビ受像機の台数が倍増し一挙に二〇〇万台を突破したという。

次の一文は明治から大正にかけて自然あふれる池田山のたたずまいが描写され、また、当時、美智子妃殿下のご成婚に日本中が湧いたときのようなすが良く分かる。

『(前文略) その向こうに池田候爵のお屋敷があった。門の傍らには、武家屋敷風の家があったが、そこに誰が入ることもとがめられなかった。邸内は樹木が生い繁り、山や沢があり、幽邃な気が夏もひやりとしずんでいた。細い道がついていて、そこをしばらくいくと五反田寄りに裏門があった。備前岡山の殿様の、とてつもなく広大な下屋敷跡である。

僕たちはここを備前山とも池田山とも言い、よく遊びに行つた。蝉や兜虫を捕つたり、銀杏を落したり、椎の実を拾つたりしたものである。(中略)

池田山は、大正末年の経済恐慌のあおりを受けて、すでに箱根土地会社の所有になっていた。森は伐られ丘は拓かれて、綺麗な分譲地になっていた。やがてそ

こに思い思いの住宅が建ちならんだ。新しい昭和の時代とともに、そこは高級住宅街となり、今は昔の面影もとどめなかった。(中略)

ところで鶯れ高いわが皇太子妃殿下は、正田美智子さん時代、この池田山に育つたと言う。池田山のどの辺なのかは知らない。しかし、恐らくそこはかつて、ぼくが幼い頃、木の実を拾つたり蝉を捕つたりしたところにながいないと思つている。そんな古い池田山はとつくの昔になくなつたあとの、新しい池田山から輝かしい日本のプリンスが出現したわけである。われらが新しいプリンスに祝福あれ。』

この文章は、白金猿町(現在の高輪台)で少年時代を過ごした、俳人・安住敦氏のエッセイストクラブ賞を受賞した、「春夏秋冬帳」の「池田山」の一節である。



## 〔寺町あたり〕

### ○寺町の成立

三日野の正門を出て左手の岡の上に多くの寺々がある。この寺町には、芝の増上寺の直末寺が八軒と京都の誓願寺に属する一軒と合わせて九軒の浄土宗系の寺がある。

この寺町は江戸時代初期に起った「明暦の大火（振袖火事）」のあと、防火のために大がかりな江戸市中の区画整理が行われた結果、江戸の中心部にあったお寺が郊外のこの地へ移転してきた。

### 四代將軍・徳川家綱のとき、明暦三年（一六五四）

一月一八日から一九日にかけて江戸の町は大震災となり、江戸城の本丸・二の丸・三の丸をはじめ、大名屋敷五〇〇余、寺社三〇〇余、橋六〇余、八〇〇余町と江戸の町の大半を焼き尽くす大災害となる大きな被害を出し、これを機に江戸の町は大きく変わった。

その一つとして、徳川二代將軍、秀忠の夫人である、お江戸の方の葬儀がおこなわれた今の麻布狸穴あたりである「我善坊谷」というところに八軒のお寺があったが、その土地が、三代將軍、家光の子息である甲府

城主、徳川綱重の邸地となることになり、その八軒のお寺が増上寺領の下屋敷であったこの地（上大崎一丁目五番〜九番）に移って来た。

### ○江戸時代のたたずまい

文政二年（一八一九）五月、常譽攝門という僧によって著された『檀林縁山志』の中に、この頃の、寺町あたりの寂しく美しいたたずまいが書かれている。

『等境は荏原郡にして銀台（白金台）を界とす。門前に細流、左に流れ、東南のうしろ平田数里にひらけ、わずかに門を入れれば、蒼松は君子の徳風をしめして、雨なきに濤勢をたづれば、歩客は小笠をとりて空翠を袂にしる。』

数寺の柴門樹間に交観し神祠古堂頗る往古の風を存せり。幽邃世縁を忘れ佳地おのずから、信念を起さしむ。況、奥ふかくすすめば茶毘所の哀傷墳塋をつらね、さながら世の非情を教え棄國財位の昔を示せり。又、文人詞客に境をかたらば、水あり、坂あり、林あり、唐鉢明風の詩を賦さしめ圓位頓阿の詠をしたたむべし、且客然の亭、又は岡より眺望すれば景致春秋にとみて花夕雪曙互にわかちあり、今八境を山中の総内に列ら

ね、八景を遠近の外にたづねてしるさば』

〔八 境〕

最上鏡 大崎祠 蒼松林 無常坂

鐘馗堂 遠垢門 離塵橋 偃草徑

〔八 景〕

遠山落暉 芙蓉朝雲

平田耕転 驪村時雨

銀台行客 遠里春花

瑞聖漏声 雉宮新樹

○寺々のこと

『常 光 寺』 (正 福 山)

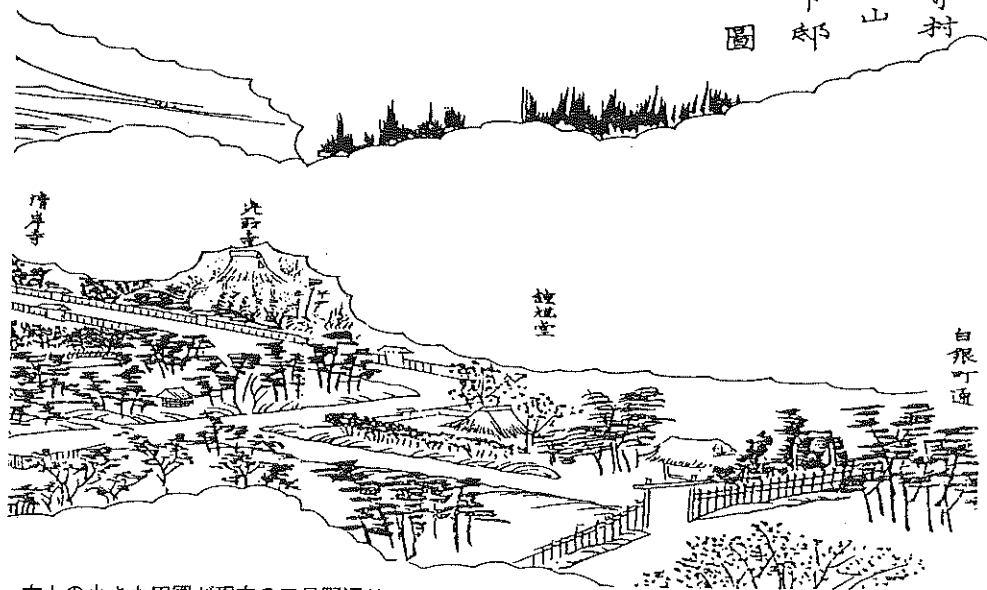
元和元年(一六一五) 芝金杉に創建され、その後、高輪北町に移り、明治四三年(一九一〇) になって正福寺と合併し現在地に移転した。

〈福 沢 諭 吉〉

慶應義塾の福沢諭吉は、この地の風光を愛し、生前みづから墳墓の地として選びおき、明治三四年(一九〇一)に没すると、この寺に埋葬された。

昭和五三年(一九七七)に福沢家の意向によって麻

大崎村  
縁山  
下郎  
圖



左上の小さな田圃が現在の三日野辺り

布の善福寺に改葬されることになったが、柩の中に水が入って保存状態が良かったためか、ほとんど生前と変わることなく、そのままの姿で現われたのには驚ろかされた。

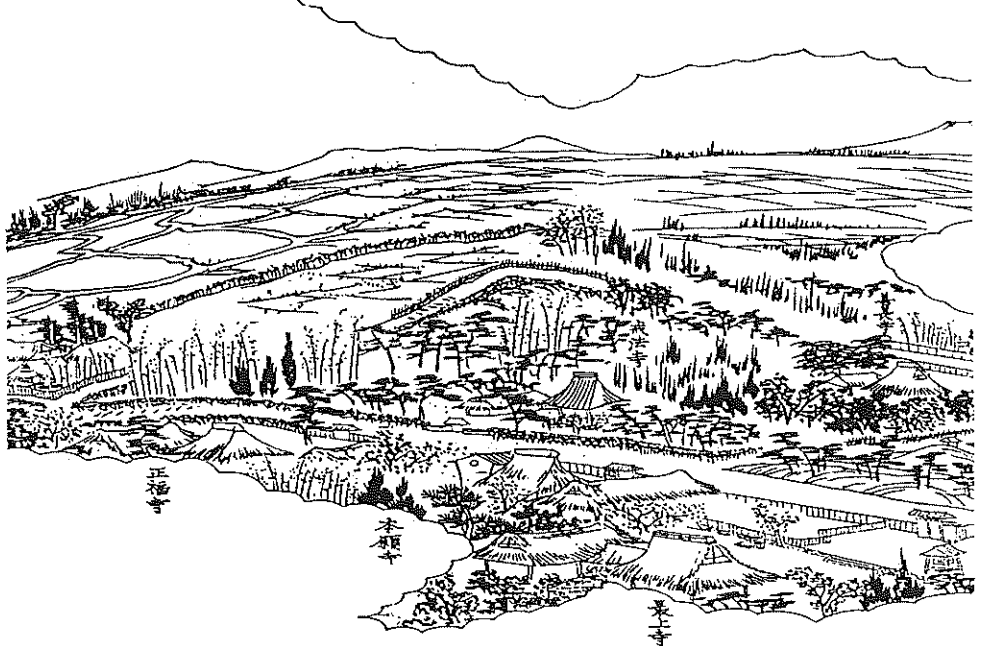
〈和田義郎〉

和田義郎は旧、和歌山の士族。少壮より武芸を善くし、又、文を好む。幕末に鉄砲洲の慶應義塾に入塾し英書を読む。

明治七年（一八七四）頃より、三田義塾邸内に幼稚舎を設けて、特に塾生中童子を集めて教え、朝夕眠食のこと等も、夫人ともども力を協せて、在舎の学生に叱咤いんたの声を聞かず、これを慕うこと父母の如く、休業の日、尚且まづ家に帰るを悦ばざる者あり。明治二五年（一八九二）一月二五日、行年五三歳で劇症の脳炎にて死す。「福沢諭吉、涙を揮って之を記す」と成瀬温によって書かれているが心をうたれる。

〈鎌田栄吉〉

安政四年（一八五七）一月二日、和歌山に生まれる。明治七年（一八七四）慶應義塾に入る。後、明治三二年塾長に就任。大正八年（一八九八）ワシントンにて開催の第一回国際労働会議の政府代表となる。同、



江戸時代の寺町の風景絵図。

一一年塾長を辞任し文部大臣となる。枢密顧問官、帝國教育會會長を歴任。昭和九年（一九三四）七八歳で没す。

〈曾 占春〉

名槩、通稱昌啓、昌道。庄内の医家に生まれ田村藍水に本草学を学び、多紀藍溪に医学を受く。二七歳の頃、本草学を講義して名声顕れる。後、薩摩候に仕え「成形図説」の編纂をする。占春自身の著述も数多い。天保五年（一八三四）二月二〇日、七七歳で没する。深川富吉町の正源寺に葬られたが後、ここに移された。

『本 願 寺』（撰擇山念仏院）

慶長十一年（一六〇六）鷲之森に創建され、後、麻布狸穴に移転したが寺地が公収され、寛文元年（一六六一）には麻布本村に移り、天和四年（一六八四）現在の地に移った。

元首相の三木武夫氏の筆になる山号額があり、また、道路向い側の墓地にある供養塔「奉読誦仏説阿弥陀經十萬卷」は、明和二年（一七六五）に建立されたものと伝えられる。

〈小唄 駒ふく〉

芸の師匠には二つのいき方があって、技芸をもって

第一線に活躍する人と、そうでなく、育成型とでもいうのか、小唄駒ふくさんは、稽古を通して芸の伝承するという後者の方で、「龍角散」の藤井社長や「虎や」の黒川社長など多くのお弟子さんを大切にされたそうである。昭和三五年没、六四歳。

『戒 法 寺』（東照山栄願院）

元和八年（一六三三）に本芝に起立し、寛永九年（一六三二）麻布狸穴に移り、その後、麻布にある一向宗・金藏寺の寺内に移った後、延宝二年（一六七四）当地へ移る。

〈仏足石碑〉

お釈迦さまには勝れた三十二の相があり、足の裏には「千輻輪相」があったという。これは徳本上人の仏足石碑といわれ、これを拝むと無量の罪障を消滅するといわれる。

〈高井蘭山〉

江戸時代「三国妖婦伝」「孝子嫩物語」「那智の白糸」「星月夜顯晦録」「平家帖」等の編著をもって有名である。高井蘭山は名を伴寛、字を思明、通称、高井文左衛門という。宝曆十一年（一七六一）に生まれ

芝伊皿子の屋敷に居住していた。与力、高井伴昌の長男である。「水滸画伝」で挿絵を描く葛飾北斎と組んだ滝沢馬琴は、二人とも名人気質であつていつも喧嘩となり、十二巻より後は、高井蘭山が綴ることになつたという。天保九年（一八三九）十二月没、七七歳。

### 『最上寺』（極善山即相院）

元和年間（一六一五〜一六二三）に溜池に創建、その後、火災により麻布狸穴に移り、寛文元年（一六六一）現在地に移った。開基は旗元・戸川内蔵助安尤（禄高三四〇〇石 宇喜多秀家の旧臣）である。

### 〈戸川播磨守安清（連安）〉

徳川将軍・家斉、家定、家茂の三代に仕えた。十四代将軍・家茂公が幼少の頃、習字の折りに、年老いた連安が小水をもらすという粗相をしてしまった。家茂公はとつさに机の上の水差を取つて、連安の頭の上からざぶりと水を掛けてしまったので、近従の人々が驚き余りにもいたずらが過ぎますと諫めた。連安は自分の粗相で大きな恥をかくところを、悪戯に見せかけてくれた幼君の気持のありがたさに、涙にむせぶばかりであつたという。

### 〈戸川安宅（残花）〉

幕末、戊辰戦争のとき彰義隊に加わり奮戦し生残り、明治になつて勝海舟の談話聞き書き「海舟先生」を著す。後、キリスト教の伝導と教育者として後進の育成にあつた。大正十三年七月没す。

### 〈芹沢銈介〉

明治二八年（一八九五）五月十三日、静岡市の呉服屋、大石金次郎の次男として生まれる。東京高等工業学校・図案科に学び、大正六年（一九一七）静岡県立工業試験所に就職し漆器・染色・木工の図案指導を行つていた。しかし、実家の呉服屋が親類の保証人になつたことから倒産し、染色工芸の道に入った。型絵染の分野で、柳宗悦の影響を受けた作品が多く、大変な量と質の作品を生み出し、重要無形文化財、人間国宝となつた。昭和五九年四月没、八八歳。

### 〈畑六郎左衛門の碑〉

畑六郎左衛門は時能といい、大変な豪傑で新田義貞に仕え四天王の一人であつたが、義貞公が合戦で戦死した後は、弟の義助公に仕え、越前、金沢と転戦するが鷹巣城の戦で流れ矢にあたつて壮烈な戦死を遂げた。この碑の文章を書いたのは安積良斉で、碑の書は幕

末の三筆の一人、市河米庵によって書かれ品川区内名碑の一つである。

『光 取 寺』 (宝運山攝現院)

芝西久保に寛永元年(一六二四)に慶安寺として起立、寛永十一年(一六三四)麻布狸穴へ移り、天和三年(一六八三)ここへ移って来た。

〈直至院〉

石造りの閻魔さまの胸に「直至院」という寺の名前が彫り込んである。この寺には「直至」「如西」という二人のお坊さんがいた。二人とも「入定」といって、生きながら自ら墓穴に入り亡くなった。特に如西上人は「我れ鐘馗となりて衆生の疫病を払わん」と言って入定したといわれている。この上人を祀った鐘馗堂には智堂という偉いお坊さんがいたそうである。

〈横綱・陣幕久五郎〉

十二代横綱となった陣幕久五郎は、出雲の国、意宇郡意東村の出身で、小さい時から力が強く、初め松江御船家相撲取・滝登祢市という人の弟子となり、後に、大阪に出て朝日山の弟子となった。安政四年(一八五七)に江戸に来て秀の山雷五郎の門に入り、幕下十一

枚目に「陣幕」というしこ名でつけ出され、不知火を負かしたことが有名となり、慶応二年(一八六六)大関に昇進、翌三年には横綱を許された。

慶応四年(一八六八)十二月二十五日、明治維新の始まりを告げる戊辰戦争の直接の誘因となった。江戸薩摩藩邸焼き討ち事件”が起こると、陣幕は日頃、薩摩藩より恩顧を受けていたことに感じ、周囲が命が危ない”と止めるのを振り切り、三九才の横綱、自らが江戸から京都へ、東海道を昼夜兼行の八日間という早さで駆けつけ、正月二日には京都薩摩邸に江戸の状況を伝えた。その翌日に、鳥羽、伏見の戦い”が勃発した。このことは長谷川伸著「相楽総三とその同志”の中に詳しく書かれている。

深川八幡境内には、高さ五・五メートルの御影石で出来た、陣幕と不知火の立合い姿を表わした横綱力士の碑があるが、引退後はそのあたりを散歩するのを楽しみにしていたという。明治三六年、七五歳で没する。

『清 岸 寺』 (法性山浄国院)

〈祐天桜〉

この寺の門をくぐると「祐天、手植えの桜」がある。

祐天上人(顯譽)は徳川五代將軍・綱吉、六代將軍・家宜らの帰依をうけ、正徳元年(一七一二)増上寺三六世となり大僧正となった。奈良の大仏殿や鎌倉の大仏殿の修復に功績を残し、晩年は江戸目黒に庵を結び隠居した。この寺がこの地に移って来たのが寛文元年(一六六五)であるので、享保三年(一七一八)に亡くなった、祐天上人によって植えられたことは充分考えられる。

#### 〈松平履堂〉

文化十一年(一八一四)旗本、中山勘解由の次男として生まれ、美濃の松平乗豪の養子となる。三四歳で御書院番となり砲術に造詣深く、ペリーが来航したとき浦賀の警備につく。後、西洋調練の隊長など歴任し講武所に勤める。五十歳で軍艦奉行となり幕府軍艦教授に総力をあげた。勝海舟と大変親しかったという。明治二〇年七月、七四歳で没す。

#### 『月窓院』

増上寺の支院として芝増上寺山内の八軒寺町にあったが、昭和六年(一九三一)現在地に移って来た。

#### 〈阪東三津五郎代々〉

三津五郎の初代は大坂・竹田座から明和三年(一七六六)江戸へきて、大和屋といひ立役二枚目として活躍した。七代目は踊りの神様といわれ、昭和二四年に芸術院会員となり、三〇年には重要無形文化財に指定された。

そして八代目は八十助から養助となり昭和三七年に名跡を継ぎ、立役の代表的俳優として老け役や悪人役に屈指の芸を見せ、また、舞踊の阪東流の家元として活躍し、無形文化財保持者に指定され、昭和四一年(一九六六)には芸術院賞を受賞したが、昭和五十年一月、京都南座の初春公演「お吟さま」の千利休役で出演中、フグの肝を食べて中毒死した。

#### 『隆崇院』(善長山)

三代將軍・家光の子息で甲府城主・綱重の正室であった二条関白、年光の姫君が二三歳の若さでなくなられたので、作州浜田の城主、松平清武に命じてできた寺である。

明治三八年(一九〇五)に増上寺山内の公園地改造のため現在地に移転した。その折り当地にあった善長寺と伊皿子にあった長安寺も合併した。

一方、浅草の山谷にあった宝永五年（一七〇八）起立の専念寺は明治四四年の吉原大火で類焼し、再建の折り隣寺の宗林寺と合併し宗念寺と改称した。しかし、大正十二年（一九二三）九月の関東大震災によって再び炎上した。そのとき、上野池の端にあった心行寺の本堂を移築し檀徒を吸収した。昭和二年にいたり隆崇院と合併し今日に至っている。

昭和二〇年、空襲による戦火のために、隆崇院は内陣のみを残して焼失した。現本堂は昭和三八年に再建されたものである。

#### 〈伊東深水 一門の天井絵〉

百花繚乱たる天井絵は美人画で名高い、伊東深水一門の四八人が四一面に描き、深水画伯の亡き好子夫人の七回忌の追善のため、昭和四二年九月に完成した。各々の絵は永久保存に留意して描かれている。また、「菖蒲」を描かれた次男の万耀さんは深水先生より先になくなられている。伊東深水画伯の筆になる牡丹に唐獅子の図は「八方睨みの獅子」といわれ、ここの御本尊をお守りしている。この絵は二間四方の大きなもので畳が八畳敷けるわけである。

#### 〈伊東深水〉

明治三二年（一八九八）二月四日、深川に生まれ、本名を「一」といった。十四歳のとき、鍋木清方の門に入り、東京印刷会社の図案部に勤め、十五歳で巽画会に入選し、十八歳のとき文展に入選した。その後、銀座の「渡辺」という版元を拠点として新版画に名作を残した。昭和にはいり深水画塾を設立し日本画壇に君臨した。その画風は浮世絵の歌川派の画系に立ち美人画が多かったが、芸術院院長の高橋誠一郎氏は、その作風を「精彩の極を尽くした技巧を縦横に駆使して、その伝統美を遺憾なく發揮する」と説明している。

また、邦楽にも造詣が深く、河東節や小唄が大変上手で、小唄の作詞も数多くある。その中に『浅草の昔なつかし十二階、江川の玉乗り、珍世界、活動写真は電気館、ひょうたん池には亀や鯉、山がら芸当、花屋敷、ダークのあやつり、安本亀八生人形、観音様の奥山は早取り写真に、売卜者、軒をつらねて客を呼ぶ、松井源水居合ぬき、砂絵のばあさん地に描く、明治は遠くなったもの』と、こんな往時の浅草の風景を羅列したにすぎないが、その並べ方は妙を得ている。

日本画家・伊東深水は鍋木清方に師事し、美人画、



現代風俗画家として名をなし、昭和二二年には芸術院賞を受賞している。昭和四七年五月八日に没す。

〈江川の玉乗り〉

明治三〇年（一八九七）に発行された平出鑑二郎氏の「東京風俗志」に、浅草公園六区のところ「玉のり」は江川、青木の二座ありて、年少な童女をして、大いなる球の上に乗りにて立たしめ、足を以つてこれをまろばしつゝ演台の上を廻らしむるものなるが、世に高評を得て数年来うち続き興行すれども、今に至りても客を絶えず。』とあるが、これにたずさわつた子供たちの亡くなった子の供養の墓がある。

〈古屋豊吉〉

嘉永二年（一八四八）に生まれ、赤坂の家は代々尾州藩の「お駕籠」をつくる家業であった。明治になつて西洋家具が日本へ入ってくるようになり、横浜に行つて西洋椅子を造ることをおぼえ、西洋家具の普及に努め、東京の椅子組合をつくり斯業のために活躍した。

『宝蔵寺』（如意珠玉山）

平安時代前期、仁明天皇の御代、承和五年（八三三）唐に留学した慈覚大師（円仁・七九四〜八六四）が帰

朝のおり、梁武帝が感得したという弥陀と子育て観音の像を将来し、帝に献上し宮中に安置されたが、時代は下りこの二仏が後に鳥羽天皇のもとに伝わり、仏告によつて源頼朝に授けられた。権大僧都・願清法印は、源頼朝の命により鎌倉に宝蔵を建てて二仏を安置したところから宝蔵寺と称した。

徳川家康が江戸を開いた天正一八年（一五九〇）に武州荏原郡根岸浦下の芝高輪へ移転し三〇〇余年、明治二三年（一八九〇）に至り現在の地へ移つた。開創当初は天台宗であったが後に浄土宗に転じたという。

西山派に属し、京都下京区の誓願寺の末寺で、西山派の寺院は関東地方にこの寺、一ヶ寺のみといわれている。今も宝物として相当数のものを本堂に陳列してある。

○今はなくなつた寺社

『正福寺』（知足山少欲院）

元和五年（一六一九）麻布狸穴に創建され、後ここへ移転してきた。安政三年（一八五六）に暴風のため庫裡が倒壊し、本願寺、戒法寺が交互に兼務したが、常光寺と合併した。南方第十二番、身代地蔵は常光寺に伝えられたが惜しくも戦災で焼失した。

## 『了 福 寺』

寛永十一年（一六四三）起立で、寛文元年（一六六一）当地に移ったが、「縁山志」によると、当時すでに衰微の極に達していたといわれる。本願寺と最上寺の間にあったが今はない。

## 『善 長 寺』（道徳山伝受院）

寛永年間（一六二四―一六四四）芝新錢座に創建され、寛永二年（一六三四）に飯倉に移り大運寺と称していた。寛文八年（一六六八）に今の寺町に移ったが、明治四年以降は無住となり、明治三八年に隆崇院と合併した。

## 『大崎明神社跡』

光取寺から最上寺にいたる道の南側にあった。「縁山志」には「鎮守大崎大明神、門を入る正面林中に祠あり、往世大崎郷の惣鎮守なりしぞ」と記されている。

## （二）目黒駅の周辺

### ○目黒駅あれこれ

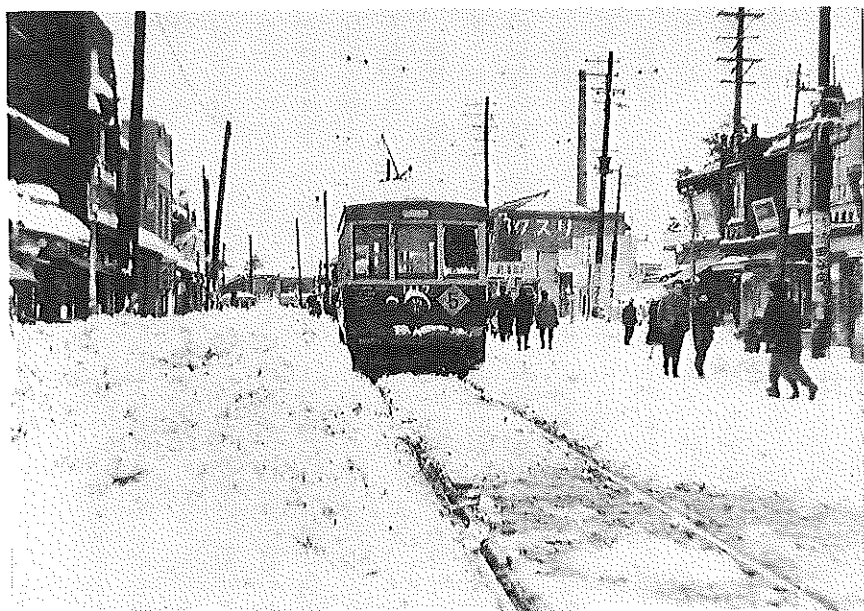
明治初年頃は、現在の目黒駅付近は竹藪の繁った農村で、上大崎村の戸数一六九戸、人口六一七人と記録

されている。目黒駅の開業は明治一八年（一八八五）

三月と古く、当初は目黒川に沿った低地に線路を敷く予定であったが、当時の鉄道は蒸気機関車であり、機関車の煙が田圃の稲を枯らしてしまうという噂が真剣に信じられ、水田地帯であった目黒川付近の農民の反対にあって現在のところまで追いつげられ、今の目黒駅のところに決まった。そのため、現在の目黒駅のあたる台地を掘削し「切り通し」を作り、一部はトンネルとし線路を通した。掘削工事によって出た土石は五反田・大崎方面の路盤の盛土に使用され、目黒駅は切り通しの谷間にあり、五反田方面は盛土の高架になっている。

開通当時は、新橋が始発で赤羽まで一日三本運転され品川線と言われていたが、後、運転本数も増加し、明治三六年（一九一八）には田端と目白を走っていた豊島線を併せ「山手線」と言うようになった。

目蒲線は大正一二年（一九二三）三月、まず、目黒と多摩川園間が開通し、一月には蒲田まで全線開通した。三日野が開校した頃には山手線だけであったが、翌年には目蒲線も完成し、その後、日比谷、銀座に至る路面電車の東京市電（後、都電となる）も開通する



都電⑤番が走る大雪の目黒通り（昭和26年2月）

にしたがって繁華になっていった。戦前の目黒駅前には、小さな交番の横丁を入ると飲食店やビリヤード店が並ぶ紅灯の路地道で奥に目黒キネマという映画館もあった。駅東口には都電の目黒車庫（現在の都バス車庫）があり、都電の五番が目黒・永代橋間をはしり目黒駅前で折り返していた。しかし、昭和四十二年二月九日を最後にこの都電も廃止されバス路線にとって代わった。六階のフロアーをもつ駅ビルは「サン・メグロ」と名称も近代的になり乗降客の利用が多い。一日の乗降客はおよそ二〇万人ともいわれ、その三分の一は目蒲線の連絡客であるという。駅周辺は近年、オフィス街、歓楽地としてもにぎわい、行人坂の下には雅叙園の巨大なホテルもできた。そのほか各国大使館、学校、教育研究施設、庭園美術館などもあり、平成七年の秋には目黒駅に地下鉄・南北線がひかれ目蒲線に乗り入れる予定になっていて更に発展することであろう。

### ○ 誕生八幡神社と高福院

〈誕生八幡神社〉

目黒駅のすぐ近く、ピルの谷間に誕生八幡神社がある。昔この辺りを永峯町、六軒茶屋町といい、江戸時

代以前から今日に至るまで地元の人々によって崇敬維持されてきた。

文明年間（一四六九〜一四八七）大田道灌どうかんが夫人の懐妊にあたって、筑前國の宇美八幡かんじょうを勧請したものと伝えられ、そして男の子が無事出産したこと、「誕生八幡」といわれるようになり「安産のお守り」を出していたともいう。大田道灌が江戸城を築いたのが長祿元年（一四五七）で、江戸城築城以前は品川に居館を構えていたという伝承があるので、この辺りにも縁があったのかも知れない。

誕生八幡神社は應神天皇おうじんてんこう（菅田別尊はんだわけのみこと）が主神として祀られ、神功皇后と竹内宿祢命たけの内のみことが配祀されている。明治以前の神仏混淆こんごうの時代は、隣地の高福院が別当として管理していたが、明治政府の政策であった神仏分離によって雉子神社の摂社となった。

末社に「重箱稲荷じゅうじょういなり」というものがあるが、それは、ある時、將軍が鷹狩りに来た折りに鷹を放ったところ、鷹が行方知れずとなってしまう、將軍は持参のお弁当の重箱を供え祈ったところ、鷹が直ちに舞い帰ってきたというところから「重箱稲荷」と言われるようになったと伝えられる。明治四二年（一九〇九）に近くの六



現在の都バス車庫入口付近から八幡神社前を望む大銀杏の大樹が見える（昭和20年代・花電車が走っている）

軒茶屋町から八幡神社境内に移され合祀された。今も八幡神社の石段を上がった左脇に祀られている。

安政年間（一八五四―一八六〇）に建てられたと伝えられる社殿の腐朽がひどくなり、昭和十五年（一九四〇）に上大崎千代ヶ崎の吉田邸にあった柿茸神殿が奉納され新たな木造社殿が建てられたが、その後、昭和四六年（一九七二）に至り目黒通りの道路拡張により、境内が縮小し、現在の鉄筋コンクリートで造られた社殿と社務所ができた。その時、一对の大銀杏も移植されたが、これは「夫婦いちよう」と呼ばれ品川区の数少ない大樹として文化財に指定されている。

### 〈高福院〉

八幡神社の横をはいと高福院がある。この寺は真言宗で永峯山瑠璃光寺と号し、開創は慶安元年（一六四八）という。大日如来を本尊とし、本堂の建築様式は内部外部ともに古様式をよく残している。当寺は弘法大師、御府内八十八ヶ所の第四番にあたり、昔はよく行列をつくってお詣りがたえなかつたという。

江戸時代末期、長崎のオランダ商館勤務のため来日したドイツ人医師のシーボルトは「鳴滝塾」で門人の

養成にあたった。その弟子で、シーボルトの娘「おいね」とのあいだに一女をもうけた石井宗謙や小説家・長谷川伸、版画家・恩地孝四郎の墓がある。

長谷川伸は、大衆小説家として「一本刀土俵入り」「験の母」などの作者として知られるが、一方、史実をとりあげた「相楽総三とその同志」は、明治維新のときに無実の罪で断罪された赤報隊の雪冤のために、一三年間をかけて資料収集したうえで書かれ、原稿料をも度外視した著作は特筆されるものである。

版画家の恩地孝四郎は大正三年、版画同人誌「月映」を発行し創作版画と日本の抽象美術の先駆者となる。萩原朔太郎の詩集「月に吠える」の挿絵、装丁をし、装丁家としても有名である。技法上では「実存版画」と称するさまざまな版材を使用して叙情的抽象作品を多くのこした。昭和三〇年六月没す。

### ○権之助坂と行人坂

#### 〈権之助坂〉

権之助坂は目黒駅から大鳥神社へ向かう大きな坂で、行人坂に比べると、や、その勾配はゆるやかである。

今は上大崎方面から、一つの路が寄りそうように下つ

ているが、この坂ぐらい坂名の由来がいくつもあるのも珍しい。

(伝説の一)

三百年ほど昔、菅沼権之助という大親分がいて、地主で祐天寺まで自分の土地以外は踏まずにお詣りができたというくらいである。ある時、この坂でナワ張り争いの出入りがあつて死んでしまったので、彼の名を坂名にしたという説。

(伝説の二)

菅沼家は代々この土地の名主であつたが、悪事を重ねた結果、捕らえられ首をハネられるハメになり、「死に際して何か望みがあるか」と問うたところ、「せめて家の見える所で死にたい」と言うので、坂の途中で斬られ死んだので坂名になつたという説。

(伝説の三)

この付近は増上寺の寺領だつたが、年貢米を二度取りしたというので、坂の途中で処刑されたという説。

(伝説の四)

中目黒の田道に居た権之助は、大鳥神社方面への唯一の交通路だつた行人坂があまりにも急坂なので、これと並行して緩やかな道を開きたいと幕府に願ひ出た。

しかし、幕府は江戸防備のうえから、なかなか許さなかつたので、將軍が鷹狩りに来た折りに権之助が直訴した。直訴は御法度であつたのでしきたりによつて、この坂で磔になつたという説。：

どの説ももつとらしいが、中目黒三丁目の西山の墓地に墓があり、女性たちのお詣りが多いという。「田道の下店」というところに居たと伝えられる。

今の目黒通りのところは、江戸市中から二子玉川にいたる「二子道」という小さな街道が通り、この辺りを永峯、六軒茶屋と呼ばれ竹藪が茂つていたという。江戸時代から目黒は筍の産地として知られ「竹の子は西の京都に東の目黒」といわれたという。目黒の筍は自然に育成したのではなく、寛政年間(一七八九—一八〇二)に薩摩藩の上屋敷から孟宗竹が移植栽培され広がつたものである。

西に向かい開けたこの一帯から、目黒川の清流や富士山を望む見晴らしの良いところであつたといひ、「夕日ヶ岡」や「千代が崎」と呼ばれ、桜や紅葉の名所で江戸市中から花見や紅葉狩、富士見物などに大名の宴や江戸っ子の日帰り遊山の名所であつたと伝えら



まり名を知られなかったのは、パリ帰国後五年、明治三一年の発表を最後に洋画壇を引退し美術教育者としての道を歩んだからであろう。

パリ留学から帰国後の活動は盟友、黒田清輝を抜きにしては語れない。久米は、その後も黒田の良き理解者として長く交友がつづき、また、久米の才能中断を誰よりも惜しんだのは黒田清輝であった。

桂一郎の父、久米邦武は明治四年（一八七二）、岩倉具視・木戸孝允・大久保利通らの明治維新政府の首脳によって、一年一〇カ月にわたりアメリカ、ヨーロッパの西洋事情を視察に出かけた「欧米視察団」に随行した俊英で、帰国後、『米欧回覧実記』全五巻を著し、明治政府に出仕した後は歴史学者として帝大教授となつた。「秋景」は、その久米邦武が別荘として所有していた目黒西口一帯から権之助坂に至る、五〇〇〇坪におよぶ広大な庭内の風景画である。

実物の絵は、目黒西口前の住友銀行のある久米ビル八階の「久米美術館」に久米邦武・関係の資料と共に久米桂一郎の作品が展示され、今でもこの絵を見るこ

### 〈行人坂〉

行人坂は江戸時代の寛永の頃、出羽湯殿山の行人がだいにもにらら大日如来を勧請して一寺を建てたが、それが坂の程にある「大円寺」である。開祖は権大僧都・法印大海ごんたいそうずといひ、正保三年（一六四六）十月二十九日に入寂している。後に三世、権大僧都・養海という人が寺を中興し盛大にいたらしめた。

この寺のご本尊は、鎌倉時代の元仁元年（一二二四）北条泰時が、父、義時の追善のために釈迦堂を建立したときに祀つたご本尊がここに移されたものともいふ。

行人坂といへば、明和九年（一七七二）二月二十九日のこと、悪僧・真秀が住職に恨みもち行人坂の大円寺に火をつけた。真昼間の正午過ぎに起つた火事は、永峯の道筋（現在の目黒通り）を白金に燃え広がり、更に麻布、飯倉一円を焼き、麴町、桜田、日比谷、西の丸下一帯、神田橋、常盤橋と江戸市中の中心まで燃え広がった。

折り悪しく強く吹きだした南風に、神田小川町、柳原土手下、向柳原などを火の手が一なめにして、本郷の湯島聖堂、湯島天神から上野、浅草を経て、隅田川を越え千住まで延焼し、向川原町、東側二丁目まで焼



いてやつと鎮火した。

ところが、その夜、本郷丸山町の「文字菊」という芸妓屋やから再び出火し、燃え残っていた、森川追分駒込、白山から千駄木、根津、谷中、根岸まで焼けてしまった。

これで、やつと火がおさまったとおもっていると、翌日は北風に変わり常盤橋下の残り火が燃えだし、日本橋、中橋、京橋あたりまでを焼き尽くした。

江戸の町のほとんど、六二八町を焼き尽くしたこの火事は、江戸始まって以来の大火事で、これをひつくるめて「目黒行人坂の大火」と言う。この頃は、一〇代將軍・家治の治世で、將軍に重用された田沼意次が權勢を振るっていた時代である。この火事が起つた明和九年は「めいわく（迷惑）の年」として安永と年号までが改められた。それ以後、行人坂の大円寺はその科により、本堂の建立を許されなかったが、七六年後の嘉永元年（一八四八）に至って、やつと許され、焼死者供養の石像、五百羅漢がつくられた。

この行人坂の大火とは無関係であるが、「八百屋お七」の放火事件に関わりのあつた吉三郎が、お七の菩提をとむらうために出家して大円寺に入ったという話

もあるが、俗説にすぎぬという。歌舞伎の「今様薩摩歌」という芝居は行人坂が舞台となっている。行人坂の上にある紺屋の娘「おまん」と誕生八幡神社の神官の養子「三五兵衛」の恋に薩摩武士の菱川源兵衛がからむ悲恋物語である。

行人坂を下ると、目黒川にかかる太鼓橋がある。太鼓橋は石組の立派な橋で橋際には茶屋が並び、この道筋が目黒不動の參詣人で賑わっている風景が江戸名所図絵にも描かれているが、この太鼓橋は大正九年の目黒川の大洪水で壊れてしまった。

### 〔三〕五反田駅の周辺

#### ○五反田駅あれこれ

五反田駅につくられたのは、明治四四年（一九一）で山手線の中ではかなり遅く開業した。しかし、今では上に池上線、下に地下鉄線が交わり、乗降客二二万の大きな駅となっている。五反田駅付近の下大崎村辺りは江戸から明治の頃、小さな村にすぎず明治一二年（一八七九）の資料では戸数・九七戸、村民四三二人とある。

五反田駅の出来たいきさつだが、明治四三年頃、大崎町の自治団体が大崎と目黒の間に駅がないのは鉄道院の不公平だとうことになり、新しい駅の設置を交渉したところ、駅をつくる土地さえ提供してくれば、すぐにも駅をつくるということになった。

そこで、町民は駅をつくるための資金、四、〇〇〇円の調達にあたったが、なかなか寄付が集まらず、とても駄目だとあきらめかけていた。そのとき大崎町に住んでいた池田侯爵が、一、〇〇〇円を寄付するから、あとの三、〇〇〇円は地元に住民がなんとか調達するようにといってくれた。それから寄付金問題は順調にすすみ、大崎駅と目黒駅の間にある町役場の横に新しい駅（五反田駅）ができることになった。五反田という駅名はこの小字名をとって付けたたという。

このいきさつは明治四三年一月一日の東京朝日新聞の記事にでていたものであるが、この新聞記事に当時のこの辺りのようすや駅ができるまでの詳しい事情が書かれ、また、明治時代の新聞の文章が面白いので、以下、原文のままを引用する。

（東京朝日新聞・明治四三年一月一日 附）  
要するに大崎の發達は明治二十九年に始まつて先

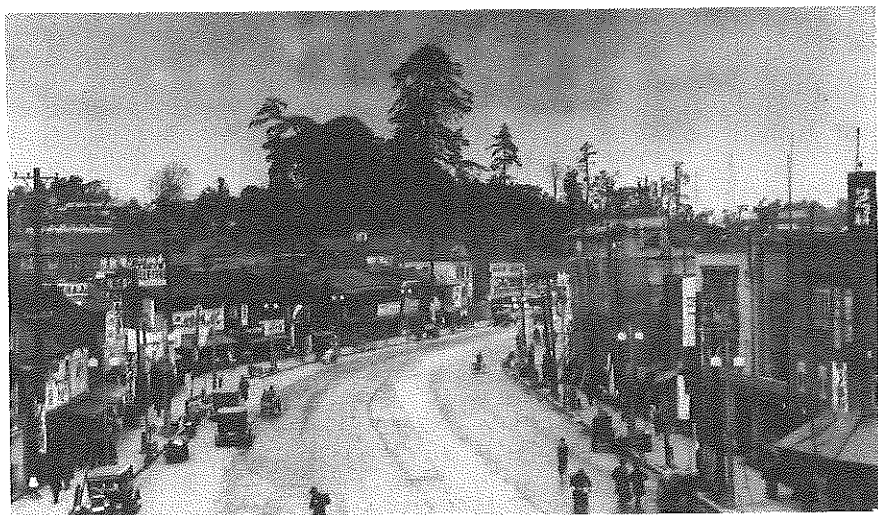
ず芝白金今里町附近より溢れ出して上大崎が目黒迄延び次に白金猿町が桐ヶ谷方面にせり出し更に品川町が目黒川に沿うて逆航的に發展し其内に大崎自身は停車場を中心として發育し遂に今日の盛大に至つた、併し重に長足の發達をなしたのは日露戦争後である、斯く大なる發達をした大崎町と目黒との間に郊外電車の停留場が一つもないのは鐵道院の不公平だと云うて大崎町の自治團體は鐵道院に新停留場設置を交渉すると鐵道院では土地の寄付さへ出来れば直に設けてやるることなれば町民は大に發奮して四千圓の金錢調達に従事した四千圓と云へば何でもない様だが識者の思ふ様に金は集まらず兎ても駄目と諦めてゐる内、大崎町に住まつて居る島津公、池田侯、佐野伯其他数多き富貴者中より唯一の池田侯が「一千圓寄付するから三千圓は民に於て何とか才覚せよ」との話しなりしより寄付金問題は案外早く捗りて新停車場の地主は其地續きの賣買地價十六圓六十七錢なるを十二圓にて鐵道院に譲ること、なり新停車場は不日大崎驛と目黒驛の中間町役場横に出来ることになつた此新停車場は更に大崎を大ならしむ

るものと思ふ、兎に角我輩は池田侯今回の態度を非常に嬉しく思ふ日本の貴族、富豪は自治團體などには何等の貢献をせぬ寧ろ邪魔ばかりして居るのに池田侯の如きを見るは大いに心強い今後の大崎、大井、品川、大森等が必ず發達すべきものであると云ふのは鐵道院の新橋工場が大井品川兩町に跨り大崎に隣る軍用線（大崎大森間）と東海道線の間に移轉し其廠工二千家族一萬餘名も早晩此の附近に居所を定め是等相手の諸商人の増加も少からざるべしと見當を附けたからである、此の見當は石橋を叩いて渡るよりか大丈夫外れつこはない、城南諸町村の繁榮期して待つべきである

（旧漢字、送り仮名、ルビ、句読点は当時のまま）

今の五反田をはじめ城南地区の發展を見ると、八〇年前の記者の予測は確かに外れていなくなつたことを物語っている。

かつては、五反田駅のホームから富士山を望むことができたが、ビル群にさえぎられて今は見ることが出来ない。もとの白木屋（現在の東急ストア）の四階に池上線が乗り入れ、高いところに駅のホームがある



昭和初期の五反田駅前。正面の大樹のある岡は池田山

が、『電車株を買い占めたが、風が吹いたら吹き飛ばされるんじゃないかと思うだろうが、東京駅までもつていくつもりだった。』と昭和三三年、高柳淳之助著「紙風船」のなかに書かれている。

近くには「池田山」と「島津山」というお屋敷町が健在である。駅の西から南に向い、銀行などのビジネス街があり、TOC（東京御売センター）、ユーポート（東京簡易保険郵便年金会館）などがある。地下鉄浅草線が昭和四三年（一九六八）に開通し、一日六万人にちかい人々を運んでいる。有楽街の入口付近に都電の停留所があったが昭和四二年に廃止された。

### ○ 雉子神社と宝塔寺・本立寺・寿昌寺

#### 〈雉子神社〉

雉子神社は、昔、上大崎村・下大崎村（東五反田）、谷山村（西五反田）の三カ村と御府内に属する永峯町・六軒茶屋町（上大崎）二カ町の鎮守であった。祭神は日本武尊で「雉子ノ宮」と呼ばれた。明治時代から黒の誕生八幡神社も雉子神社で祭祀を行っていたようである。

雉子神社の由来は、文明年間（一四六九～一四八六）、

△白雉子一羽飛来して死す。その夜、村民の夢に甲冑を着たる人來たりて告げて云う。「我は日本武尊なり。我を当所に祀らば、国家を守護し村民安全なるべし」とて、白雉子と化して飛び去る。▽という伝説による。また一説には、三代將軍・徳川家光公が放鷹のおり、一羽の白雉子が当山へ飛入ったので、これを追って社前に至らせ、村人に神号を問うたところ「大鳥明神」と言上したので、今よりはここを「雉子ノ宮」と称せとの上意があったからだともいう。

文化六年（一八〇九）に上大崎村・下大崎村・谷山村の村人によって石造りの鳥居が奉納されたという記録があり、村民に崇敬されていたことがしのばれる。幕末の頃、黒船の来航で品川台場を築造するための土を取るため、雉子神社の裏山を掘り崩したところ、戦国時代、大永四年（一五二四）小田原の北条早雲の子、氏綱が江戸の上杉氏を攻めたとき迎え撃って戦ったと伝えられる、「高輪ヶ原の合戦」の古戦場のものと思われる朽ちた大刀の数振が出土し、神社に保存されていたが昭和二〇年の戦災で社殿と共に焼失してしまつたという。

雉子神社の境内にある末社の三島明神は、もともと

上大崎字三島下（現在の五反田と目黒間のガード近く）にあったが、明治四三年（一九一〇）一〇月に三島下から移され、雉子神社に合祀された。江戸時代の古地図にも三島下という地名を見ることが出来る。

#### 〈宝塔寺〉

宝塔寺は雉子神社の下にあり、天台宗で文龜二年（一五〇二）南品川の漁師町あたりに草創すると伝えられる。寛永の頃（一六二四～一六四二）法東寺から（一六五九）に目黒川沿いの一柳氏の抱屋敷あたりに移ったが、目黒川の洪水によって今の地に移ったという。南品川の漁師町に寺があった頃、一人の老僧が一卷の軸を携えてきて壇上に置き、いずこともなく立ち去った。住職がこの軸を開いたところ元三大師の画像であった。この画像はもともと比叡山の横川にあつたものだが、元龜年間（一五七〇～一五七三）に山門逆徒に襲われたとき行方が分からなくなったものといわれる。これを祀る元三大師堂が門を入った左手にある。この外に、角大師、豆大師、おみくじの版木、富くじの版木、板碑型庚申塔、笠塔婆型庚申塔など品川区の認定文化

財になっている。

#### 〈本立寺〉

本立寺は慶長二年（一五九七）池上本門寺の十二世、日愷上人が上目黒村に開いたのが始まりである。現在の場所には正保四年（一六四七）に日通上人が開山した恵性寺という寺があつたのだが、貞享四年（一六八七）に幕府の寺院整理政策によって恵性寺が廃寺となつた。そこへ本立寺の山号・寺号を移し改めて、日愷を開山とし日通を二世とした。

この寺の大檀家は能勢家で能勢市十郎頼永の妻が開基した。能勢家は徳川の旗本で摂津国・能勢郡の領主であつた。この寺は能勢一族の十一家のみ墓所であつたが、後、明治時代になり、この寺の住職が私塾を開き子供たちを教えていたが、その教え子たちが師を慕うあまり成人してから皆が檀徒となつたという。また、本堂正面左奥に戦前、戦後にかけて喜劇界で活躍した柳家金語楼の墓があり、墓地の左方には、江戸時代の戯作者、鶯亭金升（本名・永井総太郎）の墓もある。

#### 〈寿昌寺〉

寿昌寺は臨済宗妙寺派に属し大崎山と号する。正保

二年（一六四五）に開創の円満国師は奥州仙台の伊達正宗夫人である陽徳院栄庵寿昌尼の帰依を受け、弁財天の土地を譲り受け宝塔を寄進した。現在の雉子神社の宮司の山口家累代の墓がある。また、開基、寿昌尼の肖像画がこの寺に残されている。

### ○ 袖ヶ崎神社と了真寺

#### 〈袖ヶ崎神社〉

保延三年（一一三七）京都稻荷山から稻荷大明神を勧請したものが始まりで、室町時代に越前国（福井県）丹羽郡小川村の鎮守である若宮八幡宮の神主山口直奇の次男、直正が長じて当社の神主となった。そして、山口家の守護神の神明宮を合祀し、当所の地名をとつて「袖ヶ崎神明宮」といった。後、元禄年間（一六八八―一七四四）に若宮八幡宮、天満宮を正徳年間（一七一―一七六六）には塩釜大神を合祀した。

このあたりは、仙台伊達家をはじめ大名や旗本の下屋敷が多かったので、当社は諸侯、旗本の帰依を受けていたのであろう。延享二年（一七四五）の火災で社殿が焼失した際に当社に伊達家が建物を造営寄進している。その後もしばしば火災を受けており、文化二年（二八四五）に類焼した際、土蔵造りの建物の扉に鏝

細工で名高い名工、伊豆の長八の腕になる漆喰鏝絵の「八岐の大蛇退治」があったが、それも共に焼けてしまったという。

#### 〈了真寺〉

了真寺は曹洞宗で正福山と号し、現在は山口県防府市功山寺の末寺である。承応二年（一六五五）旗本・赤松義利（禄高三一五〇石・法名、道雪）の室である長安院が夫、義利の菩提をとむらうため建立した。

また、ここには新田義貞が鎌倉攻めるとき背負ってきたという青面金剛の木像があることで有名である。青面金剛は庚申信仰の対象として祀られているが、以前このあたりの地名を白金猿町といったが、これは庚申の「サル」に由来するという。

この寺の墓地には、大正三年（一九一四）に東京慈恵会医院医学専門学校校長・高木兼寛が医学の研究進歩に貢献した人たちのために建てた解剖供養塔がある。

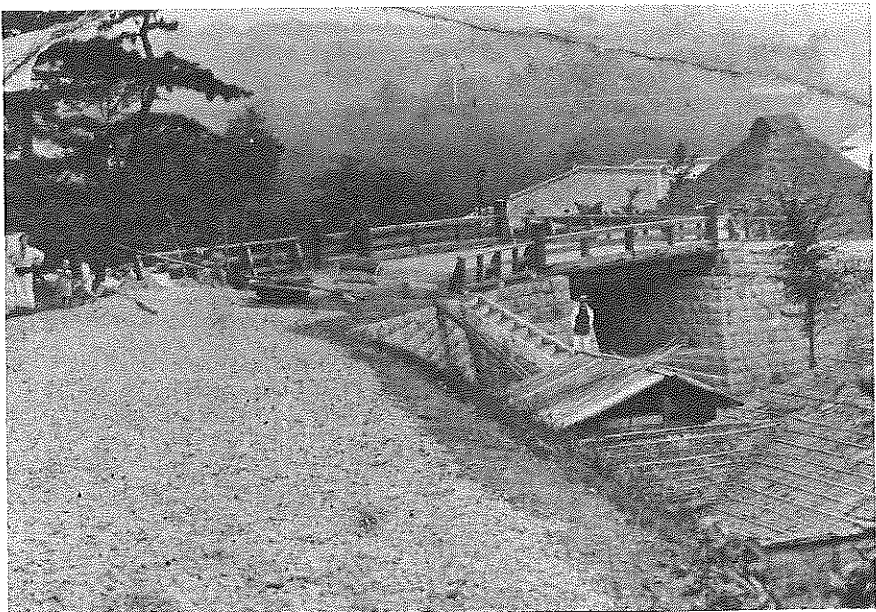
### ○ 桜田街道と相生坂

五反田駅を北口に出て、国道一号線を高輪方向に進む道を中原街道という。

この高輪に登る坂を「相生坂」というが、その由来

は、昔の道が御殿山から宝塔寺の山門の前を通る道と、雉子神社の手前で合流していたからと言われる。相生とは一緒にくつつき生え出るといふ意味から、そのように呼ばれたのだろう。

中原街道は江戸城の虎の門を起点として、高輪、戸越、千束、下沼部を通過して多摩川を渡り、小杉、中山、寒川、中原を経て平塚で東海道と合流する。途中、中原を通過するので「中原街道」と呼ばれた。東海道の裏街道として利用され、江戸と平塚宿の間に、小杉、佐江戸、用田の三つの宿場町があった。大崎の人たちは、この街道が桜田門にぶつかるので「桜田街道」とも呼んでいた。現在も五反田駅前を通る広い道路を「桜田通り」と言っている。明治三十八年（一九〇五）この相生坂の道が改修され、雉子神社前のところに石垣が組み木造の陸橋がかかた。今で言う立体交差の道である。そのできたときのようなすを貴重な写真で見ることができる。



雉子神社（左手）前から相生坂へ下る（明治38年）

#### 〔四〕長者丸と中丸の周辺

##### ○消えた地名

この章の「長者丸」と「中丸」という地名は二五年前に地図の上から消え今はない。路面電車の都電が町から姿を消した頃であったろうか、下大崎も東五反田と変わり幻の町名となった。しかし、三日野に通った多くの子供たちにとって懐かしい町の名である。元は上大崎長者丸、上大崎中丸といった町名が味気ない数字の丁目となり地名は消失した。

地名は歴史の中で最も風化に耐えると言う。この頃、この地の地名に限らず、他にも東京から貴重な地名がいくつも消えていった。後に、ふるさとの歴史をたどるとき、埋もれていった地名は、取り返すことはできない大切なもののような気がする。大正時代のこの付近の地図を見ると、今はない地名を多く見ることができきる。

##### 〔目黒駅近辺〕

〔千代ヶ崎〕現在Ⅱ上大崎二丁目・目黒駅西口から目

黒三田付近

〔長者丸〕現在Ⅱ上大崎二丁目・目黒駅前、予防衛

生研究所横入る一帯

〔永 峯〕現在Ⅱ上大崎二丁目・目黒駅東口付近

〔六軒茶屋〕現在Ⅱ上大崎二丁目・目黒通り上大崎交

差点付近

〔森ヶ崎〕現在Ⅱ上大崎三丁目・目黒通り北側、あ

さひ銀行・第一勧信、付近

〔烏久保〕現在Ⅱ上大崎三丁目・裁判所・みやこ荘

横、坂下る付近

〔西ノ谷〕現在Ⅱ上大崎四丁目・ドレメ通り付近

##### 〔三日野近辺〕

〔篠 谷〕現在Ⅱ上大崎一丁目・三日野付近、一帯

〔今 里〕現在Ⅱ上大崎一丁目・寺町付近

〔上の谷〕現在Ⅱ上大崎一丁目・寺町下付近

〔中 丸〕現在Ⅱ上大崎一丁目・三丁目、上大崎交

差点より首都高速沿い付近

〔平 岡〕現在Ⅱ東五反田五丁目・池田山付近

##### 〔目黒と五反田の間近辺〕

〔清水久保〕現在Ⅱ東五反田五丁目・首都高速沿いイ

ンドネシア大使館新館前の坂付近

〔三 島 下〕現在Ⅱ上大崎三丁目・東五反田五丁目、

JR線大ガード付近



「池ノ谷」現在Ⅱ上大崎三丁目・J R線沿い、池田山西、高速道路交差点付近

（五反田駅近辺）

「子ノ神下」現在Ⅱ東五反田五丁目・五反田駅前付近  
「袖ヶ崎」現在Ⅱ東五反田三丁目・本立寺付近  
「霞ヶ崎」現在Ⅱ東五反田五丁目・池田山、五反田駅寄り付近

○長者丸風景

目黒駅近くの予防衛生研究所の横を入った住宅街一帯を、もとは「長者丸」といったが、住居表示変更のとき上大崎二丁目に合併されてしまい、長者丸という地名は消えてしまった。この地名は、白金の長者の言い伝えに由来しているという。

江戸時代、この長者丸には「八町八反」と言われる大きな茶畑があったという。大正のはじめ、地元の実業家、吉田弥一郎氏は茶畑をきり開き、道路をつけて宅地化して分譲した。高級住宅地としてここに多くの人々が住むようになった。そこに住む人たちが三六名によつて、吉田翁顕彰の碑が建てられた。地主さんにはたいする感謝の碑というのも珍しいかもしれない。長者

丸の一番奥の地に、今もその碑が保存されている。大意を解して記す。

〈吉田翁碑文〉

『上大崎長者丸は白金御料地の緑樹を以つて市塵から隔てられ、空気は清く郭外の名地である。所有者の吉田弥一郎氏は、荒地を開き路を通し、住宅地として提供され、邸宅の建設が行われ、深い森は一変して静かな住宅地となった。以来、居住者は氏を中心として隣保相親しむこと一族の如く、その自治の美風は人の伝えるところとなった。大正一三年（一九二四）一月、氏は長逝したが、令嗣・幸三郎君は遺業を継承し永く伝えた。我等同人は間雅の境に安住の地を得ることができ、氏の温かき心に対し追懐の念を禁じ得ない。ここに暮らすもの相計つて碑を建て、恩誼を後世の記念とする。』昭和三年戊辰 二月

実に当時の人々の美風を伝える記念碑である。吉田翁の令息・幸三郎氏は若き画家たちに援助を与え、その中から、今村紫紅、速水御舟ら日本画の大家が輩出している。

その頃の吉田邸は目黒駅のすこし先から恵比寿の方にかけて、現在の日の丸自動車教習所のあたりまで廣大

な敷地に、岩を数多く配した庭園に三田用水の清流を  
引き込んで滝とし、絶えずごうごうと水音を響かせて  
いた。

明治一八年（一八八五）に品川・赤羽間に鉄道が開  
通し目黒駅ができたが、吉田家の広大な敷地内をトン  
ネルが通った。後、袴線橋こせんきょうとなり、近くの子供たちが  
“さんど橋”として親しんだ陸橋は、今も「棧道橋」  
としてその名残をのこしている。

この長者丸には、以前、皇族の三笠宮邸もここにあ  
り、気さくな宮様は目黒通りの喫茶店にしばしば立ち  
寄られることもあった。また、山手線の内側に二つし  
かないという東京では珍しい駐在所（大崎警察・長者  
丸駐在所）が現在もあり、以前に新聞で紹介されたこ  
ともある。長者丸は今も静かな住宅地としてのたたず  
まいをみせている。

### ○中丸の町並み

目黒駅から上大崎交差点を右に曲がり首都高速道路  
に沿った一帯を以前「中丸」と言った。高速道路が走  
り、ビルが立ち並ぶこの付近に往時の面影はない。

昭和四七年六月に日本長期信用金庫ビル（元、ツバ

メコート本社）の建築工事が行われた。そのとき、建  
築現場の地下三〇mあたりから大量の牡蠣かきの貝殻が出  
土した。平成三年にも、近くの工事現場をボーリング  
したとき三二mの地下から、海岸に見られる、波に洗  
われ丸くなった小石がたくさん掘り出された。はるか  
有史以前、このあたりの地底三〇mは波あらう海辺で  
あったことが想像できる。

江戸時代、寛文一一年（一六七二）に品川宿の一部  
と谷山村の一部を併せ大崎村ができ、「中丸」という  
地名もこの頃からあき字名として記されている。元禄八年  
（二六九五）には大崎村は上大崎と下大崎に分けら  
れ、この一帯は徳川幕府の直轄地する「天領」で代官  
が支配していた。「武州大崎御用留」の中に文化八年  
（二八一二）三月二三日、上大崎村、下大崎村に將軍家  
へ“おけら”一五〇〇匹のうじ献上を命じられたという妙  
な記録が記されている。“おけら”は昼間は土中にい  
て夜になると灯火に寄って飛んでくるコオロギに似た  
昆虫で、江戸城の飼鳥の餌になった。この一帯は江戸  
城に近い農村であったためか、年貢米の他にも、飼鳥  
の餌として“おけら”“みみず”を、観賞用に“ほた

る。鈴虫、松虫など、また、料理用に、たんぼはこべ、薬用に、赤蛙などの献上を割り当てられていた。江戸城・將軍家の奢侈優雅な生活とそれを支えた農民の姿が偲ばれる。

明治維新となり一時、品川県となったが、明治一年には東京府荏原郡大崎村となり、明治四一年（一九〇八）には大崎村から大崎町となった。大正時代になり山手線の目黒駅に市電や目蒲線が開通するなど交通の便が良くなり、この地域の開発が進み中丸も宅地化していった。中丸の坂上一帯の土地は松平氏の所有であったが、大正時代の初め頃から、借地人がここに四軒長屋を建て勤労者用住宅とした。昭和にはいると、中丸通りに面して多くの商店が立ち並ぶようになった。

五、六〇年昔の「中丸」を描出してみよう。省線・目黒駅を降りて市電の走る目黒通りをしばらく行くと市電の最初の停留所（現在の上大崎交差点あたり）がある。その角を左に曲がると海軍大学（現在の予防衛生研究所）に至る取り付け道路があり、少し先には朝香宮邸（現在の庭園美術館）の立派な門が見える。右側に栄屋という大きな酒屋があり、黒びかりする大店

の構えで、土間の棚にずらりと並んだ樽から酒や味噌、醤油を計り売りをし、上り框には前掛けをかけた番頭さんが座っている。その酒屋の先を右に曲がると中丸の町がある。当時の中丸通りは、ちょうど今の高速道路下の左側にある歩道の位置で、道幅は今の歩道ぐらいであった。少し行くと三田用水にかかっていた中丸橋（現在の中華料理店・シェシェ付近）がある。用水は昭和四年頃から一〇年頃にかけて暗渠化の工事がすすめられ、橋の下は土管が通るようになり水の流れは見えない。

舗装された中丸通りの両側には、たくさんのお店が並んでいた。写真館、三味線屋、駄菓子屋、医院、時計店、和菓子屋、雑貨店、八百屋、魚屋、酒屋、運送店、氷屋、電気屋、自動車修理工場と、町の生活に必要な店は、ほとんどそろっていて商店の裏の方は長屋住宅になっていた。当時、この通りの先は狭い砂利道になっていた。自動車を通ることはほとんどなく、ときどき馬車や牛車が大八車を通るくらいであり、そば屋の前か中丸橋のたもとの道路が近くの子供たちの遊び場になっていて、ここには太鼓や拍子木を叩いて紙芝居屋のおじさんもやって来る。近所の子供たちは

“石けり” “ビー玉” “おはじき” “めんこ” に夢中になって日が暮れるまで遊んでいた。

この商店街がつきる辺りから広い庭のあるお屋敷がつづいていた。現在、タイ国大使館になっている大きな邸宅は野田醤油の創立者の浜口邸だった。この邸宅は昭和五年に建てられ、当時、東京の中で個人が所有する私邸では、広さと豪華さにおいて最高の建築物だと言われていた。この浜口家が母方の実家にあたる、嵯峨侯爵家の浩子嬢がこのお屋敷に住まわれていて、昭和十二年（一九三七）四月、満州国皇帝の弟殿下とご結婚されたが、ご婚約中に殿下が馬車で浜口邸にお越しなるのを近所の人たちも時々見かけることがあったという。その後、昭和一八年（一九四三）、当時の金額で二〇万円の値でタイ王国が買い取り、タイ国大使館として使用された。戦時中、三日野の高学年の児童は、タイ国王の誕生日には校長先生と一緒に祝賀に大使館を訪れたという。

坂を下り始めるあたりから舗装道路が砂利道に変わる。道幅も半分になり、右にカーブして石垣に沿って坂は下る。昭和の初め頃には、坂の途中に一軒あんみつ屋があつて、ここでひと休みする人が多かったとい

う。建武神社（現在の微生物科学研究所）横を通り坂の下には国電のガード（現在のガードのところ）があった。ガードの横に藤倉ゴムの工場（現在のNTTビルのあたり）があつたことから通称“藤倉ガード”といひ、両脇はレンガで造られ道幅も三m位しかなく、自動車はすれ違ふことができず、車が行き合ふと交互に待つて通行していた。

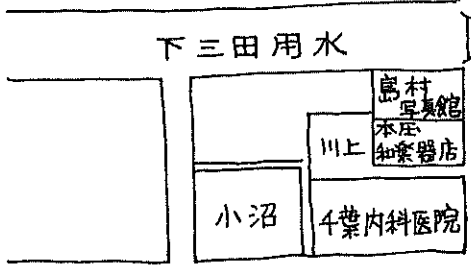
昭和一九年（一九四四）の初め頃になると、現在の首都高速下一帯にあつた商店や住宅は、空襲による火災の類焼を防止するための防火帯をつることになり建物強制疎開が行われ、家々は次々に取り壊された。しかし、三日野が空襲によって灰燼に帰したと同じ日、強制撤去にならず残つていた、この一帯の商店や住宅も焼夷弾によってほとんどが焼失してしまつた。

戦後、空襲で家を焼かれた人々は、建物強制疎開になつた場所に置かれていた、取り壊された家の廃材を利用して焼け跡にバラックの家を建て、空き地を畑にしてトウモロコシやサツマイモを植えて食糧難の時代をしのいでいた。

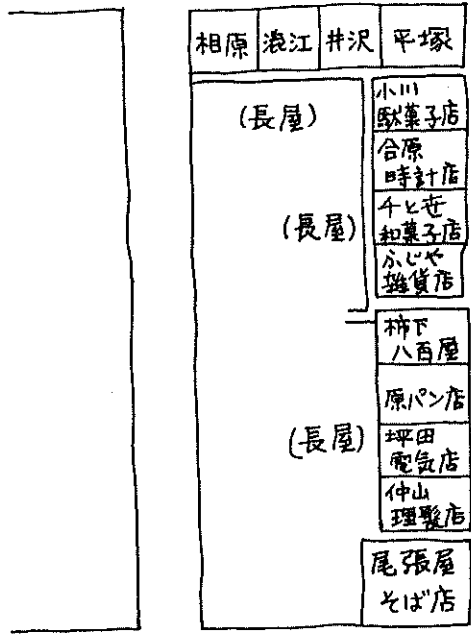
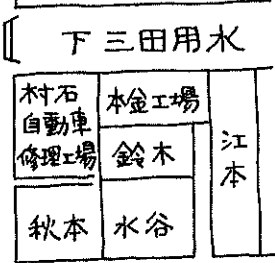
その後、道路用地として砂利が敷かれ現在の道幅と

# 中丸商店街見取図

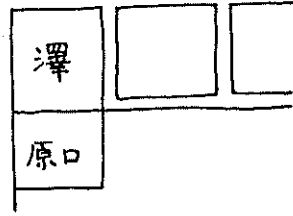
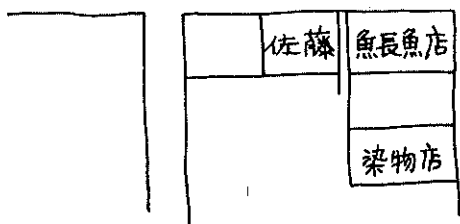
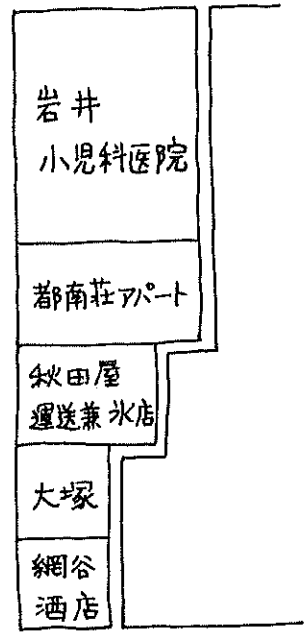
(戦前の頃)



中丸橋



中丸通り



同じ広い道路ができた。昭和三〇年代に首都高速道路の建設が始まり、昭和三九年（一九六四）、東京オリピックが開かれた頃には現在の姿になった。

〔玉林由光氏の『我が町・中丸』を資料とした〕

### ○三田用水の流れ

三田用水は江戸時代に始まる。明治、大正の頃は、目黒三田方面から駅前で左に曲がり、山手線にかかる陸橋の脇を導水管で渡り、目黒通りの一本内側の細い道に沿って小川になって流れ、徳川邸（現在の最高裁判所、みやこ荘）のところは櫛並木けやきなまになっていた。そこから中丸を横断し白金の方へ流れていた。その後、徐々に暗渠になっていったが、この用水は江戸時代から昭和四〇年代まで実際に水が流れ続けていた。

『恵比寿駅に通ずる広い道路は、五、六十年前には、曲り角に小さい炭屋があり、軒下には、紺や茶の地に、白く講中（目黒不動の講中か）の名を染めぬいた手拭てぬいいが何枚も竹竿たけざおの先に下げてあった。その道は、『三田用水』という小流を挟んで、二筋の道がついていた。用水の両側には櫛むらや櫟くわの大木が立ち並び落葉の頃は、ガサガサとその上を踏んで行く道だった。』

（東京おもかげ草紙・佐野都梨子著 昭和五〇年一月）  
この一文で目黒から恵比寿に通じる昔の三田通りが、三田用水の流れに沿った鄙びた農村の景色として浮かぶ。

この地域一帯の低地は海に近いため水の利や水質が悪く、井戸を掘る技術も発達していなかったために、遠く多摩川の水を將軍や大名の飲料水などの生活用水として確保するため「三田上水」が引かれ、余剰の水は流域近隣の農民にも灌漑用水かんがいなどに使用することが許されていた。

三田用水は、寛文四年（一六六四）十一月、中村八郎右衛門と磯野助六の二人が玉川上水を下北沢から分水して、三田、芝、金杉あたりまで給水したものである。北沢村の三尺四方の水口から上水道を取り入れて、三田村、白金村、大崎村（大崎猿町より埋戸樋榭）、二本榎、伊皿子通り、聖坂、三田町、松本町、新馬場同朋町、西応寺まで通じていた。麻布の南部坂にあった將軍の麻布御殿へも上水が引かれていたが、元禄一年、御殿が類焼したおりに停止されている。さらに、六〇年ほどたった享保七年（一七二二）、徳川八代将

軍・吉宗の時代、学者の室鳩巢が幕府に献策するため  
の「献可録」という書物のなかで『この頃、火災の多  
いのは、上水によって地下の水脈が四方に散じ、地脈  
を切断し、風を呼ぶからであろう』という説を唱え、  
幕府はこの説や大名屋敷の井戸が普及したことによつ  
て上水を廃止してしまった。

そのため、この上水の水を灌漑用水や水車に利用し  
ていた流域農民たちはたいへんに困り、幕府に陳情し  
たので二年後に「三田上水」は「三田用水」として再  
びよみがえり、白金、上大崎、目黒三田など流域一四  
ヶ村の田畑をうるおすようになった。今の高輪台から  
目黒川に水を落し、利用組合をつくり一定の使用料を  
納め水路の確保と管理にあてた。

やがて明治時代になり、明治二三年（一八八〇）に  
できた目黒火薬製造工場（現在、恵比寿にある防衛庁  
技術研究所）や明治二〇年（一八八七）完成した日本  
麦酒醸造会社（現在のサッポロビール）の工場などが  
三田用水を大口に利用するようになり、当時、三田用  
水に沿った大邸宅の庭園の池水にも使われたり、電気  
のない頃は三田用水の流れに六〇〇余もの水車が廻り、  
貴重な動力源として使用されていた。

その後、水道の普及によって用水の使用が段々に減つ  
ていき、戦後、昭和二七年にいたり三田用水の組合は  
解散し、昭和四九年（一九七四）八月には江戸時代か  
ら流れつづけた用水の水は完全に止まった。以後、清  
算組合に移行し、地方裁判所の監督下で、管理者に代  
わり弁護士が事務手続きを行い、今から八年前、昭和  
五九年（一九八四）に組合の基金五億八四〇〇万円が  
国庫に収納され、ここに江戸時代から続いた三田用水  
二六〇年の歴史は完全に終わった。

### ○国立自然教育園

自然教育園の大部分は港区の白金台五丁目であるが、  
北部が少し品川区に属している。

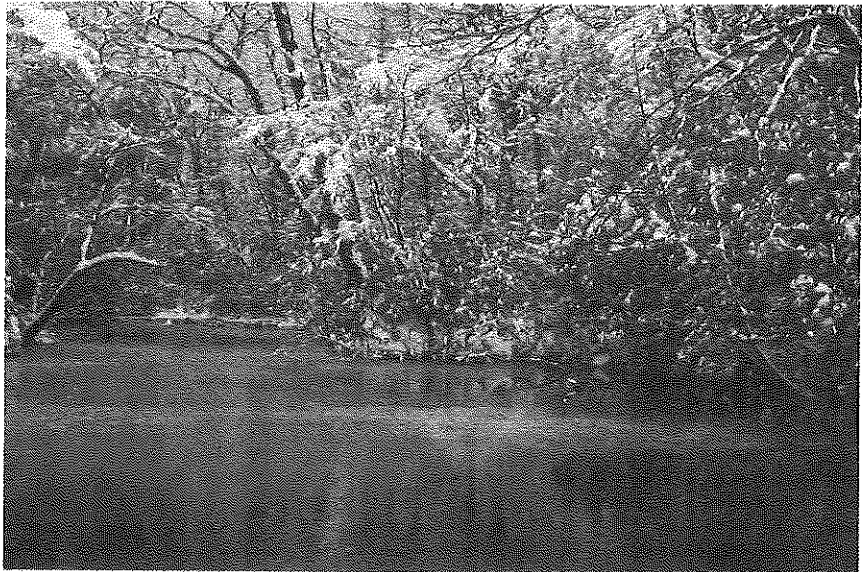
広さ二〇万㎡の園内は、古代武蔵野台地の植物相を  
残す原生林として学術的にも貴重であるとして、昭和  
八年（一九三三）に植物学者の牧野富太郎博士がこの  
地域の自然保護を宮内省に強く提言し注目をあびた。

戦後、昭和二四年（一九四九）三月に史跡および天  
然記念物に指定されるとともに、国有地となり文部省  
に移管された。同年、一月から広く一般に公開され  
るようになり、その後、昭和三七年（一九六二）から

は国立科学博物館の所屬となつてゐる。園内から縄文時代中期（約二五〇〇年前頃）の土器や貝塚が発見されておゝり、このあたりに縄文人が生活してゐた痕跡をみることが出来る。平安・鎌倉時代から歴史の記録に現われ、この一帯の地に、関東武士の騎馬を飼育する「牧」が置かれ、染料になるムラサキが栽培されてゐたことなどが知られる。今からおよそ六〇〇年ほど昔「白金の長者」といわれた柳下上総之介という豪族が館を構え、四方、四kmにわたる大土塁をめぐらし、その土塁の築土を強固にするためのシイの木が植えられてゐた。今も自然教育園の中にその土塁の趾を見るこゝとができる。

江戸時代になつて、この白金の長者の館跡一帯は、寛永四年（一六二七）に高松藩の松平讃岐守の下屋敷となつた。瓢箪池を中心とした回遊式庭園をつくり、そのとき植えられた「ク物語の松」「大蛇の松」などが大名庭園の名残りとして今も残つてゐる。

明治時代には陸海軍の火薬庫となり、大正六年には宮内省の白金御料地となつた。園内は湧水池を中心に、台地あり、谷あり、湿地ありと、大変、変化に富んでゐる。周囲をめぐらす土塁上には樹齡五〇〇年にもな



国立自然教育園・雪景色のひょうたん池



るスダシイをはじめ、コナラ、マツなど多くの落葉樹など八〇〇種の植物が成育し、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫など多数の動物が生息している。なかでも、鳥類は東京の中で一番多く生息しているという。園内の自然を守るため綿密な努力がつけられ、入園者が三〇〇人を越えると、一時入場を止めるといふ定員制が敷かれている。

### ○庭園美術館

現在の東京都庭園美術館のところは、明治時代には陸海軍の火薬庫となり、大正六年には宮内省の白金御料地となった。戦前には、三日野の男の子たちは、その森に遊びに行くことがあったが、当てもくかやっこと呼んでいた。大正十年に白金御料地の一部の約一万坪が皇族・朝香宮邸の敷地となった。この宮家の庭園で放し飼いにされていた孔雀が、目黒通りまで飛んできて、近くの電柱に止まる優雅な姿を見ることができた。

戦後になり宮家が廃止されると、その邸宅跡は、吉田茂首相の総理公邸として使用されることになった。

吉田首相が引退し大磯の私邸に移った後は迎賓館となり国賓の宿舎となった。インドのネール首相など多く

の外国元首が訪れたが、エチオピアのハイレ・シエラセ皇帝が日本を訪問されたとき、表敬訪問の皇居から馬車で迎賓館に戻られたことがあったが、それは、とてもきらびやかなものであった。そのとき、白金幼稚園の園児が描いた絵を贈り、皇帝からエチオピアの金貨をプレゼントされたことが新聞紙上を賑わしたこともあった。田中角栄首相の時代に迎賓館は赤坂に移り、しばらくは西武系のホテルになったこともあったが、その後、東京都庭園美術館となり一般に公開されるようになった。旧宮家の建物はフランスのアル・デコ様式を取り入れた、建築美術の上からも貴重なものであり、一年を通して数多くの内外の美術展が催され都民の憩いの場となっている。

## 〔あ と が き〕

『三日野の歩みとその界限』の編集を終わりホッとしているところです。しかし、開校七〇周年同窓会記念誌として充分に意を尽くせず、その務め過半に終始してしまったように今、感じています。大正、昭和、平成とそれぞれの時代の流れのなかに「三日野」の歴史を辿るとき、この学校に関ってきた多くの人々の汗と涙にみちた悲喜こもごもの物語が秘められていました。小学校時代の六年間は人生の中で決して短いとはいえませんが、少女の幼き頃、三日野に学んだ卒業生たちにとって母校は懐かしき「ふるさと」として心に残ります。改めて母校の足跡をたどり、その界限をめぐるとき、その中に幾つかの新しい発見もありました。しかし、既に多くの資料は散逸し、埋もれかけていました。これを掘り起こして後輩たちに伝え、同窓生の手によって、いつの日にか再び三日野の歩みが書き継がれるとき、この小誌がささやかなバトンの役目を果たせればと思います。三日野は私たち卒業生にとって誇りであり、また、「いつまでも「心のふるさと」としてありつづけてほしいとの願いを新たにします。

本誌の中に誤りの個所があればご指摘いただき、また、新たな資料などありましたらご教示いただいて後の資料したいと思います。今回の編集にあたり、先生方や同窓生から大切な資料を提供していただき、大変に貴重なお話もお聞きすることができました。おわりにあたり、ご協力いただきました多くの皆様にご心より感謝を申し上げます。

【参 考 資 料】

- 区誌「しながわ」(品川区教育委員会・昭和二八年五月発行)
- 「品川区史」(東京都品川区・昭和四八年三月発行)
- 「品川区年表」(東京都品川区教育委員会・昭和五六年三月発行)
- 新版日本史年表(岩波書店・一九八四年九月発行)
- 昭和史全記録(毎日新聞社・一九八九年三月発行)
- 「壇林緑山志」常譽攝門 著(文政二年五月 記)
- 「東京の坂道」石川悌二 著(新人物往来社・昭和四六年二月発行)
- 「山手線各駅停車」…江戸・東京いま、むかし(椿書院・昭和五二年一月発行)
- 「品川区の歴史」「目黒区の歴史」「港区の歴史」(名著出版・昭和五四年六月発行)
- 「品川区史跡散歩」…東京史跡ガイド⑨(学生社・昭和五四年七月発行)
- 「都電の消えた町」(大正出版・昭和五八年六月発行)
- 「明治四年のアンバツサドル」泉 三郎 著(日本経済新聞社・昭和五九年三月発行)
- 「江戸の坂・東京の坂」横関英一 著(中央公論社・昭和六一年一月発行)
- 「死線を越えて」賀川豊彦 著(教養文庫：社会思想社・一九八九年一月発行)
- 「江戸名所図会を読む」川田 壽 著(東京堂出版・平成二年九月発行)
- 創立三〇周年記念誌(第三日野小学校・昭和二七年五月発行)
- 同窓会誌「若帖」(再刊第一号・昭和三三年四月発行／第二号・昭和三四年一〇月発行)
- (第三号・昭和三九年四月発行／第四号・昭和四〇年一月発行)

「三日野」五十周年記念特集号〔昭和四十七年五月発行〕

創立六五周年「三日野」PTA広報一〇〇号記念号〔昭和六十二年六月発行〕「五反田今昔物語」

〔山口直博〕

著・昭和五十二年九月発行

「三日野と池田山」三日野同窓会 冊子（加藤金一 著・昭和五十七年一〇月）

「我が町・中丸」原稿（玉林由光 著・平成四年七月）

### 【資料提供および談話取材の方々】

国広伴六先生〔昭和二年～昭和三〇年在職〕 秋岡 博先生〔昭和二年～昭和三三年在職〕

高木悦男先生〔昭和二三～昭和三十一年在職〕 上村（旧姓・佐伯）豊子先生〔昭和一五年～昭和三三年在職〕

大内敏光先生〔現職校長〕 安尾久子先生〔現職教頭〕

新免（旧姓・今井）千代子さん〔大正一二年卒業〕 中村（旧姓・秋山）富子さん〔昭和三年卒業〕

黒田彦治氏〔昭和一〇年卒業〕 室 康政氏〔昭和一四年卒業〕 橋本 勝氏〔昭和一五年卒業〕

渡辺昭三氏〔昭和一六年卒業〕 沖田利明氏〔昭和一七年卒業〕 玉林由光氏〔昭和一九年卒業〕

半田眞一氏〔昭和二〇年卒業〕 小林（旧姓・西本）礼子さん〔昭和二〇年卒業〕

伊藤晃司氏〔昭和二五年卒業〕 浦部武道氏〔昭和二八年卒業〕 大野薫也氏〔昭和二九年卒業〕

山口直和氏〔昭和三六年卒業〕 大室照道氏〔昭和三七年卒業〕

品川区立第三日野小学校

祝・開校七十周年記念

第三日野小学校校長  
同窓会名誉会長

大内敏光

東京都品川区上大崎一 一九一—一九  
電話 ○三三四四一—六四五二

第三日野小学校  
同窓会会長

佐藤謙次

(昭和八年三月卒業)  
東京都品川区上大崎三 一三四—一三四五  
電話 ○三三四四七—三九八九

第三日野小学校  
PTA会長

塚田成四郎

東京都品川区東五反田四 一七一—四  
電話 ○三三四四七—一一九九

五反田東口町会 町会長

東山幸喜

東京都品川区東五反田五 一七一—一五  
電話 ○三三四四三—〇七八四

池田山会 町会長

中台春満

東京都品川区東五反田五 一二五—一  
電話 ○三三四四二—五九四三

袖ヶ崎町会 町会長

塚本英雄

東京都品川区東五反田一 一二一—四  
電話 ○三三四四五—七七一一

相生会 町会長

伊藤光人

東京都品川区東五反田四 一八二—四  
電話 ○三三四四一—六九五四

上大崎一丁目町会 町会長

渡辺幸雄

東京都品川区上大崎一 一〇一—三二  
電話 ○三三四四九—三五三五

上大崎一丁目愛誠会 町会長

福田綾子

東京都品川区上大崎一 一四一—九  
電話 ○三三四四七—二二九一

上大崎一丁目第一愛誠会 町会長

志田一夫

東京都品川区上大崎一 一五一—六七  
電話 ○三三四四三—七〇〇九

上大崎池の谷町会 町会長

相原一二三男

東京都品川区上大崎一 一五一—二四  
電話 ○三三四四二—五三〇一

上大崎目黒駅前町会 町会長

飯島光夫

東京都品川区上大崎二 一四一—五  
電話 ○三三四四六—六八〇〇

上大崎三丁目町会 町会長

大谷武充

東京都品川区上大崎三 一九一—四  
電話 ○三三四七三—四六一七

夕陽会 町会長

窪田正男

東京都品川区上大崎四 一五—三三  
電話 ○三三四九二—二六三三

目黒駅前西口町会 町会長

井上正次郎

東京都品川区上大崎二丁目二番三  
東目黒ビヤステイ三〇三号  
電話〇三三四九三三八五八〇自  
〇三三四九一八八九四二店

中丸親和町会 町会長

浦部 八郎

東京都品川区上大崎三十五番一五  
電話〇三三四四三二五五二

上大崎長者丸町会 町会長

南 侃

東京都品川区上大崎二十九番二六  
T & Hメモリー二〇〇四  
電話 〇三三四四四一八〇八八

南メグロ・キムラヤ社長  
品川製パン業組合組合長  
上大崎目黒駅前町会顧問

沼田 善男

東京都品川区上大崎三三番一五  
電話 〇三三四四一〇四六九

椎津耳鼻咽喉科医院

椎津 重彦

東京都品川区上大崎三三番一五  
新陽CKビル三階  
電話 〇三三四四二一六三五八

(株) 伊多喜

井瀧 幸雄

東京都品川区上大崎二一五番一五  
電話 〇三三四四一〇二九一九

卒業生

西五反田  
氷川神社・宮司

山口直比古

大正一二年三月卒業  
(第一回 卒業生)  
東京都品川区西五反田五六一三  
電話 〇三三四九一六八六三

新免(今井)千代子

大正一二年三月卒業  
(第一回 卒業生)  
東京都品川区上大崎一三三番一七  
電話 〇三三四四一〇二八二〇

中村(秋山)富子

昭和四年三月卒業  
東京都品川区上大崎三一九番二七  
電話 〇三三四四三二八二〇

田中(田中)ヤエ

昭和五年三月卒業  
東京都品川区上大崎三十七番七  
電話 〇三三四四三二六九八七

加藤 金一

昭和六年三月卒業  
東京都品川区上大崎一九一八  
電話 〇三三四四一九四九五

I W A G E N

岩崎 清一

昭和八年三月卒業  
東京都品川区上大崎三三番一四  
電話 〇三三四四五一〇八〇

有限会社・横川計器製作所

横川 英夫

昭和八年三月卒業  
東京都品川区上大崎一八八番六  
電話 〇三三四七三二〇六三〇

浦部(小林)トミ子

昭和八年三月卒業  
東京都品川区上大崎三五一番一五  
電話 〇三三四四三二五五二

戒法寺

長谷川(吉田)徳子

昭和八年三月卒業  
東京都品川区上大崎一九一八  
電話 〇三三四四一八九七一



# 黒田彦治

昭和一〇年三月卒業

横浜市港北区師岡町一〇二〇  
電話〇四五―五四一―一八〇四

小出屋精米店

# 小出豊治

昭和一〇年三月卒業

東京都品川区上大崎一―一七八  
電話〇三一三四四―一〇九六五

ソーダニッカ株式会社  
取締役

# 西川忠次郎

昭和一〇年三月卒業

横浜市夢区谷田町一―二九四―二三  
電話〇四五―八九三―一四二三

日蓮宗 本立寺 住職

# 中島節也

昭和一一年三月卒業

東京都品川区東五反田三―六一―七  
電話〇三一三四四―一四六五九

# 小関(深澤)千代子

昭和一一年三月卒業

千葉県茂原市千代田町一―一―一〇  
電話〇四七五―二二二―四八六

目黒西口外科医院

# 小林健一

昭和一三年三月卒業

東京都品川区上大崎二―二四一―〇  
島田ビル三三F  
電話〇三一三四九三―〇〇一五

テラー・ハクバ

# 鈴木眞治

昭和一三年三月卒業

東京都品川区大井六―九―一八  
電話〇三一三七七六―一二三九

高石不動産(株)・高石興行(株)  
代表取締役社長

# 高石成一

昭和一三年三月卒業

東京都品川区上大崎二―一五―一〇  
百万\$ビル七F  
電話〇三一三四四一―七三四(代)

# 佐藤(深澤)政子

昭和十三年三月卒業

東京都中央区月島四―一七―一五〇  
電話〇三―三三三―四一〇二八

# 加納寛大

昭和一四年三月卒業

東京都品川区東五反田五―一九―一八  
電話〇三一三四四一―二四八二

日本ビクター株式会社 顧問

# 金子秀

昭和一四年三月卒業

神奈川県三浦郡葉山町堀内一四六三  
電話〇四六八―七五―一三三二五

長崎県知事

# 高田勇

昭和一四年三月卒業

長崎県長崎市立山一丁目一番五五号  
電話〇九五八―二二一―〇〇一

社会保険横浜中央病院  
病院長

# 西村五郎

昭和十四年卒業

東京都豊島区目白二―一九―二  
電話〇三―三九八―一七〇八二

室清証券株式会社  
取締役相談役

# 室康治

昭和一四年三月卒業

神奈川県藤沢市鶴沼藤ヶ谷品一―五―一五  
電話〇四六六―一三―一三七七四

(有)森田電気商会

# 森田繁孝

昭和一四年三月卒業

東京都品川区上大崎一―四一―二  
電話〇三一三四四二―五四四四四

共立電気株式会社

# 大橋(西山)久子

昭和一四年三月卒業

東京都狛江市和泉本町二―一―一七  
電話〇三一三四八―九九―一九八

本願寺

渡邊 昭子

昭和一四年三月卒業  
東京都品川区上大崎一〇一三二  
電話 〇三三三四四九一三五三五

宝蔵寺 住職

鈴木 憲雄

昭和一五年三月卒業  
東京都品川区上大崎一五十二四  
電話 〇三三三四四一三八七九

天台宗・宝塔寺 住職

林 観潤

昭和一五年三月卒業  
東京都品川区東五反田一〇二二九  
電話 〇三三三四四一三三三三

新和電子デバイス株式会社

駒井 文造

昭和一六年三月卒業  
神奈川県横浜市緑区あざみ野三一四一五  
電話 〇四五一九〇二二三一二

財団法人東京交通安全協会

西山 宏

昭和一六年三月卒業  
東京都品川区東五反田三二一八  
電話 〇三三三四四一二八三四

レックス商事株式会社  
代表取締役

山本 景造

昭和一六年三月卒業  
東京都杉並区和田三二八一八二二〇一  
電話 〇三三三三二六九九一六

雪印牛乳・雪印ローリー特約店  
ヤナギ販売店

柳 直治

昭和一六年三月卒業  
岐阜県大垣市桑本町四一〇一一  
電話 〇五八四一七八一六八二四

渡辺工務所

渡辺 昭三

昭和一六年三月卒業  
東京都品川区上大崎一五二三  
電話 〇三三三四四一五九八八

浄土宗 常光寺

大谷 壽雄

昭和一七年三月卒業  
東京都品川区上大崎一〇一三〇  
電話 〇三三三四四一四九三二

「彌市会」会長

関根 元之

昭和一七年三月卒業  
横浜市磯子区杉田五二七十四  
電話 〇四五二七七三〇四五三

ヘヤーサロン・ヒライ

平井 三雄

昭和一七年三月卒業  
東京都品川区上大崎三三三四  
電話 〇三三三四四一〇八三三

小杉商事

小杉 和也

昭和一七年三月卒業  
東京都目黒区三田二七一二五  
電話 〇三三七六〇一〇八八三

沖田 利明

昭和一七年三月卒業  
東京都品川区上大崎三一九一七  
電話 〇三三三四四一三三三一



ヨロズヤ

吉田善太郎

昭和一七年三月卒業

東京都品川区上大崎二一三二三  
電話〇三三四四一五五五三

天台宗・西願寺 住職

相馬觀舜

昭和一八年三月卒業

川崎市高津区堀ヶ谷五一一一三  
電話〇四四一八七七一二七六八

合資会社・増田屋酒店  
代表社員

林泰弘

昭和一八年三月卒業

東京都品川区上大崎二一七一一四  
電話〇三三四四九一一五一一三

株式会社 田中屋  
代表取締役

飯島光夫

昭和一九年三月卒業

東京都品川区上大崎二一四一五  
電話〇三三四四一一六六八

株式会社 丸井住宅  
代表取締役

川口幸雄

昭和一九年三月卒業

静岡県田方郡垂井町南條七四三一  
電話〇五五九四一九二四一三三

久保ビニール工業 代表

久保敦

昭和一九年三月卒業

東京都三鷹市下連雀六一二二七  
電話〇四三二四四一六五四

サカモト・ミュージック・スクール  
校長

坂本博士

昭和一九年三月卒業

(本校) 東京都世田谷区等々力二一七一一八  
電話〇三三七〇三三三七七代

玉林由光

昭和一九年三月卒業

川崎市中原区末月一〇九五一三五  
電話〇四四一四三三三〇〇七

峰岸俊行

昭和一九年三月卒業

東京都品川区上大崎三一九一〇  
電話〇三三四四一三六六三

選擇寺 住職

山本恭雄

昭和一九年三月卒業

千葉県木更津市中央一五一一六  
電話〇四三八一三二二九九三

月窓院 住職

吉田雅男

昭和一九年三月卒業

東京都品川区上大崎一五一一三  
電話〇三三四四二五三〇五

清岸寺

吉田(吉田)静枝

昭和一九年三月卒業

東京都品川区上大崎一五一一五  
電話〇三三四四一六六五四

荒井明

昭和二十年三月卒業

長野県松本市蟻ヶ崎台三三十五  
電話〇二六三三四四一一〇六

肉の松坂

河村富雄

昭和二〇年三月卒業

東京都世田谷区奥沢八一四一六  
電話〇三三七〇一五六五一

第一硝子株式会社  
営業部 課長

沖田和明

昭和二〇年三月卒業

東京都中野区白鷺二五一一五一一二六  
電話〇三三三三八一八五七六

有限会社・花寿司

高田和明

昭和二〇年三月卒業

東京都目黒区中目黒五一一一七  
電話〇三三七二二二三三六

中村 實

昭和二〇年三月疎開先校卒業  
神奈川県相模原市相武台団地五三丁五  
電話〇四六二一五二一九七一

小林たばこ店

小林(西本)礼子

昭和二〇年三月卒業  
東京都品川区上大崎三九一―五  
電話〇三三三四四一〇三二二

(有)松坂屋・伊藤洋服店

伊藤晃司

昭和二五年三月卒業  
東京都品川区東五反田四一八一―四  
電話〇三三三四四一六九五四

とんかつ・とんき・金鮓

吉原克彦

昭和二七年三月卒業  
東京都品川区東五反田一―一五―一  
電話〇三三三四四一〇六七

新倉 勇

昭和二〇年三月卒業  
東京都品川区東五反田三六一―八  
電話〇三三三四四七―三七〇三

やぶそば

矢納正博

昭和二二年三月卒業  
東京都品川区上大崎三二四―二  
電話〇三三三四四一六六八―二

カントー設計事務所

今井基雄

昭和二三年三月卒業  
東京都品川区上大崎一―二三一―八  
電話〇三三三四四一―五四三二

半田税理士事務所

半田眞一

昭和二〇年三月卒業  
東京都品川区上大崎二六一―三〇  
電話〇三三三四四六一〇三二〇

グリーンハウス・ヤオマツ

赤石宗孝

昭和二五年三月卒業  
東京都品川区上大崎三三三―一六  
電話〇三三三四四一―九三〇七

枳屋田端酒店

田端佑治

昭和二七年三月卒業  
東京都品川区上大崎一―四一―二五  
電話〇三三三四四一―九五五三

大成電線株式会社  
大成電線産業

浦部武道

昭和二八年三月卒業  
東京都品川区上大崎三一五―一五  
電話〇三三三四四三―五五二(代)

エイト印刷(株) 営業次長

志田健二

昭和二八年三月卒業  
東京都品川区上大崎一―三二―二  
電話〇三三三四四七―二〇八二

岡部(新免)恵津子

昭和二六年三月卒業  
東京都杉並区下高井戸四一―一―七〇三  
電話〇三三三三〇四―一五〇〇三

村石靖男

昭和二八年三月卒業  
東京都品川区上大崎一―一―一四  
電話〇三三三四四一―〇七〇五





大島(大島)恵子

昭和二十九年三月卒業  
東京都品川区上大崎三十一四一四二  
電話〇三三四四一八七七

村田(足立)洋子

昭和二十九年三月卒業  
川崎市麻生区上麻生〇八七一三六  
電話〇四四一九八七一三三一

榎川なぎ(播本)由紀子

昭和二十九年三月卒業  
東京都町田市南つくし野四一〇一一七  
電話〇四二七一九五〇一五一

針生紫峰

(西川 礼子)  
昭和二十九年三月卒業  
埼玉県日高市高萩一五六七一四〇  
電話〇四二九一八九一四六六七

野口(伊藤)文姫子

昭和二十九年三月卒業  
東京都東大井二一八一五  
電話〇三三四七四一三六四

小柴 顕也

昭和三〇年三月卒業  
横浜市港北区大石戸町三二七七三  
電話〇四五一五四四一五三一三

喜楽庵

山崎(西郡)輝

昭和三〇年三月卒業  
東京都品川区上大崎三三三一一八  
電話〇三三四四一二五四〇

金剛コルメツト(株)

浦部 稲造

昭和三四年三月卒業  
横浜市旭区南本宿町一四四一六八  
電話〇四五一三五一一八二四四

(株)いさみや蕎麦店

塩谷 行雄

昭和三四年三月卒業  
東京都品川区東五反田四一八一四  
電話〇三三四四一九七九六

(株)周益社  
代表取締役

池田 周

昭和三五年三月卒業  
東京都品川区上大崎三三三一一  
電話〇三三四四一六六七七代

長谷川 章

昭和三五年三月卒業  
千葉市花見川区小中台町三五三三三  
電話〇四二二七五一四〇二五

(株)精美堂  
営業局次長

朝倉 文雄

昭和三六年三月卒業  
東京都東品川四一六一七一六〇三  
電話〇三三四四五一三九〇九

熊本大学医学部 助教授

浦野 徹

昭和三六年三月卒業  
熊本市渡鹿一〇九一二  
電話〇九六三三六六一二五六〇

(株)メディア・テクニカル  
取締役・営業企画部長

鈴木 安夫

昭和三六年三月卒業  
(本社)東京都中央区日本橋小網町四一九  
電話三三三三九一二九二代

山手石油株式会社  
代表取締役

中崎 政和

昭和三六年三月卒業  
東京都品川区上大崎三三四一四一九  
電話〇三三四四三六〇一四

雄子神社

山口 直和

昭和三六年三月卒業  
東京都品川区東五反田一〇二一三三  
電話〇三三四四一三三三一



東邦大学第一外科医局長

### 渡辺 聖

昭和三十六年三月卒業  
東京都品川区上大崎三二五一九  
電話〇三三四四三二〇七〇五

野村荘

### 野村(浦部)芳子

昭和三十六年三月卒業  
大分県別府市亀川城の内  
電話〇九七七一六六一〇〇四〇

光取寺

### 大室 照道

旧名(大室 諭)  
昭和三十七年三月卒業  
東京都品川区上大崎一五一一〇  
電話〇三三四四一八三八四

鳥政畜犬店

### 時田 昌朗

昭和三十七年三月卒業  
東京都品川区上大崎二一三一二  
シアイマンション白金1F  
電話〇三三四四六一四一一(代)

日の丸ドライビングスクール  
習熟指導員

### 柳沢 利文

昭和三十七年三月卒業  
東京都目黒区三田一八一九  
電話〇三三七一九一三五五

### 横田 耕司

昭和三十八年三月卒業  
東京都品川区上大崎三一一二三  
朝倉山荘三〇四  
電話〇三三四四六一〇四〇一

### 早崎(長角)和子

昭和三十八年三月卒業  
東京都練馬区東大塚三一五一五  
電話〇三三三九二三五八九三

高島さもの教室

### 高島(鈴木)邦枝

昭和三十九年三月卒業  
東京都品川区東五反田五十三四山本方  
電話〇三三四四三三四〇六二

長寿庵

### 平尾(栗田)藤子

昭和四十四年三月卒業  
東京都品川区上大崎二一七一六  
電話〇三三四九一七五五四

大田区議会議員・保護司

### 鈴木 晶雅

昭和四十六年三月卒業  
東京都大田区大森西一丁三一一五  
エクセル大森三〇六  
電話〇三三七六一七〇〇〇

### 村上(玉林)由規子

昭和五〇年三月卒業  
川崎市中原区木月四八〇  
永塚マンション三〇二  
電話〇四四一四三三一三八三二

### 松浦(玉林)千恵

昭和五十四年三月卒業  
川崎市中原区木月住吉町一七七二  
みはら荘二〇三号  
電話〇四四一四二一一二二七

### 沖田 宏武

昭和五十七年三月卒業  
東京都品川区上大崎三一九一七  
電話〇三三四四一三三四一

### 玉林 勉

昭和五十九年三月卒業  
川崎市中原区木月一〇九五一三五  
電話〇四四一四三三一〇三〇七

### 青木(清水)昭子

東京都品川区上大崎三一九一九  
電話〇三三四四七三二八一一三

### 加藤(小林)文子

昭和四三年三月卒業  
東京都品川区上大崎三一九一五  
電話〇三三四四七四六七一

楽しい暮らしのパートナー  
リビングショップ

I W A G E N

岩崎 清 一 (昭和8年3月卒業)

J R 目黒駅前東口  
イワゲンビル1 F

〒141 品川区上大崎3-3-4  
TEL 3445-1080

目黒西口外科医院

(診療科目・外科・整形外科・皮膚科)

小 林 健 一

(昭和13年3月卒業)

〒141 品川区上大崎2-24-10 島田ビル3 F  
TEL.03-3493-0015

高石不動産株式会社  
高石興業株式会社

代表取締役社長 高 石 成 一

(昭和13年卒3月卒業)

〒141 東京都品川区上大崎2-15-20 百万弗ビル7 F  
TEL03-3444-7324 (代) FAX03-3444-7328

東京証券取引所会員

室清証券株式会社

取締役相談役 室 康 治 (昭和14年3月卒業)

〒103 東京都中央区日本橋兜町1番10号  
TEL.03-3666-1415

天台宗 **宝 塔 寺**

住職 **林 観潤**

旧名 **林 雅昭** (昭和15年3月卒業)

〒141 品川区東五反田1-2-29  
03-3441-2331

天台宗 **西 福 寺**

住職 **相馬 観舜**

旧名 **林 成昭** (昭和18年3月卒業)

〒213 川崎市高津区梶ヶ谷5-11-3  
044-877-2768

**SAKAMOTO MUSIC SCHOOL**

ひとりひとりの才能を豊かに育てます

・声楽科 ・合唱科 ・楽典、聴音、ソルフェージュ科 ・ピアノ科 ・フルート科  
・受験科 ・児童科 ・リコーダー科 ・ドイツ語発音法科 ・幼児科 ・ギター科  
・クラシックバレエ科 ・リトミック科 ・バイオリン科 ・モダンダンス科  
等々カ本校 〒158 東京都世田谷区等々カ2-17-8 03-3703-3377 (代) ・大井町線：尾山台駅2分  
鷺沼校 〒216 川崎市宮前区鷺沼1-11-1 DIKビル 044-854-6581 ・田園都市線：鷺沼駅1分  
三宿校 〒154 東京都世田谷区三宿2-16-12 03-3411-7767 ・新玉川線：三軒茶屋駅12分

校長 **坂本 博士** (昭和19年3月卒業)

クリスタル タワー  
酒類・駐車場

株式会社 **田 中 屋**

代表取締役社長 **飯島 光夫** (昭和19年3月卒業)

品川区上大崎2-14-5  
電話 03-3441-1668



# 半田税理士事務所

税理士 半田 眞一

(昭和20年3月卒業)

〒141 東京都品川区上大崎2丁目6番30号

電話 03-3446-0310

建築設計施工・鉄筋・鉄骨・リフォーム住まいに関する事一切

株式会社 **カントー設計事務所**

今井 基雄

(昭和23年3月卒業)

東京都品川区上大崎1-23-8

電話 3441-5422 FAX 3441-1522

注文洋服・パターンオーダー

修理加工・ネクタイ

(有)松坂屋

**伊藤洋服店**

伊藤光人・伊藤晃司

(昭和25年3月卒業)

〒141 品川区東五反田4-8-14

TEL 03-3441-6954

スペース・コミュニケーション FOR RENT

株式会社

**ニューフジビル**

田中久雄 (昭和25年3月卒業)

〒141 東京都品川区上大崎2-13-35

TEL 3444-6665 / 3441-5311

FAX 3446-5311



あなたは、いま、ほほえんでいますか

グリーン ハウス

# ヤ オ マ ツ

代表社員 赤石宗孝 (昭和25年3月卒業)

東京都品川区上大崎3-3-6

TEL 3441-9307

とんかつ とんき TEL 3441-0627

金 鮨 TEL 3441-1547

五反田有楽中央・お座敷もあります50名位

吉原克彦 (昭和27年3月卒業) 〒141 品川区東五反田1-15-1

## 大成電線株式会社 大成電線産業

浦部武道 (昭和28年3月卒業)

東京都品川区上大崎3-5-15

TEL 3443-5521 (代)

FAX 3443-5523

## 有限会社 日の出屋食品店

須田芳政 (昭和29年3月卒業)

東京都品川区上大崎3-3-6

TEL 3441-9339

土地・建物・マンション・アパート

# 株式会社 周 益 社

代表取締役 池 田 周 (昭和35年3月卒業)

〒141 東京都品川区上大崎3-3-1 (目黒駅東口)

SHUビル1階

TEL 03-3441-6677 (代表)

## 開校七十周年

おめでとうございます

ごぞいます

昭和二十九年三月卒業

旧六年二組女子有志一同

有馬(清水) 澄子

内海(橋本) 和子

大山(大八木) 美子

加藤(立岩) 登志子

加藤 春代

蕪木 明子

鎌田(円城寺) 元子

児玉(犬塚) 靖子

新里(佐久間) 真弓

深井(川尻) 龍子

松原 智恵子

水沢(菅原) 迪子

盛田(田村) 恵津子

吉野(兵藤) 信子

## 祝・開校七十周年

昭和三十四年三月卒業

同期生有志

伊藤 寛雄

志田 和紀

土居 秀夫

山野 忠道

木下(村木) まゆみ

杉山(加藤) 通子

宮野(山口) 伸子

遊佐(中村) 幸子

## 開校七〇周年の年

私たち同窓生は、

第三日野小学校に

保護者として在籍し

ています

昭和三十五年三月卒業同窓生

の「保護者」有志

秋山(清水) 数江

荒居(金田) みな子

石川 英樹

大庭 信子

川田(田島) 栄美子

後上 秀二

土川 史男

藤井(横山) 光子

心も新たにリテールトップバンクをめざします。

〈あ〉からはじまる、あさひ銀行、〈A〉からはじまる、ASAHI BANK。  
あさひ銀行は、リテールトップバンクをめざして、お役に立つサービスや  
価値ある情報をおとどけいたします。

品川区上大崎 3-2-1

TEL 03-3443-6651

## あさひ銀行 目黒駅前支店

活魚・祝鯛・活海老・西京漬け

御中元・御歳暮その他ギフト 御要望により調達

高級鮮魚仕出し **魚 金**

TEL 3443-4049

品川区上大崎 1-21-15

高村 幸 昭

## 久保島ビル

目黒駅前 西五反田

品川区上大崎 2-15-8 TEL 3441-2101

## ケイテイエム株式会社

品川区上大崎 1-1-4

TEL 3444-3437

# コスモ石油

小浦石油株式会社  
クレール池田山SS

品川区東五反田5-1-1  
TEL 03-3443-1475

営業時間 7:00-22:00  
日・祝日 9:00-18:00



給排水衛生設備工事

## (有) 近 藤 工 業

代表取締役 近 藤 圭 介

品川区西五反田2-24-7  
TEL 3491-2231

酒 ・ 食 品

## さかえや 近 藤 酒 店

〒141 品川区東五反田4-9-8

TEL. 3441-9063

5F グルメプラザ

2F ファッションフロア

4F リビングフロア

1F ギフトフロア

3F エレガンスフロア

B1 デリシャスマーケット

10時～夜8時 ・ 第3水曜日定休

〒141 東京都品川区上大崎2-16-9

TEL. 3442-7511

サンメグロ SUNMEGRO



## 中国料理 シェシェ

品川区上大崎1-1-14

TEL 3444-3358

お客様本位の

## 城南信用金庫営業部本店

TEL 03-3493-8111 (代表)

いつもお引立ありがとうございます  
地元の皆様にお役に立つ

## 住友銀行 目黒支店

品川区上大崎2-25-5 (JR線 目黒駅西口前)

電話 03-3491-8111 (代)

目標額100万円 定期積金

目標に向かって

今日からスタート

気軽で温か味のある

## DKC 第一勧業信用組合

目黒支店 品川区上大崎3-2-1 ☎ 3445-0721

# ヨーロッパ 装飾美術専門店

アール・ヌーヴォー ガレ・ドーム等

株式会社 太陽美術

東京都品川区上大崎3-7-3

TEL 03-3449-3355

株式会社 高木

## 高木薬局

東京都品川区上大崎2-15-14 (目黒駅前)

TEL (3441) 1861・(3442) 6633

家電製品販売・電話・電気工事の店

パナリブ

## タチバナ

〒141 品川区東五反田4-10-11 TEL 3447-3569  
FAX 3447-6719

JR目黒駅 東口前

## だるま鮨本店

出前致します PM12:00~PM11:00 火曜日定休  
20名様位までの御座敷有ります。

TEL (3473) 4715・(3446) 6036

# 株式会社 ト ス

東京都世田谷区池尻2-31-20

TEL 3411-7007

# 戸田歯科医院

戸田正甫(校医)

品川区上大崎2-13-28

西崎ビル1階(JR目黒駅東口)

TEL 03-3446-4305

ドライクリーニング専門店

# ニューワールド

品川区上大崎3-5-4 田中ビル1F

AM 8:30~PM 7:00

TEL 3473-0356

よりよい  
くらしのために  
私たちを  
お役立て下さい。

# 富士銀行

目黒支店

東京都品川区上大崎3-1-3

TEL 03-3441-5131

メガネ・コンタクトレンズ・補聴器

## 株式会社 フシミ眼鏡店

休日 第1・第3木曜日  
営業時間 10:00 a m—8:00 p m  
木曜のみ 6:00 p m

東京都品川区上大崎3-1-6  
TEL 3441-2034

## 株式会社 フォーム印刷社

東京都品川区東五反田5-1-8  
TEL 03-3473-3532 (代)  
FAX 03-3441-9100

HONGKONG GARDEN  
CHINESE RESTAURANT

中国料理

## 香 港 園

東京都目黒区下目黒1-8-8 (JR目黒駅西口2分)  
TEL 03-3491-1641 FAX 03-3493-2641

進学・補習指導

## 目黒英数教室

山田亮三郎

品川区上大崎3-5-4-301 第1・第2田中ビル 森永ビル3階  
TEL 3445-4493



音楽芸能企画全般

## (株) ヨーゾー・エンタープライズ

代表取締役 曲直瀬陽造

東京都品川区上大崎3-1-21 コーポ目黒102

TEL 03-3441-9141

質と買取り

## (有) 横倉屋

品川区上大崎3-1-10

TEL 3441-8524

## (有) ラクーンエンタープライズ

神奈川県平塚市

TEL 0463-54-3300

・・・いけ花教室へのご案内・・・

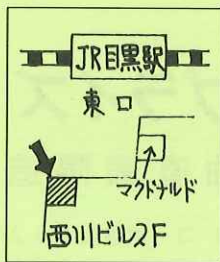
風にさそわれて 花あそびしませんか

上品に自然を生ける……広山流

場所／目黒八幡神社（JR目黒駅東口より徒歩1分）

日時／毎月第一、第三火曜日 月謝／¥6000（花材料込み）

広山流理事 渡辺春琴 TEL 3443-4066



# とんかつ とんき

営業時間：AM11:00～PM10:00  
TEL：3443-1577, 3442-7888  
月曜日定休

## 渡辺工務所

渡辺 昭三 (昭和16年3月卒業)

〒141 東京都品川区上大崎1-5-3  
電話 03-3441-5988

小動物診療

## 朝倉動物病院

獣医師 朝倉 通彦 (昭和29年3月卒業)

〒141 東京都上大崎2-13-26  
電話 03-3441-6550 (代)

時代先取りの電子組版システムで不可能を可能に変える。  
ワープロ入力済みフロッピーで多彩な紙面作りが行えます。

冊子・新聞・一般印刷物…ご相談・お見積り お気軽に！

## 森川印刷所

営業時間 9:00～18:00 日曜・祝日 休業  
TEL. 3445-6625 FAX. 3443-6846